
炎獄の娘

青峰輝楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎獄の娘

【Nコード】

N0024W

【作者名】

青峰輝楽

【あらすじ】

守護の炎に護られた聖都アルマヴィラで、領主ルーン公爵の娘ユーリンドは、優しく聡明な両親と兄、幼い頃から憧れ続けた許嫁の従兄らに見守られ、平和と愛情に満ちた日々を送っていた。

だが、領内で起きた陰惨な事件を機に、一家は思わぬ運命に絡め取られてゆく。

黄金色の髪と瞳を持つ美しい双子の公子と公女、思慮深い黒髪の従兄、黒い瞳の気丈な侍女。国中を揺るがす大きな陰謀の渦に翻弄される四人を軸に描く長編ファンタジー。

自サイトからの転載です。

序（前書き）

時間の無駄にはさせない本格派ファンタジー、を目指しています。
読んで下さい。

序

その細い身体に伝わるのは、ただ軋む馬車の鈍い振動ばかり。私はどこへ向かうのだろうか…どこへ、連れてゆかれるのか。光は、みえない。

厚いヴェールに隠された若い娘の貌は無残に焼け爛れ、癒着した眼瞼に閉ざされたひとみは、どんな光景をとらえることも、最早あり得ない。

恐怖の為に色彩を失った、かつて美しかった、いまは老婆のような髪をきつく結いつめて、固くそのくちびるを閉ざしたまま、娘は座っていた。

大量の煙を吸い込んだ為、声を出そうとすれば、灼けつくような苦痛が訪れ、その上、聞き取るのがひどく困難な割れた声が微かに絞り出されるだけ。

姉が、そつとその細い手を傍らから握ってくれた。

「もうすぐ到着致しますよ、ユーリンダさま」
微かにヴェールを揺らし、了解の意を伝える。

「……少し、風を入れたらどうかしら、リディア？」

同乗している侍女長の声がした。
握った手が離れた。馬車の窓が開く音がする。

窓から新しい風がひとすじ吹きこみ、それによって、馬車に併走している騎士の声の流れれ込んできた。

「開門を願いたい！ こちらの馬車は、アルマヴィラより御祝賀の使者、アトラウス・エル・ガレリア・ルーン伯爵夫人、ユーリンダ・エル・ガレリア・ルーンさまの乗車である！」

ここに、幸福な家族の肖像があった。

家族は4人。

黄金の髪と瞳を持つその家族のひとびとは、可笑しいくらいに互いによく似通っていた。

山間の穏やかな都市、しかし、領内の金鉱からの富と、光神ルルアの大神殿への絶えぬ参拝客とによって、豊かに栄える地方、アルマヴィラ領主アルフォンス・ルーンと、その妃カレリンダ、二人は同年の36歳。

夫妻は実際の年齢よりかなり若々しく、特にカレリンダは、17年前に双子を出産した後、結局子供を身ごもらなかったこともあって、まだ若い娘と言っても通りそうな艶やかさで、絶世のと賞されるその美貌に、気さくで柔らかな笑みを絶やさず、崇拜する夫を見上げていた。

聖炎の神子と呼ばれ、民と都を守護する魔力を持った美しい妻を、激しい恋に落ちた18年前と何ら変わらぬ愛情を持って見つめるアルフォンスは、人を惹きつけてやまぬ明るい眼差しを持った凛々しい青年貴族だった。黒髪黒目の民が大多数を占めるこの地方で、統治者一族の証である同じ瞳と髪の黄金色のせいもあり、従妹である妻と、兄妹のようにも見えた。

そして、当年17歳の公子と公女。両親の美点を余すところなく受け継いでいるようなこの双生児は、どちらも中性的なところはまるでないにも関わらず、成長した兄妹としては珍しいくらいに、鏡に映したように似ていた。

世嗣のファルシスは、剣、とくに細剣の名手として知られる父に対し、そのどちらかといえば細身の身体に似合わぬ大剣を、自らの一部のように操る名剣士であった。幼い頃から、次代の領主として恥じぬだけの教育を施され、また大貴族らしからぬ自由な気風の父

の理念をよく受け継ぎ、若年ながらもその統治者としての資質を評価され始めていた。但し、母方の血に濃い魔力のほうは、まるでと言つてよいほど持ち合わせていなかった。そして、その性格に関しては、どちらかといえば生真面目で実直な両親や妹に比べ、調子がよく、気休に見え、それでいて本心を窺わせぬようなところがあった。

妹姫のユーリンドは、両親と兄、周囲のひとびとすべてに愛されて育つた少女だった。疑うことも憎むことも学ばず、他者の幸福を我が事のようによこごび、悲しい話を聞けばその感じやすい大きな瞳から大粒の涙を溢れさせた。類をみないほどの素直なこころの持主。それは、悪く言えば、単純、ということでもあった。その情深さは、時として、彼女に比べ余りにも恵まれない者にとり、無神経と感じられる場合があつたのだ。だが、余りの邪気のなさに、本心から彼女を悪く思うことは、多くの者にとつて不可能だった。

年頃の貴族の娘、そして母親譲りと評判の美少女ともなれば、普通ならば他都の多くの貴族の若者からの求婚が絶えない事であつたらう。しかし、ユーリンドには既に定められた許婚があつた。父の弟の息子アトラウス。従兄にあたるこの青年との婚約は、政治的なものではなく、熱烈な恋愛によるものだった。こどもの頃、初めて会つたその日から、ユーリンドは、物静かな深い闇色のひとみの従兄に憧れてやまなかつたのだ。

その日の午後、珍しく、多忙な父親と息子がどちらも揃って、母娘とお茶の時間を持つ事が出来たので、カレリンダ妃は良い機会と思い、ユーリンダ付きの侍女リディアを呼び寄せた。

このリディアは、子供の頃から館に奉公に上がり、幼いうちから控えめながら機転が利き、芯が強く忠誠も篤い事、また、双子の公子公女と同年という事もあって、一家の寵愛を受け、特にユーリンダとは、姉妹同然の絆があると云って過言ではなかった。

くるくるとよく動く大きな黒い瞳と絶えることのない笑顔、女主人に劣らずほっそりした身体を持った健康な17歳のこの娘は、ユーリンダに比べるには平凡であるとしても、なかなか美しく魅力的であった。

白壁に東方シルクウッドから贈られた色鮮やかなタペストリーが飾られ、床には色鮮やかな込み入った柄のカーペットが敷き詰められた明るい室内に、こざつぱりした紺のお仕着せを着たりディアが遠慮がちに入ると、カレリンダ妃は、穏やかな口調で主に夫と息子に向かって言った。

「わたくしも昨日聞いたばかりですが、リディアに良いご縁があって、再来月に嫁ぐ事になったそうですの」

「ほう、それは良かった事だね。リディアもそんな歳になったのかね」

朗らかに公爵が言った。

「だってお父様、リディアは私と同じ歳ですもの」

既に話を知っているユーリンダが、やや意味ありげに答えた。意味ありげ、というのは、翌年には彼女自身が、許嫁のアトラウスとの挙式を控えた身である事を含んでいるのだった。

「そうだったね。おめでとう、リディア」

気さくな領主の言葉に、リディアは深々と頭を垂れた。

「勿体ないお言葉……ありがとうございます」

顔を上げながら、彼女はちらりと領主の息子の方を窺った。

ファルシスは、関心なさそうに茶を啜っていた。幼い頃は、妹と共に遊び戯れた間柄でも、今や数多の美姫の間でももてはやされる身、一介の侍女の縁談などには、何の感慨も持ちようがない様子であった。

「ね、リディア、素敵なしとなのでしょうね？」

既に何度も繰り返した問いを、ユーリンドは発した。

「とんでもございません……。田舎で商いをしているしがない中年男でございます」

これまた、何度も答えている台詞をリディアは口にした。

まさしく、その通りなのである。よくある話だが、田舎に住む彼女の親が主に金銭面で何かと世話になり、娘を後妻に欲しいという話を断りきれなかった、というだけのことである。

リディアは、婚約者とまだ一度しか会った事がない。勿論、嬉しい筈もなかった。

公爵夫妻に相談すれば、何とかなったかも知れない。しかし、彼女の気質がそれを拒んだ。

世間知らずの公女は、結婚とは皆祝福に包まれた素晴らしいものだと思っている。様々な脳天気な質問を向けてくるが、そうした彼女の性質を知り尽くしているリディアは、不快に思う事もなく、こやかに応じていた。

その時、公爵の甥にしてユーリンドの許嫁であるアトラウスが館を訪れたという知らせが入った。

許嫁に夢中である公女は、もう侍女の縁談など忘れたかのように、そわそわし始めた。

騎士団の行事の件でファルシスに用があるというアトラウスを、

客間に通すよう執事に命じ、自身は別の会議に出席する為、公爵は立ち上がった。

「リディア、あなたは下がって良いわよ」

妃の言葉に、失礼致しますと一礼して退室しようとする侍女の傍らを、ファルシスが通ろうとした。

「ああ、リディア」

ふと思い出したように公子は言った。

「おめでとう。幸せにね」

「ありがとうございます、若様」

リディアは深々と頭を下げた。

階段を下りてゆく兄の後を、ユーリンドが嬉々として追った。

訪れた許嫁に挨拶する為だが、とにかく、愛しいアトラウスの顔を見られると思っただけでも、天にも昇る心地なのである。

客間の扉が開くと、アトラウスは椅子から立ち上がった。

「わざわざ済まないね、アトラ」

にこやかにファルシスが従兄に声をかけると、アトラウスは柔らかな笑みを見せて一礼した。

「こんにちは、アトラ」

「ああ、ユーリィ。ご機嫌は麗しいかな？」

アトラウスは進み出て、はにかんだ様子の許嫁の手に軽く口づけした。

アルマヴィラ領主アルフォンス・ルーンの弟、カルシス・ルーンの世嗣アトラウス。

彼の幼少期は、暗く複雑なものだった。

領主の一族、ルーン公爵家と、神子の一族、ヴィーン家は、元々、この黒髪黒目の民族が住む地方に突然変異で現れた、黄金の髪と瞳を持つ双子の神子の末裔と言われ、血の濃い者は皆、黄金の髪と瞳を持って生まれるのが通常である。

だが、前領主の次男カルシスと、神子カレリンダの従妹ファリア夫妻の長子アトラウスは、血が濃いにも関わらず、一般人と同じ、黒髪黒目の子供として生を受けた。

兄に比べ、極端に貴族としての器量が劣ると陰口を叩かれるカルシスは、妻の不貞を疑い、特に調べもせず、疑いをすぐに確信に変えた。

身の潔白を訴える妻と赤子を塔の一室に、後に子供は引き離して陽の差さぬ地下室に軟禁し、世間には、母子は病で伏せているとし、そのまま5年が過ぎた。

そしてある日、叔父の館を訪れた幼いユーリンダが、兄と共に地下に迷い込み、幽閉された従兄に出会った。

せめてもの情けと玩具だけは溢れるほどに与えられた、虚ろな瞳の少年と手を繋いで、双子が客間に戻った時、カルシスは狼狽し、息子を殴りつけ、地下の部屋に連れ戻した。

その話を侍女から聞いたカルシスの妻は、遂に決断をした。

禁じられた呪法……命と引き替えに、我が身の潔白を証明する呪法。

自らの心臓の血を用いた渾身の術によって、アトラウスは正真正銘の公弟夫妻の息子と証明された。

そこで初めて、カルシスは系図を細かく調べ、稀な例では、血の濃い領主一族にも、黒髪黒目の子供が生まれ得る事を知った。

その後のカルシスは、アトラウスを世嗣と認め、表に出し、重んじた。

後妻に迎えた隣領主の娘が、女の子を出産した後、病に倒れ臥せりがちとなり、男子の出産が見込めなくなった事も関係していたかもしれない。

ユーリンダは、従兄に初めて会った時、まだ4歳だったにも関わらず、その心をすっかり奪われていた。

長じてもその気持ちは変わらず、また、アトラウスの方でも、

今の自分があるのは、ユーリンドダが自分を見つけてくれたからだ」と言い続けた事もあって、アトラウス17歳、ユーリンドダ16歳の年、二人の婚約は成立した。

その翌日の昼下がり。

ユーリнда公女の私室からは、初冬の訪れに相応しからぬ、華やかな娘たちの笑い声が、幾度となくこぼれていた。

腰まで届く豊かな黄金の髪を緩やかに絹のリボンで束ね、華美ではないが惜しみなくレースを使ったゆつたりとした薄桃色のドレスを纏った17歳の姫の、その煌く黄金の瞳には、人生のうちで最も輝かしい季節を迎えた乙女だけに許される、無邪気で傲慢な歡びが満たされていた。

「ねえリディア、このブローチはどうかしらね？あの青いサテンのドレスに合うと思う？」

「そうですねえ……あれもよくお似合いではありませんけど、やつぱり青より、あの、先週ステイラから届いた白はいかがでしょう？」

「うーん、でも、なんだかあれは少し太って見えないかしら？腰のあのリボンがちょっと太すぎる気がするし……」

女主人のその返答に、侍女は声をたてて笑った。

「まあ、姫さま！姫さまが太ってるですって？！そんな事をいったい誰が思うでしょう？まともに目が見えていれば誰だって、姫さまみたいな華奢なかたが他にいる訳ないと思いませんよ」

「そうかしら……でも、アトラは痩せた女性が好きだって、前にフアルが言ってたもの……。少しでも、細く見えるほうが……」

「姫さまがこれ以上細くなったら、女性というより白樺の樹みたいに見えてしまいますよ。そんな事で最近、あまり召しあがらないんですか？いくらお輿入れ前とはいえ、お父様に知れたらこつてり叱られますよ」

つけつけと侍女は言った。ユーリндаは小さく肩をおとして溜息をついた。

「そうね、リディア……その通りかもしれないわね……」

その細い指の間に、銀の台座に美しいサファイアの埋め込まれた大きなブローチを無造作に弄びながら、ユーリンドはやや落ちつかぬげにリディアの視線を避けて、ソファの上に広げられた数着のドレスに目をおとした。

今、二人は、翌々週にユーリンドが、領内の都市ラーランドに住まう母方の一族、ヴィーン家の長老を訪問する為の衣装を選んでいくところだった。

この訪問は、いよいよ四ヶ月後の吉日に、正式に彼女の婚礼が定まった事を報告、招待する為のものであり、新郎となるアトラウスも同行する予定になっていた。勿論二人きりで行く訳ではないのだが、両親や兄と離れて遠出をするのは彼女にとって殆ど初めてである事、そして、愛するひとと二人で何かをする初めての機会である事が、彼女の心をひどく浮き立たせていた。

リディアにしてみれば、幼い頃から知り尽くした従兄妹同士の婚姻であるのだし、今更着飾ったところで大した違いはないのではないかという気もするのだが、恋に溺れている幸せな乙女にそんな思いが通じる訳もない。午前中からずっと、真剣な目つきであれやこれやと気に入りのドレスやアクセサリを次々と引っ張り出していくユーリンドにひそかに微笑しつつも、リディア自身も、次第に我がことのように昂揚した気分になってくるから不思議なものである。

しかし、ふと気づくと、ユーリンドは少し意気消沈した様子を見せ、黙りこんでしまっている。痩せ過ぎだと言わんばかりの自分の言葉が彼女を傷つけてしまったのかと、リディアはいささか慌てた。「姫さま？どうなさいました？」

「リディア……あのね……」

ユーリンドは視線をおとしたまま、やっと聞こえるくらいの小さな声を出す。

「あの……こんなこと言っているのかしら？あの……ね……」
「なんででしょう？」

ユーリンダの滑らかな頬が、微かに赤く、震えている。あまり見たことのない彼女の様子に、リディアも戸惑いながらそっと側に寄った。

「どうなさったんですか、ユーリンダさま？」

「あのね……ああ、こんなはしたないことを言って、呆れないで頂戴ね。こんなこと聞けるのはあなただけなんだから。ね、いつもこんなこと考えてる訳じゃないのよ？」

「？」

「リディア、あなた、その、くちづけって、したことある？」

「……は？」

暫しのいたたまれない沈黙が訪れた。

「いや！もう、リディアのばか！」

呆れたように見返したリディアの視線に耐えきれず、自分から言い出しておきながら、ユーリンダは真っ赤になって侍女の肩を何度も叩く。興奮のために、その黄金の瞳からは涙までつたっている。

その様子を見て初めてリディアは我に返り、我慢できなくなっけてたように笑い出した。

「姫さまったら！何を言い出されるかと思ったら……」

「いや！ いや！ もう、今はなしよ！忘れて頂戴！」

「姫さまも、そんなこと考えるんですねえ……」

「いやーっ！！」

「いったいどうしてまた急にそんなことを？」

「だって……この間あなた達の休憩室の前を通ったら、リリーが大きな声で話してたわ。そのう、今時、愛し合うふたりは手を握ったり、だ……抱きしめたり、そういう……ふうにするのが当たり前なんですって？私は、そういうことはみんな、結婚してからなのだと思うっていただけ……アトラが、二人で庭園を歩いていてもそんな風にしないのは、もしかして、私に女性としての魅力が足りない

からじゃないかと……なんだか心配になって……」

観念したように、ユーリンドは俯いたままで声を押し出すように言った。

今時も何も無いんじゃないかと、リディアはまた吹き出しそうになったが、至極真剣な姫君の様子に、なんとか笑いを収め、どう答えたものか思案を巡らせた。

「まあ、姫さま、それは、高貴な方々は、私どもと同じような訳にはいかないでしょう」

「そうなの？」

「そうですね。アトラウスさまはきつと、姫さまがあまりに純粹でいらつしやるから、遠慮なさっているんでしょう。立派な貴公子はそんな軽々しいことはなさらないんですよ、きつと。……まあ、例外なカタもおられるようですけど」

例外、とは誰のことを指すのか、二人にとっては言わずもがなののである。

ユーリンドの兄フルシスは、数多の年頃の良家の子女にもてはやされる身、そして、女性からその気を匂わせれば、必ずしも紳士として終始振る舞う訳ではない、というのが、彼に対していつも囁かれる評判である。

但し、相手は、遊び慣れ、洗練された女性ばかりで、未だ真剣な交際というものは無いようで、彼に傷つけられたり恨んだりしている女性の話は、聞かれない。

「そうかしら？」

少しほっとしたようにユーリンドは顔を上げた。

「そうですね。姫さまみたいな美しいカタが魅力がないなんて、そんなばかなことでお悩みになるなんて、誰も思いつきませんよ。ああ、私が痩せすぎの話をしたからですよね。今よりもっとお痩せになったら、の話です。もう少し何でも召し上がらないと、お身体を壊してしまうのでは、と心配していたものだから、余計なことを申し上げてしまいました。申し訳ありません」

「そんな、そんなことはいいのよ。ただ、リディアに聞けば、何が普通なのか判るかと思って……」

「でも、私もそんな経験はないですよ、残念ながら」

「……ほんと？」

ユーリンドアはおずおずとリディアの顔を覗き込む。リディアは苦笑しながら言う。

「年中姫さまのお側にいるのに、僅かな間にそんなことができるほど私は器用じゃないんです。それに、今では許婚もいる身ですし」「あら、だって彼とは……？」

尋ねかけて、ユーリンドアはこれ以上突っ込んで聞くのははしたないかと思い、口をつぐんだ。

リディアは、何も言えなかった。

婚約者とは、親に一度引き合わされたのみ、の間柄である。年齢もかけ離れたこの婚約に、ユーリンドアの思うような甘い雰囲気が存在する筈もなかった。

だが、それを言えば、彼女の夢を壊す事になってしまう。

この姫君の純粹さを、ひたすら愛しているリディアである。それを少しでも傷つけるような事は、絶対出来なかった。

「まあ姫さま、私どもにはこれからいくらも時間がありますし、姫さまとアトラウス様だってそうじゃないですか。これから、結婚されて、甘い新婚の時期を過ごされるんですよ。そして、可愛いお子様がたくさん、お生まれになる事でしょう。その時が楽しみですよ」
そんな風のリディアは言った。

そうね、と公女は答え、侍女の言う未来に想像を巡らし、心を浮き立たせた。自然に笑みがこぼれてくる。

そしてまた、二人の会話は、ドレス選びへと戻っていった。

翌日の朝、実家から手紙が届き、リディアは、ユーリンド公女に十日間の休暇を願い出た。

再来月に控えたささやかな挙式の前に、この地方の風習として、婚約した二人が、生まれた街の地方の神殿に詣でる必要がある。これは、婚儀と同等の意味を持つ。その為の帰省が必要だったのだ。

暖かい昼の日差しに包まれた白亜のテラスで、公女は僅かに瞳を翳らせた。

「まあリディア、十日もいないなんて寂しいわ」

「申し訳ありません、姫様」

「ううん、いいんだけど……。お嫁入りの後は、今までみたいに一緒にいられないのだから、慣れないといけないわね。でも、ラーランドへ発つ前には、戻ってきて頂戴ね」

ユーリンドはやや曇った笑顔を侍女に向けた。

リディアは、結婚後も、月に数日、色々な手伝いの為という事で傍仕えを続ける事にはなっていたが、田舎の金貸しの後妻となる彼女にとっては必要な事ではなく、ユーリンドの柔らかな懇願によるものだった。

幼い頃から常に共にあったリディアは、今後当然変わらず傍にいるものと思っていたユーリンドは、この結婚話に、一抹の寂しさを覚えない訳ではなかった。

しかし、芯から善良で夢見がちな性質を持つ公女は、だからといって全く悪くとらえる事はなく、心から侍女の縁談を祝福し、その幸せを願ってもいた。

「そうだわ、リディア。ソルト殿に会うなら、私のあの銀水晶のネックレスをつけていったらどうかしら。とても似合うと思うもの。」

ソルト殿もきつと喜ぶわ」

ソルトとは、リディアの許嫁である。

「え……あの、姫様の16のお誕生日にご両親から贈られたネックレスですか？ そんな、とてもお借りできません！」

リディアは仰天して断った。

この地方では、女性の16の誕生日は、婚姻可能な大人として認められる、特別な祝いがあり、銀水晶の装飾品は、娘の末永い幸福を願って両親から贈られる、意味の深いものである。

「いいのよ。あの銀水晶は、私の髪より、あなたの黒髪に映えるんだし。あなたは、私の姉妹同然ですもの。お父様やお母様も、別にお怒りにならないと思うわ」

「そんな……」

リディアは躊躇した。

公女のこうした性格は熟知していた筈だが、もともと、婚約者に会うのに飾り立てて行きたい気持ちなど欠片もない彼女にとっては、ただ困惑するばかりの申し出だった。

しかし、ユーリンドは、リディアの婚約者に対する気持ちは、自分が自分の婚約者に抱く気持ちと等価であると信じてやまない。

寢所に入っていくと、自ら宝石箱の中から、大切なネックレスを取りだし、侍女の手に握らせた。

「拳式の時も身につけてほしいけど、ずっと持っているのも気になるのだったら、一旦返してくれてもいいから、とにかくつけてちょうだいね」

そこまで言われると断りきれず、困惑しつつもリディアは、公女の気持ちをありがたく頂く事にした。他所の公爵家の姫君方には、考えられない事だろう、と心中思いながら。

この公女の、あどけなさ、真白さを、リディアは愛していた。

公女の気持ちを傷つける事など、彼女には、考えられなかったのだ。

その夜。

帰省の支度をしていたリディアは、エプロンのポケットに入っていた筈のものが無い事に気づいた。

許嫁からの手紙。今回の、神殿への参詣についての連絡だった。必要な事のみを羅列した素っ気ないもの。

リディアと婚約者は、熱烈な恋愛関係にあると信じてやまないユーリンドアあたりが見たら、言葉を失うような代物だ。

しかし、身の回りの世話をし、子供を産む後妻となるなら誰でもよいと考えている、初老の許嫁の胸のうちをよく理解しているリディアにとっては、特に驚くにあたらない内容と言えた。

ともかく、手紙がないと、身支度や色々な面で支障が出る。

リディアは己の行動を思い返し、夕刻にダイニングルームの片づけを手伝った際に落とした、という可能性が強い事に思い至った。

侍女頭に断った上で、静かにダイニングルームの扉を開けて入り、かがんで掃除をした場所に灯火を向けた。

……なかった。

困ったなと溜息をつきながら身を起こした時、驚きの余り飛び上がりそうになった。

「これを探しているの？」

暗がりの中で、突然声がしたからだ。かろうじて悲鳴を飲み込んだ。

「……若様」

星明かりの下のテラスから、ゆっくりとファルシス公子が入ってきた。右手に、リディアの捜し物を掲げている。

「は、はい。申し訳ありません。ありがとうございます」

まだ心臓を激しく打ちながらも、深々と礼をし、手紙を受け取るうとした。

だが、ファルシスは手紙を持った手を、すっと引いた。

「大事な物？」

「？ は、はい。」

「ふん……こんな冷たい手紙を寄越す許嫁が大事なのか」

その言葉に、リディアの頬が僅かに紅潮する。

一介の使用人に過ぎないリディアには、落とした手紙を公子に読まれたからと言って、声を大にして抗議する権利はない。

だが、私的な手紙を読まれた上、そんな突き放した物言いをされて、嬉しい筈もなかった。

何か言いたかったが、適切な言葉が思いつかず、ファルシスの目を見ずにただ、

「はい……」

と呟いた。

「結婚が嬉しい？」

「……はい」

「許嫁は優しい？」

「……はい」

「そうか。よかったね」

ファルシスは緩慢な動作で手紙をリディアの手に押しつけた。

公子の手は温かった。

「若様」

思わず何も考えずに口走り、慌てて次の言葉を探した。

「ありがとうございます」

ファルシスの右手とリディアの右手は、許嫁の手紙を挟み、指先が触れ合った。

……この温もり。

リディアはふと、想いが胸に込み上げた。

この温もりを指先にしまっておけば、嫁ぎ先でいかなる辛い事があっても耐えられる。

手紙を落としてよかった。こんな温もりを得られた。リディアは幸福な気持ちだった。

身分の上下も僅かに意識するのみ、子犬のようにじゃれていた時代から、リディアはファルシスを慕っていた。

生涯、想うのはファルシスただ一人。

幼い頃から、なぜかそう判っていたのだ。

長じるにつれて本心を仮面で隠し、如才なく穏やかに他人と接し、高貴な姫君と華やかな浮き名も流す公子に、何も言える筈もなかったけれど。

触れ合った掌を、ファルシスはぎゅっと握った。

「若様？」

ファルシスはいきなりリディアを抱き寄せた。触れ合った掌が熱くなった。

「リディア。嫁入りなんか、するなよ。」

くぐもった声でファルシスは言った。黄金色の髪がふわりと揺れ、抱き寄せられたリディアの頬にかかった。

「傍にいて欲しい……。本心で口をきかなくなってから、何年にもなるけど、ぼくはずっと、お前を見ていた。何の飾りもない頃から知っている、お前の優しさや曇りのないところに、ぼくはずっと救われていた……」

「ファルさま……？」

幼い頃の呼び名を口にし、驚きながらもリディアはそっと左手をファルシスの背に回した。これくらい……これくらいなら、許されるか、と思いつつながら。

信じられないくらいに幸福だった。今すぐ、死にたいくらい。

両の瞳から涙が溢れた。

「ファルさま……」

きつく抱かれ、初めての口吻を交わした。

永遠に思える一瞬の後、リディアは自分から身を離した。

「リディア？」

「若様。リディアは幸せな気持ちで嫁げます。若様もどうか、素敵な姫君を娶られて下さいませね」

微笑んで、そう言えた。

嘘ではなかった。

「でも、リディア、お前は許嫁の事を好きな訳じゃ……」

「リディアはもう、一生分の幸せを得ています。これより後は、若様の幸せがリディアの幸せでございます」

そう言うと、身を翻し、扉へ向かった。一歩踏み出す毎に、涙が一粒ずつ、こぼれ落ちたけれど。

それでも、リディアは、かつて味わった事のない幸福感を覚えていたのだった。

翌朝、リディアは公妃と公女に出立の挨拶をしに、二人のいる談話室を訪れた。

公妃が言った。

「気をつけて行くのですよ。最近、領内で、若い娘が行方不明になる事件が頻発しているそうなのです。殿が、昨夜そう言ってそなたの身を案じておられました」

「恐れ入ります。わたくしなどの為に、殿様からそのような勿体ないお言葉を頂くとはいけません。気をつけて、必ず姫様のお傍に戻って参ります」

深々とリディアは一礼した。一介の侍女に過ぎないこの身を、大貴族である領主が案じてくれるとは、本当に有り難い事である。

ルーン公の人柄は、下のひとびとに対する、こういった細やかな様々な配慮に、いつも表れていた。

リディアは、公に命を救われた経験さえあるのだ。

まだ幼い子供だった頃、領内の別荘に一家と共に滞在していた時、公子・公女と、近隣の子供数人で、館の裏の林で遊んでいて、危ないので行っではいけないと言われていた小川に、行ってみようと言った公子と公女を止める事ができず、一緒に行ってしまった。

そんな事は全く初めての経験だったユーリンドは、川の事など何ひとつわからずにはしゃいでいて、深みにはまりかけた。

ファルシスはたまたまその場におらず、他の子供たちはおろおろするばかり、リディアは頭が真っ白になりながらも、何とか公女を救い出したが、代わりに自分が溺れてしまった。

意識が遠のき、そしてやがて戻ってきた。

彼女の視界にまず入ったのは、領主の心配顔。

「大丈夫かい、リディア？」

公爵の黄金色の髪と衣服は、水に濡れていた。

後から知ったのだが、子供の一人が館に大人を呼びに行き、たま庭園に出ていたルーン公がまず駆けつけ、川に入って、溺れたリディアをひきあげたのだ。

理性が戻ってくるにつれ、束の間赤みのさしかけたリディアの頬は、また蒼白になった。

リディアは飛び起き、平伏した。

「も、申し訳ありません！ わたし……姫様を危ないところへ……。姫様は？！ ご無事でしょうか？！」

「ユーリイは大丈夫、ぴんぴんしているよ。水も殆ど飲んでない」にこやかに公爵は言ったが、リディアはがくがくと震えていた。公女を危険な目に遭わせてしまった。きつい罰か、さもなければ追い出されてしまいかも知れない。子供ながら、そんな風に考えを巡らせたのだ。

アルフォンス・ルーンは、目の前の、濡れそぼった小さな子供の頭の中の恐怖にすぐに気づいたようだった。

そして、かれは言った。

「娘の命を救ってくれてありがとう、リディア。お前は、泳いだ事もないのに、勇敢に飛び込んでくれたそうじゃないか。本当に感謝しているよ」

「……殿さま」

「うちの二人が駄々をこねた事くらいわかってるよ。目を離していたファルシスも本当にいけない。お前は、何も心配しなくていいんだよ」

リディアは、遂に、泣き出してしまった。公爵は優しく頭を撫でてくれ、誰かに、この子に着替えを、と言っているのが聞こえた。

大貴族である自分の衣服はまだ濡れているのに、幼子の風邪の心配をしてくれたのだ。

幼いリディアはその時、はっきりと己に、一家への生涯の絶対の忠誠を誓ったのだった。

「若い娘が行方不明、ってどういう事ですか、お母様？」

ユーリンダの声で、リディアは瞬時の回想から離れた。

「ええ……領内、特にこの都の付近で、未婚の娘がもう十人以上も姿を消しているらしいのよ」

その事件の事は、リディアも噂話で聞いていた。だが、深窓の姫君は初耳のようで、恐ろしそうに身体を震わせた。

「まあ……恐ろしいわ。彼女たちが無事にいるといいわね。リディア、帰るのは少し先に延ばせないの？」

「ユーリイ、我が儘を言つてはいけませんよ。リディアの大事な用事なのだから。人気のないような場所に行かなければ大丈夫ですよ。ちようど同じ街に用事のある者がいて、一緒に馬車で行ってもらう事になっているし」

公妃のこの配慮については、前日に聞かされており、リディアはこれについても深く感謝していた。

「本当にありがとうございます。姫さま、心配なさらなくてもリディアは大丈夫です。すぐに帰って参りますよ」

支度を整え、馬車寄せの所まで歩いて行く時、どこからユーリンダの声がした。

二階のテラスから、リディアに向かって手を振っている。

離れた所から大きな声で呼ぶなんて、はしたない行為だが、ユーリンダは、普段はとてもしとやかな姫君なのに、親しい人の事を思うと、突然驚くような自然体を見せる時がある。

リディアは微笑み、行って参ります、と叫んだ。

雲ひとつない、青い空だった。

気持ちの良い風が吹いていた。

澄んだ日差しを受けて、ユーリンダの黄金色の髪が、美しく輝いていた。

浮き立つような明るい空。

住み慣れた館と愛おしい姫君。

それは、何度も見た光景で、これからも、何度も目にする筈だった。

そうではないなんて、この時、リディアは思いもしなかったのだ。

アルマヴィラ領主ルーン公妃カレリンダは、領主夫人である事と合わせてもうひとつ、重要な役割を担っている。

『聖炎の神子』。

夫であるアルフォンスが、経済・治安・外交・軍事など諸々の面で都と領地を統べているのに対し、彼女は、このアルマヴィラ地方特にアルマヴィラ都の魔力による守護、という責任を負っている。

アルマヴィラ都の外壁を、ぐるりと取り巻く黄金の炎……悪しき者以外には全く熱を感じさせない『聖炎』を、魔力に依って維持し、地方を護っているのだ。

遡る事約300年前、この地方は、まだ金鉱も発見されておらず、小さな貧しい村がいくつか、点在しているような処だった。

この地方の人間は皆、黒髪に黒い瞳を持つ。これは、この地方で信仰されていた地の神ノノスの祝福を受けたあかしとされた。

王都エルスタックやその他開かれた都市では、主神ルルアが常に第一の信仰の対象であったが、田舎では、ルルアより格の低い神が崇められる事も多い時代だったのだ。

それ故に、黒髪黒目以外の人間は『地を踏む資格なき者』とされ、他の地方の、他の身体的特徴を持つ人々とは殆ど交わらうともしない、頑なに閉鎖的な地域となっていた。

そんな時代のそんな村の長の妻が、双子の赤子を産んだ。

瓜二つのその姉妹は、祝福の色である黒を持たず、黄金色の髪と瞳を持っていた。

呪われた子……父親である村長はそう受け止め、我が子を殺す為の刃を向けた。

だが、その刃を、出産を終えたばかりの妻が身体で受けた。

本来情の深い男であった村長は、妻の死を悼み、妻の為に、その呪われた娘達のいのちをとるのを止めた。

但し、家の奥深くの一室に閉じこめ、決して出てはならぬ、と言った。

呪われた身で、決して地を踏んではならぬ、と。

娘達が15になった年、地方に、かつてなかった恐ろしい疫病が蔓延した。その村でも、多くの者が床に伏し、苦しみ、死んだ。

誰かが言い出した。この災いは、あの呪われた娘達のせいだと。

その声は、すぐに村の声となった。

虐げられながらも、誰をも恨まず真っ直ぐな心を持って育った娘達を、その頃には慈しむ気持ちも持ち合わせていた村長だったが、そうなってしまうては、長の責務を果たさない訳にはいかない。

娘達は、処刑の為に、表に引き出された。

生まれて初めて踏む土。その上に、呪われた血を流し、村人は狭量な神に慈悲を請う心算だった。

父親の剣が、躊躇いを含みながらも姉娘の胸元に振り下ろされた時。

黄金色の炎が、娘の身体を包み、その炎に触れた剣は忽ち灰となったのだ。

手と手を繋いだ双子の姉妹を、光り輝く黄金の炎が包むと、二人は静かに歩き出した。

地を踏む毎に、二人の足裏がじりじりと焦げるのは、小神の意趣返しに他ならなかったが、姉妹は苦痛の貌も見せずにそのまま、村の外壁に沿って歩き続けた。

壁の上に、不思議な黄金の炎が燃え始め、その炎がぐるりと村を囲んだ時、娘たちの足は焼け爛れていたけれど、村のすべての病人は癒されたのだった。

そして、空から、誰も見た事のないような美しい光が射し、その光は娘たちの足を元通りにした。

その時、全ての者は、娘たちが、ノノスより遙か上位の神、太陽

神ルルアの遣わした者である事を悟ったのだった。

その後、二人は他の村の全ての病人をも癒し、姉娘のアルマはやがて村長を継ぎ、更にはその地方を統べる者となった。

妹のエルマは、新たに建立されたルルアの神殿の長となった。

アルマの子孫はやがて代々、後にアルマヴィラと呼ばれる事となったこの地方の領主となり、エルマの子孫は代々、アルマヴィラ都を囲む聖なる黄金の炎を灯し、アルマヴィラ地方の繁栄と平和を護る聖炎の神子を引き継いできた。

……アルマヴィラ地方に語り継がれる伝説である。

伝説の全てが真実か、それともかなりの誇張が含まれているのかは不明だが、少なくとも、現アルマヴィラ領主の一族であるルーン家がアルマの子孫、ルルア神殿の長や聖炎の神子を継いできたヴィーン家がエルマの子孫である事は、系図がしかと証明している。ヴィーン家の長男は、代々ルルア神殿の長となり、生涯独身である。

家長は、聖炎の神子を継ぐ女子であり、近い血筋の家から婿を取り、血を薄める事のないよう、家を存続させてきた。

そんな中で、聖炎の神子であるカレリンダが、領主、当時は領主の嫡男だったアルフォンスの妻となったのは、両家の歴史の中で、未だかつて起こっていない出来事であった。

無論、両家の年長の者たちは皆反対した。

しかし、カレリンダを生涯唯一人の相手と確信したアルフォンスは、己の力で彼女を得る事に成功した。

アルフォンスは、王都に出向き、3年に一度の御前試合で見事に勝ち抜いたのだ。

国一番の勇者と謳われる、金獅子騎士団の若き長ウルミス・ヴァルディンをも倒した若き貴族に、国王はどんな望みをも叶えようと言い、アルフォンスはカレリンダとの婚姻の許可を願った。

器の広さを示しながらも、内心ではどんな富を願われるかと警戒していた王にとって、これほど易い願いはない。

かくして、王の許しを得たアルフォンスを止め得る者はなく、聖炎の神子は領主夫人となった。

但し、ヴィーン家の年寄りたちは、条件をつけた。

二人の間に生まれる次代聖炎の神子となる女子は、ヴィーン家の男子と縁づけ、ヴィーン家に返す事。

いかに優れた若者であっても、アルフォンスもカレリンドも、まだ十代で、己の恋に心を奪われた男女であった。

女子も何人が生まれれば、ひとりくらいはヴィーン家の者と相思相愛になる事もあるう、と楽天的に考え、二人はその条件を飲んだ。

しかし、男女の双子を産んだ後、どうやら妃はこれ以上子供を授かる事の出来ない身体になつたらしいと悟つた時、夫妻は長女ユーリンドの行く末を思つて心を痛めた。

特に、ユーリンドの、従兄アトラウスに対する想いが真剣なものであると知つてからは尚更であつた。

ところが、あえて不謹慎な言い方をすれば、ユーリンドにとつて実に幸いだった事には、彼女の婿候補であつたヴィーン家の若者五人は、早逝したり、出奔したり、病で子種を失くしたりし、いずれも、聖炎の神子の夫となり得なくなつてしまつたのだ。

聖炎の神子をヴィーン家に返す約定は、また次代に先送りされ、ユーリンドは、従兄アトラウスと、晴れて婚約を認められたのであつた。

侍女リディアが、休暇をとって出立したその夜の事。

珍しくこの日は来客もなく、奥の小広間で徐々に家族四人で晚餐の卓を囲んだ。

常になく言葉少なで、俯きがちに何かを考え込んでいる様子の娘に、アルフォンスは食事が済んでから、優しく声をかけた。

「わたしのちび小鳥、何か気になる事でもあるのかい？」

かれは、双子の子供達が幼い頃、よく、ファルシスをちび仔馬、ユーリンドをちび小鳥、と呼んでいた。

14で成人となり、息子は騎士となり、娘も婚約が定まった今では、もう殆どそう呼ぶ事もなくなっていたのだが、ふと懐かしく、アルフォンスはその呼び名を口にしてみたくなつたのだ。

多忙な身のかれに、翌年の一人娘の嫁入りまでに、あと何度、家族四人、水入らずで食事ができるのか、と、ふと、感傷という程のものでもない思いがよぎつたのかも知れない。

「まあお父様、もうわたくし、ちび小鳥ではなくなつてよ。ちゃんとした、おとなの鳥なのよ」

案の定、可愛らしく唇を尖らせてユーリンドは抗議した。アルフォンスは破顔し、それは失礼、レディ、と言った。

「父上、この鳥はひとりではいられない寂しがりやなので、側仕えのリディアが実家に帰った為に、心細くて憂い顔なのでしょう」

ファルシスが言った。

ユーリンドは、リディアが今日からいない事を、ファルはどうして知っているのかしら、と幾分訝しく思ったが、口には出さず、別な事を言い返した。

「まあ、ファル、私はそんなに子供じゃないわ。リディアはすぐに帰ってくるのだし。私が気になつているのは、別の事よ。それは…ええと」

ちよつと言い淀んだのは、折角の楽しい雰囲気に水を差す話題ではないかと氣遣ったからだだったが、やはり父に尋ねてみたい氣持が勝ったので、ユーリンドは言葉を継いだ。

「お父様。今朝聞いたんですけど、最近、若い女性が行方不明になる事件が続いているんですって？ どのような事ですか？」

「ああ……」

アルフォンスは、やや困ったように、軽く眉を寄せた。

「きみの耳にも入ったのかい。最近、かなり噂になっているようだからね」

「わたくしが話したんですの。ユーリイももう子供ではないのですから、世の中で起こっている事は、知っておくべきですわ」

カレリンドが言うと、彼女の夫は、完全に納得した訳ではない、という風に、曖昧に頷いた。

アルフォンス・ルーンは優れた人間だが、娘の教育という面では、かなり甘い所があった。

息子には、後継者として、自分をも超えるような立派な領主、騎士となって欲しいという願いから、教育や鍛錬の面では、かなり厳しく指導する事も多かったが、娘に関しては、ユーリンドの無垢で純粋な心の美しさに、ややもすると溺愛に近いといえる感覺を持っており、酷い話、恐ろしい話は聞かせたくない、という、甘やかしの氣持ちがあったのだ。

「行方不明になった女性たちはどうなったのか、わからないんですの？ いったい、誰がどういう目的で、未婚の女性をかどわかしたりするのでしょうか？」

「うーん、色々調べさせてはいるのだけどね、まだわからない事が多いんだよ。本当に、この領内でそんな無法をそう長く許しておく訳にはいかないから、必ずこの件は解決させてみせるよ。だから、きみはそんな心配はしなくていいんだよ」

「ユーリイ、この件では、アトラもダリウス警備隊長に協力して、色々調べているらしい。そんなに氣になるなら、今度彼に尋ねてみ

るといい」

ファルシスの言葉に、ユーリンドは驚いた。

「まあ、アトラが？ いったいどうして？」

「彼の乳母の娘……メリツサといったかな、嫁入り間近にして、事件の被害者になっているらしい。それで、空いた時間を使って、自身で動いてみる事にしたそうだよ」

「まあ、そうだったの。私、ちっとも知らなかったわ」

少しショックを受けたように、ユーリンドは俯いた。

「ユーリイ、アトラはきみにそういう話はあまりしないのかい？」

アルフォンスが少し心配げに問いかけた。

「ええ、そうね……。騎士団でのお話や、叔父様のお話は、あまりしてくれないわ。聞いても私には面白くないだろう、と言って。よくお話してくれるのは、書物の中のお話とか、人から聞いたよその地方のお話とか。それは、とっても楽しいお話なの。私がそういうお話をとても喜ぶから、そういう事件の事とか、楽しくない事は聞かせたくない、とまっているんじゃないかしら」

「そうか、なるほど、そうかも知らないね」

そういう気持ちは自身も持っている公爵は、そうであればいい、と無意識に思いながら頷いた。

ただ、彼は流石に、娘よりはずっと男女の仲についてよく知っていた。婚約を交わした間柄だというのに、現実的な話をせずに、物語ばかり語っているのは少し考えものなのではないかと思った。

「ユーリイ、アトラウスは少し変わった青年だからね。ああ、悪い意味ではないよ。でも、ファルシスとは全く違う性質を持っている。剣の腕も馬術も確かだが、あまり武芸は好まないようだ。でも、穏やかで人当たりがよく、とても頭がいいから、騎士団の中でも、皆から好かれている。豊富な知識を持っているし、きみを喜ばせるおとぎ話もたくさん知っている事だろう。だけど、彼には、何か憂いがあるように私には思われるのだよ。それは、彼の生い立ちに関係しているのかも知れない。きみは彼の妻になるのだから、彼の心を

よく理解して、支えになつてあげなくてはいけないよ」

「ええ、わかりましたわ、お父様」

ファルシスは、この会話を聞いて、純粹であるが故に、やや気の利かないところのある妹に、それができるのだろうか、少し不安に思った。

彼は妹をとて愛しているし、従兄の事も、少し不可解なところはあるけれど信頼できる人間と認め、かけがえのない友人として好意を持っていたので、二人の婚約をとて喜んでいたのであるが、

何か言おうとした時、執事が扉を叩いた。

「公爵様。アトラウス様と、ノイリオン・ヴィーン様、それに、ダリウス警備隊長がおみえです。至急な用件との事でございます」

アルフォンスは立ち上がった。

夜分の至急な用件。その顔ぶれ。良い知らせである筈はなかった。

「ファルシス、きみも同席しなさい」

そう言うと、急ぎ足で室を出て行った。すぐ後に、ファルシスも続く。

「どうしたのかしら、お母様？」

不安げに、ユーリンドは母親の顔を見た。

カレリンドは、その時何故か、かつてない胸騒ぎをおぼえていた。

神子の感覚が、何か、とても邪悪な、怖ろしい影が近づいてくる感じを捉えた気がした。

だが、心配げな娘に向かつては、整った細面にその内心は表さず、お父様がちゃんとして下さるから大丈夫ですよ、と微笑みかけるのみであった。

翌朝、まだ薄暗いうちにユーリンドは目覚めた。

昨夜は、父と兄が帰ったら、何事かと尋ねようと思い、かなり遅くまで待っていたのだが、眠気に勝てず眠ってしまった。

彼女は、次の間に宿直している侍女の手を煩わせず、一人で着替えを済まし、そっと室を出た。

リディアの代わりに次の間に控えていた侍女は、それに気づきもせずに眠っていた。

まだ館は静まり返っているが、母はこの時間から起きて、早朝の祈りを行う為に、地下の礼拝堂へ向かう筈だ。

そこをつかまえて、昨夜起こった出来事について尋ねようと思った。

母の私室の扉に近づいた時、驚いた事に、男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「本当なんですか、それは?!」

兄ファルシスの声だった。

いくら親子とはいえ、成人した息子が、それも早朝に母親の寝所を訪ねるとは尋常ではない。

加えて、この荒げた声。

ユーリンドは、兄がそんな声を出すのを聞いた事がなかった。

不安に心臓を鷲づかみにされながら、彼女は扉の近くに寄った。母の声はか細く、耳を澄ませても、聞き取れない部分もあった。

「……あなたの為なのです、ファル、やがては、……が最善だったと……わかります」

「信じられない、そんな事をするなんて。そんなお方ではないと思っていた!」

「あなたはまだ若く……判断できない事もあります。……のこと

は、あなたの為、ルーン家の為に……」

「結局、ぼくはまったく信用されてないという事だ！ こんな事を、何も知らされないとは！」

「何とでもお言いなさい。これは、必要な事です」

「こんな卑怯な……！」

兄が、退室しようとする気配があつたので、ユーリンドは慌てて扉を離れ、廊下の角の陰に身を隠した。

足音荒く兄が出てきて、反対の方へ歩いて行った。

涙が出てきた。

これは、昨日の事件のせいなのだろうか？愛する兄が、愛する母に喰ってかかるなんて、想像した事もなかった。

いったい、何が起こっているのか、まったくわからない。

アトラに逢いたい、と痛切に彼女は思った。かれならばきっと、彼女の不安を癒し、安心できる説明をしてくれるに違いない。

ファルは何か誤解をしているに決まっている。

アトラウス、彼女の騎士が、きつとすべて解決してくれる。そうに決まっている。

朝食には、家族は誰も姿を現さなかった。

父は公邸に泊まり、兄もそうした事になっているようだった。

そして、母は、朝の祈りを済ませた後、そのまま、公邸にいる夫の元へ向かったという事だった。

ユーリンドは、一人で味気ない朝食をつついた後、乳母のマーサと刺繍をしながらも、上の空だった。

昨夜訪れた面々の事を考えてみた。

ダリウス警備隊長。アルマヴィラ都警備隊の隊長である。50代の武骨な男で、挨拶をする時にも、にこりもしないので、ユーリンドは、苦手な意識を持っている。

しかし、父は彼を、有能な男と言い、評価していた。

彼が緊急に報告に訪れたという事は、アルマヴィラ都の治安に関して何かが起こったという事と考えられる。

それから、ノイリオン・ヴィーン。これは、ユーリンドの数少ない、嫌いな人物であった。

年齢は40歳。ルーン公爵夫妻より年長で、現ヴィーン家当主である。カレリンド妃の従兄にあたる。そして未だ独身で、ユーリンドの求婚者でもあった。

ノイリオンは元々、カレリンドが未婚の頃、彼女の夫の第一候補だった。

若い頃から小太りで、のっぺりした顔の小男である彼は、カレリンドに熱烈に惚れ込んでいて、彼女とアルフォンスの婚約が整った後も、彼女を諦めきれずにつきまとい、ある日二階のバルコニーで彼女を抱きつこうとして、突き飛ばされ、転落した過去を持つ。

幸い大した怪我を負わず、双方の名誉の為にこの事件は闇に葬られ、流石にこれ以降、カレリンドの事は諦めたと思われていたのだ

が、彼の執着はそれでは終わらなかつた。

カレリンダが、娘ユーリンダを産んで程ない頃から、是非にユーリンダを自分の妻に、と請い始めたのである。

元々、聖炎の神子となる夫妻の娘はヴィーン家の者と縁づけるべし、という約定があるのだから、この要求は、まったくおかしなものとは言えなかつたのだが、公爵夫妻は、自分たちより年長のこの男に、大切な一人娘を与える気には全くなれず、困惑しつつも、この要求を退け続けた。

だが、この男は、ユーリンダがアトラウスと婚約し、数多の求婚者がしおしおと去っていった後でも、この婚約は愚かなもので何の役にも立たぬ、ユーリンダはヴィーン家当主の自分の妻になるべき、と方々で言い放ち、公爵夫妻とユーリンダに煙たがられていたのであつた。

このノイリオンが、ダリウスやアトラウスと共に駆けつけた、という点が、ユーリンダには解せなかつた。

ノイリオンの弟はルルア大神殿の神官長であり、言うまでもなくヴィーン家は、アルマヴィラ都、アルマヴィラ郡の魔道的守護者として、要である存在であるのだが、ユーリンダは、ノイリオンに対する個人的な嫌悪感が勝つてしまい、どうにもその方面から考えを進める事が困難であつた。

苛々と、進まぬ針をもてあましていた時、執事が扉を叩いた。

「姫様、お客様でございます」

ユーリンダは、待ち焦がれた人が来たかと喜んだ。即ち、昨夜訪れた第三の男、愛しいアトラウスが。

しかし、執事は続けた。

「ティラール・バロツク様がおみえです」

ユーリンダは眉根を寄せ、失望の吐息をついた。

ティラールは、ノイリオンと並ぶ嫌いな人物、そして求婚者であ

った。

隣領主バロツク公の四男で、ルルア神殿への巡礼と学問の為、と称して半年前にアルマヴィラ都に現れ、そして、『ユーリンド姫の美貌と才気の虜になり』、未だに客人として都にとどまっていた。

深い焦茶色の髪と澄んだ緑色の瞳を持つティラールは、ノイリオンとは異なり、かなりの美男子で、都の婦女子の憧れの的となっていた。

だが、いかにも遊び慣れている事は誰の目にも一目瞭然の態でありながら、訪れて三日目にユーリンドに出会ってからは、本人曰く「どのような美姫の甘言も最早苦い、かの姫のつれなきひとことに比べても」という状態で、自他共に認めるユーリンドの虜となり、アトラウスとの婚約が成った後も諦めきれず、日参しているという状態であった。

ユーリンドは、多くの令嬢達の憧れの的であるティラールを崇拜者として得ても、嬉しくもなんともなかった。

彼女は幼い頃から、アトラウスだけを慕っており、他の男性に言い寄られる事の一切が、ただ鬱陶しいとしか感じられなかったのだ。

アトラウスとの婚約が成り、多くの求婚者は諦めて去って行ったというのに、図々しくも、変わらぬ態度で甘い言葉を浴びせかけてくる、この気障な男が、ユーリンドは大嫌いだった。

しかし、彼は、四男とはいえ、アロール・バロツク公爵の息子であった。

このヴェルサリア王国の、王に次ぐ権威を持つ七公爵家、バロツク、ローズナー、ヴェイヨン、ルーン、ブルーブラン、ラングレイ、グリーンサム。

その中でも、筆頭であり、現宰相も務めるバロツク公。

彼の息子の求婚を喜んで受け入れない女性、受け入れない事を許される女性など、この世にユーリンドただ一人であろう、と世間で

は噂していた。

やがては、聖炎の神子となり、アルマヴィラを離れて住む事は叶わぬ彼女の為に、四男である自分はルーン家の養子となってもよい、とまで言うティラールの願いを却下する事は、流石の娘思いのアルフォンスにも、かなりの困難を強いた。

ティラールとユーリンダの双方の意志とその食い違いは、早くから明らかになったので、その事もあって、アルフォンスは、急ぎユーリンダとアトラウスの婚約を結ばせた。

だが本来なら、分家の者との婚約など、いくら相思相愛でも、父親の気持ち次第では、成っていても密かに破棄させられても仕方のない程の事なのである。

であるのに、ユーリンダは、許嫁がある身だという事を盾に、気分が不良だの言い訳をつけては、日参するティラールに、せいぜい五日に一度程度しか会わなかった。

今日は、二日前にティラールとは会話を交わしており、彼女としては、面会を遠慮したい日だった。

しかし、ユーリンダは、気を取り直し、応接室に彼を迎え入れた。

ゴシップに詳しい彼なら、昨日起きた出来事に関して、何か知っているかも知れないと思ったからであった。

「麗しのユーリンダ姫、今日のドレスも素晴らしい。薄黄色のシルクは貴女の輝く黄金色の髪と瞳を引き立たせる名脇役だ。それに、そのリボンの刺繍もとても可愛らしい」

室に入るなり、ティラールはそんな事を言った。

そういう彼は、鮮やかな青いチュニツクに、見事な織りのウールのマントを羽織い、睡眠不足でやややつれたユーリンダと比べ、こちらの方こそ輝くような美男子ぶりであった。

しかし、ユーリンダは、彼の外見などにはまるで興味がない。

「こんにちは、ティラール様。お会いできて、嬉しいですね。今日

は、どのようなご用でいらして頂けたのでしょうか？」

とりあえず社交辞令を述べながら、どのように情報を引き出そうか、あれこれと考えた。

「ああ姫、用などと野暮な事を仰るな。麗しのご尊顔を拝するだけで、わたしの心はただ歡びに満たされるのですよ」

ティラールとの会話はいつもこんな調子で、内容がない。

ユーリンドは苛立ち、単刀直入に尋ねる事にした。

「ティラール様。貴方様は何でもご存じですから、きつとわたくしの求める問いの答えもご存じだと思いますの」

「ああ姫、貴女の求めるものなら、なんでも私は捧げましょう」

「昨日、何か都で事件が起こったのでしょうか？ 父も兄も、昨夜出かけたまま戻らず、わたくし、心配でなりませんの」

ティラールはその言葉を聞くと、顔を曇らせた。

「やはり察しておいでなのですな、マイレディ。わたしも、この話を聞いて、貴女がその尊き胸を痛めておいでかと心配しております。本当に、怖ろしい事です」

「何があつたんですの？ 早く教えて下さいませ！」

ユーリンドは急かした。ティラールがわざと気をもたせる言い方をしていると思つて、彼女は眉をつりあげた。

彼は別にそんなつもりではなかったのだが、彼女の様子を見て、怒った顔もまたお美しい、と贅辞を述べようかと思つた。が、続く話の悲惨さを考え、軽い台詞はぐつと飲み込んでおいた。

「先日から、都の内外で、若い娘が連続して行方不明になるといふ事件が相次いでいました。その娘たちが見つかったのですよ。全員、死体でね」

「まあ……！！！」

ユーリンドは、悲痛な声をあげた。

「合わせて19人も乙女の遺体が、ある館の地下室で発見されたのです。それから、裏庭からも5人。皆、殺されていたのです。今朝から、もうどこへ行つてもこの噂で持ち切りですよ」

「怖ろしいわ……そんな……」

ユーリンドは青ざめ、身を震わせた。

「ああ姫、人並み外れて繊細な姫のお心には、いささか刺激の強すぎるお話でしたか？ わたしもそれが気がかりでしたが、しかし姫がお知りになりたいとの仰せでしたので。申し訳ありません、どうかお許しを」

言いながら、ちゃっかりとティラールは、動揺しているユーリンドの華奢な手に、そっと自分の手を添えた。

「ティラール様は悪くないわ。わたくしが知りたいと言っただけですもの。……でも、いったいどうして？ 誰がそんな怖ろしい事を？ なんの為に？」

衝撃の冷めやらないユーリンドは、大嫌いなティラールに手を握られている事にも気づかない。

「それはまだわからないのですよ。そんな、一朝一夕に片づく事件ではありません。これは、単に多くの娘が殺された、という以上の大事件に発展する可能性があるのです」

「……どういう意味？」

「娘の中には、貴族や有力商人の子女も含まれています。一番問題視されているのは、たまたま都を訪れる途中に拉致された、国王の側近リンド伯爵の令嬢です。彼女は、二ヶ月後に婚礼を控え、名付け親であるルルア大神殿の神官の所へ、その報告の為に訪問するところでした。アルマヴィラ都近くの宿場町ジエンドに宿泊し、たまたまその晩、街で祭りがあったので、侍女と共に出かけ、侍女もろとも攫われ、殺害されたのです」

「まあ、なんてお気の毒な」

「それから、これはまだ真偽の判らない噂なのですが……娘たちの殺され方は……」

ティラールが、やや声をひそめるように話そうとした時だった。

「わたしの許嫁を、あまり怖がらせないで頂けませんか？」

静かな、だが、怒りを含んだ声が響いた。いつの間にか、戸口のところに、アトラウスが立っている。

「おや、これはこれは、ブラック・ルーンどの」

肩を竦めて、ティラールはユーリンドの手を離した。そこで初めて、ユーリンドは、自分の手がティラールの手の中にあつた事に気づいた。

彼女は、当惑と怒りとで顔を赤らめた。愛しい人の誤解を招かないかと、咄嗟に不安を抱いたのである。

「違うのよ、アトラ。あの……」

だが、ゆつくりと入ってきたアトラウスは、ユーリンドの言い訳など気にもしていない様子だった。

彼女が、進んで他の男に手を預けたりする筈もない事は解りきつており、咄嗟にそんな心配をする彼女に対し、不信などもとよりなく、ただ可笑しく思えただけである。しかし、笑う気分にはなれなかった。

「立ち聞きした上に、許しもなくずかずか入ってくるとは、大した礼儀をご存じなのだ、ブラック・ルーン」

冷やかにティラールが言う。

ブラック・ルーンとは、無論、アトラウスの容姿をあげつらつた蔑称である。

面と向かってそう言う者は流石に少なかつたが、陰でそのように呼ばれる事は、珍しい事ではなかつた。

穏和な性質のアトラウスには、そう敵が多い訳ではない。

が、やはり未だに、彼はルーン家の血をひいていない、と言う者もいなくはなかつたし、そのように思えば、彼がルーン公の甥として優遇され、おまけに高嶺の花のユーリンド姫を易々と射止めたともなれば、不満に思うのも当然の人情といえなくもなかつた。

「立ち聞きするつもりはありませんでした。しかし、あなたのすぐ後にここへ着き、執事に次の間に通されたので、待っていたのです。そうすると、あなたの声が大きいもので、話が聞こえてしまい、許

嫁の事が心配になったのです。ご無礼は謝罪します、ティラール卿」

「申し訳ありません、ティラール様。彼が止める間もなく……」

そう言いながら、控えめにアトラウスの傍に、もう一人の男が進み寄った。

ティラールの従者、ザハドだった。

真っ黒な髪に青い瞳、浅黒い肌を持った長身の男で、ティラールがどこに行くにも影のように付き従っている。

彼は、アトラウスより前から次の間に控えており、執事は、アトラウスには別の間で待ってもらおうとしたのだが、アトラウスは無理を言つて、彼と同じ室で、二人の話が終わるのを待っていたのだ。つた。

「アトラ……あの、わたし、どうしても気になって。お父様とファルが……その、帰ってこないものだから」

今朝の、母とファルシスの口論の事は、勿論、この場で言うべきではない。ファルシスは、帰宅していない事になっているのだ。

「心配で……ティラール様に、事件の事を話して頂いていたの。それだけよ」

アトラウスはユーリンダの方を向き、柔らかく微笑んだ。

底知れぬ闇色の瞳が、彼女を見る時いつも、温かく包み込むような優しさを浮かべるように思え、彼女はそれで安心をする。

「ユーリイ。きみはそんな事は心配しなくていいんだ。そんな事は、ぼくや伯父上やファルに任せておいて。大丈夫、ぼくが、きみに怖い思いはさせないからね」

父アルフォンスがよく言うのと同じような言葉に、感じていた恐怖が遠のくようだった。

そうだ、わたしは護られている。怖いことなんかない。アトラやお父様やファルがいるのだから。

「随分、過保護なんだな。姫は君のひとつ年下なだけだろう？ 子供じゃあるまいし、未来の聖炎の神子として、色々知っておかなく

てはならないんじゃないのかい？ え、ブラック・ルーンどの？」

「わたくしの許婚を、そんな名前で呼ばないで下さいませ！」

きつとなってユーリндаが言った。

「おお、怒った顔もお美しい。では、そろそろ私は退散致しましよ
う」

今度は心おきなくティラールはその賛辞を述べ、心残りの様子を見せながらも、従者と共に室を後にしていった。

招かれざる客が辞した後、室には許婚同士の二人が残された。

ユーリンドは、この時を待っていた。

色々な不安な事があった。アトラに聞いて貰いたい。大丈夫だよ、って言って欲しい。アトラならきつとそう言ってくれる。そして、本当にそうなるに決まっている。

彼女は、今朝立ち聞いた、母とファルシスの口論について話した。

「わたし、怖くて……。ファルがあんな風にお母様に言うなんて。わたし、最初は、昨日起こった何かと、ファルが怒っている事が、関係あるかと思ったの。でも、違うわね？ そんな、女の人が殺された事件で、ファルがお母様に怒ったりする訳がないもの。いったいどうしたのかしら……。？ それにしても、怖ろしいわ。ねえ、どうしてそんな怖ろしい罪が行われたのかしら？」

そんな風に言っている間に、彼女は、行方不明になった者のうちに、アトラウスの乳母の娘が含まれていたという事を思い出した。

「そういえば、アトラ、えっと、メリツサ……。だったかしら？ あなたの乳母やの娘さんは……。？」

「彼女も遺体で見つかったよ」

アトラウスは静かに言った。

「まあ……」

ぼろぼろと大粒の涙が、ユーリンドの頬を流れ落ちた。彼女は思わず、愛しい許婚の頬を撫でた。

「ひどいわ……。アトラ、悲しいわ、あんまり……。ひどいわ……」

きらきらと輝く黄金の髪が、ユーリンドの慟哭と共に揺れ、開け放たれた窓から降り注ぐ昼の明るい日差しを浴びてなお一層の光を放った。

涙に濡れた睫毛も潤んだ瞳も、殆ど全ての男性の気持ちを揺るが

し、触れてその涙を拭つてみたい気持ちを起こさせる力を持つていた。

だが、アトラウスは、泣きじゃくる彼女に、不用意に触れる事はしなかった。脆い硝子細工のような美しさを損なう事を、極端に恐れるかのように。

ただかれは言った。

「ユーリイ……泣かないで」

かれはそつと、泣いている許婚の肩に触れた。

「君が泣くと、僕はどうしてもいいかわからない。……メリツサは、可哀想な事だった。でも、僕はきつと犯人を捕らえて、彼女が微笑んでルルアの元へ行けるようにしたい。だから、君は泣かないで、僕を力づけて欲しいんだ」

ユーリンドは、顔を上げた。

緩やかな、くせのある長い黒髪をひとつに束ねた、常に穏やかで理知的な、彼女の想いびとの顔が、間近にあった。

かれの力になりたい、と彼女は思った。

顔と顔が思いがけず、ごく近くにあったので、ユーリンドは思わず胸が高鳴り、瞳を閉じようか迷った。

だが、瞳を閉じればいかにもその事を待っているかのように見えるし、それはもしかして、近い者の死に胸を痛めている彼の鬢蹙を買うかも知れない。

そんな風に戸惑っているユーリンドの顔を、近くからじつとアトラウスは見つめていたが、やがていつものように柔らかく微笑み、おでこにごくごく軽くキスをした。

「すまない。君は本当に、何も心配しないで。ただ君が笑っていてくれるだけで、僕の力になるんだからね」

アトラウスはそんな事を言い、帰って行った。

ファルシスと母の口論について、彼は何の意見も言わなかったし、その事について安心させてくれるような事が何もなかったのに、彼

女が気づいたのは、彼がいなくなって暫く経ってからの事であった。

ユーリンダのもとを辞し、ティラール・バロツクは、従者ザハドと、宿舎に向かつて馬を進めていた。

「先程は、本当に申し訳ありませんでした」

ザハドは改めて謝罪した。ユーリンダとの対話の途中に、アトラウスの闖入を許してしまった事についてである。

「もう気にするな。あの場で、あの男相手に、暴力を振るう訳にもいかなかった事くらい解っている。悪いのはあいつなんだ」

「……ありがとうございます」

ザハドは、馬上のまま深々と頭を下げた。先に行くティラールは、彼を見てはいなかったが。

「あいつと、何か話したのか？」

「いえ。ご挨拶を致したのみでございます」

このザハドは、ヴェルサリア王国ではなく、南方のサウシカという島国の生まれである。

ヴェルサリアには、公然とした奴隷制度はないのだが、サウシカやその更に南の大陸では、王の支配下にはない小部族が多数に分かれて敵対状態にあり、他部族に敗北した者たちは、裕福な王族や貴族、商人などに、奴隷として売られるという事が、日常的に行われている。

ザハドは、ある部族の長の息子だったが、かれが物心つくかつかないかのうちに一族は滅亡し、肉親とも引き離され、酷薄な貿易商に安く買い取られ、働かされていた。

ある時、ヴェルサリア南方の、ヴェイヨン公領ランポートという大きな港町に、船に乗り込み連れて来られ、ザハドはバロツク公とその息子に、彼にとっては運命を揺るがす出会いをした。

バロツク公の長女がヴェイヨン公の長男に嫁ぎ、その婚礼の為に

この地方に赴いていたアロール・バロツク公は、伴ってきた息子たちに請われて、船を見る為に港にやって来ていた。

そこで荷下ろしをしていたザハド少年は、たまたま腕を怪我しており、それでも重い荷を運ばされて、つい、荷を取り落としてしまった。

その荷が壊れ物だった為、彼の主人は激怒し、幼い少年である彼を、棒でひどく叩きのめしていた。

その光景が、馬車で通りかかったバロツク公一行の目にとまったのだ。

テイラールの兄たちは、奴隷の子どもの運命に同情するなどという発想すらなく、面白がつて成り行きを見ていたが、丁度ザハドと同じ年頃だったテイラールが父親にせがんだ。

「父上、あの子がかわいそうです。助けてやってください」

アロール・バロツクは、特に慈悲深いという評判を得た事はない男だったが、ウェイヨン家との縁組みに満足して機嫌がよかったので、四男の願いを気まぐれに聞いてやった。

幾ばくかの金銭を支払い、ザハド少年はバロツク公の一行に加えられる。

その後、テイラールは、彼にとって未知の世界である南国の様々な不思議な話をするザハドをとて気に入り、バロツク公も、この子供がとても利口で従順な性質を持っている事を知ったので、テイラールの小姓とする事に反対しなかった。

それから十数年、ザハドは常に、テイラールの傍近くを離れた事はなかったのだった。

「若、少々不躰な質問をさせて頂いてよろしいでしょうか？」

「うん？ 何でも言う方がいい」

ザハドは、浅黒く、引き締まった顔に、極めて真面目な表情を貼り付けたままで言った。

「若は一体、いつまで、あの姫君のところへ通われるおつもりなの

ですか？ 大変失礼ながら、かの姫君は、許婚との仲もすこぶる良く、通いつめたところで、何か変わりのある可能性は極めて低いように思われるのですが」

「お前……随分と言ってくれるなあ……」

あまりのはつきりした言われように、さすがのティラールも、少し答えに詰まった。だが、彼は、こうしたザハドの、言いくい事も躊躇わず言ってくるところを、忠誠のあかしと考えていたので、怒る事はなかった。

「俺はユーリンダ姫に惚れ込んでいるんだ。あのような女性は他に存在しない。非の打ち所のない美しさと、稀に見る純粋さ。それに次期聖炎の神子となる身に与えられた知性」

これまで見た限り、ユーリンダは確かに美しく純粋な乙女だが、長所として敢えて挙げる程の知性があるのだろうか、とザハドは思ったが、流石にそれは言わなかった。

「あのような希有な女性が、あんな陰気なつまらぬ男のものになるなど間違っている。その過ちを正す為に、俺は日々、通っているのだよ。まだ、姫は人妻となった訳でもない。とやかく言われる筋合いはないよ」

「いえ。言わせて頂きます」

ザハドの答えは、ティラールの予期していなかったものだった。「なに……」

「若は、バロツク公の令息でいらっしやるのですよ。お立場をお考えになつて下さい。なびかぬ女子のもとに、未練がましく通うのは、お家の名に関わる事です」

「ザハド……！！」

温厚なティラールも、これには怒りを露わにし、馬をとめて従者のほうへ振り向いた。

しかし、ザハドは怯まなかった。

「若。これは、わたしの意見ではありません。お父上が、そうお考えなのです」

「なに……?」

「今朝、公爵様から書簡が届きました。お父上は、若に、身分をわきまえ、バロック公の息子にふさわしい振る舞いをなさる事をお望みです」

「ザハド、おまえ、俺のことを父上に報告したのか」

「わたしが言わなくとも、世間の噂になっているのですよ。お父上はお怒りです。何の為にここに来たのか、どうか思い出して下さい」

ティラールは舌打ちし、馬を返した。

「……まったく、面白くない。折角、今日は姫と話が出来たというのに、おまえのせいで気分が台無しだ」

「申し訳ございません」

全く濟まなさそうには見えない様子で、従者は、謝った。

その翌日。

ルーン家の馬車に乗ったリディアは、無事に実家へ帰っていた。

リディアの実家アークレー家は、ローラムという大きな街で、数代前から、街で一番大きな宿屋を営んでいる。

裕福な家庭だったが、数年前、リディアの父親が親しい者に多額の金を融資し、その男がそのまま姿を消してしまった事から身代が傾いた。

そこに手を差し延べたのが、同じ街の金貸しジェイク・ソルトである。

破格の金利で融通してもらい、窮地を救われたアークレー家としては、やもめの中年男に年頃の娘を縁づける話を、断る事は出来なかった。

リディアには双子の姉もいたのだが、こちらは既に嫁ぎ先の決まった身であったので、次女のリディアがこの貧乏籤をひかされる事となった。

一日ゆっくりと実家で過ごし、この日、婚約者に会いに行く予定だった。

リディアが居間に降りてくると、姉のエリアが言った。

「アルマヴィラ都のあたりは物騒な事件が起こっているそうね」

「そうね。でも、攫われた娘たちは、残念な形とはいえ見つかったんだし、きつと犯人もすぐに捕まるんじゃないかしら」

「リディア。おまえは、嫁いだらもうお勤めは辞めた方がいい」

母親の言葉にリディアは驚いた。

「何を言うの、母さん。今後の事は、もうソルトさんも了承済みの事じゃない。私は、姫さまから離れてしまうなんて出来ないわ」

「それは確かに、ルーン家と繋がりがあるのは、大層ありがたい事ではあるだろうけどね……でもね、心配なんだよ」

母親は、大仰な身振りで肩をすくめ、声をひそめた。

「だって、噂では、言われているじゃないか。あの事件は、『聖女の血筋』のお方が……」

「まあ、やめてよ！」

リディアはかんかんに怒って言った。

その噂は、リディアも先刻、噂好きな召使から聞かされたばかりだった。

多数の乙女が惨殺された事件。その犠牲者の乙女たちが見つかった館は、貸家であり、数ヶ月前にその館を借りに来た者は、目深にフードを被っていたものの、その裾から黄金色の髪の毛が洩れていたと、館の持ち主が証言している、と。

「リディア、私はおまえの身を案じて言ってるんだよ。もしもその噂が本当なら、そんな怖ろしい犯人が、お屋敷に出入りしているかもしれないじゃないか」

「噂なんかあてにならないわよ。それに、万一本当だとしても、『聖女の血筋』のあかしの、黄金色の髪を持つ人なんて、ルーン家、ヴィーン家合わせて何十人もいるんだから。お屋敷にいつも出入りなさる方とも限らないわ」

「そうかも知れないけどね、何とも言えないだろう？ ソルトさんと結婚すれば、おまえはお勤めなんかしなくても、楽に暮らしているんだから。おまえの事を案じて言ってるんだ。言う事を聞きなさい」

断定的な口調に、リディアはかっとなった。

「案じて、ですって？ 母さんは私の事なんてどうでもいいくせに。私の事を思うなら、なんでこんな無理矢理な縁組みを……」

「リディア！」

リディアの頬が鳴った。

幼い頃から離れて暮らし、母親からぶたれた経験はあまりない。リディアは痛む頬を押さえ、涙ぐんだ。

普段、心の奥底に押し込めていた感情が、つい、噴き出してしまった。その事が、悔しかった。

今更、親と本音で話すつもりなど、なかったのに。

親が自分を愛していないとは思っていない。ただ、親は、自分より一層、アークレイ家、というものを愛しているだけなのだ。

それを悪いとも思わない。仕方がないと思わない。

なのに、勤めをやめると言われて、思いがけなく、思いを押さえつけていた糸が切れてしまった。

溢れる涙を見られないよう、俯いたまま、リディアは席を立ち、部屋を出た。

姉が後を追おうとしたようだが、母親が「放っておきなさい！」と言っていた。

リディアはそのまま裏口から外へ飛び出した。

逃げ出せる訳もなかったが、できるものならそうしたい、と思った。

(ファルさま、ファルさま……!!)

声には、出せない。でも、心の中でなら、どんなに叫んでも、自由だ。

二日前の夜には、彼の想いを知って、あんなに幸福だったのに、今は、何もかもが皮肉で苦しく思える。

結婚なんかしたくない。たとえ結ばれなくても、他の男なんか知らないままで、ファルシスの近くにいたかった。

そして、それすら叶わないなら、せめてただ、ほんのたまにでもいいから、彼をかいま見る事のできる位置にいたい。

彼女は、裏路地に駆け込み、しゃがみこんで泣いた。

(私は…ひどい女だわ)

あんなにユーリンドに頼りにされているのに、自分が彼女の傍に

いたいののは、ファルシスとの繋がりを断ちたくないからなのかもしれない。そんな自分の醜さに気づいてしまったのだ。

（ちがう、ちがう。私は、姫さまを何より大事に思っているわ。姫さまの為なら、いつでも命を投げ出せる。離れるなんて考えられない……！）

乱れる思いにとらわれていたリディアは、他人の気配に全く気づかなかった。

気づいたのは、薬品を含ませた布で口と鼻を塞がれた時。

未婚の娘が次々と攫われ、惨殺される、その事件の犯人は、まだ野放しになっているのだと、遠くなる意識のなかで、リディアは思い出していた。

アルフォンスがようやく私邸に姿を見せたのは、その二日後の夜のことだった。

その間、ユーリンドは、ただ悶々としながら過ごしていた。

兄も帰ってこないし、母は忙しそうに出かけては、夜遅く帰宅し、夜食を部屋に運ばせて、そのまま休んでしまう。

あまりに疲れた様子なので、休息を妨げて話を聞く事は憚られた。

アトラウスも、多忙で顔を出せない、と従者を介して伝言を送ってきたのみ。

そしてティラールは、何故かあの後、姿を見せない。

父親が何日も私邸に帰らないのは、珍しい事ではない。

代々の領主の中でも、特に民に慕われるアルフォンスは、それだけに、自らの務めに決して手を抜く事がない。

都内での様々な案件、地方からの陳情、その他多くの仕事を、常に先頭に立って骨身を惜しまずこなしてきた。

更には、毎年数回は王都に赴き、大貴族として、宮廷での重要な行事などへの務めも欠かさなかった。

しかし、この三日間の不在は、常になくユーリンドを心細くさせた。

こんな時なのに、普段、片時も傍を離れないリディアまでもがないのだ。

ユーリンドは、我が儘と知りながらも不安に耐えられず、用が済んだら急いで戻ってきてほしい、という手紙を、今朝、リディアに宛てて館の者に託したのだった。

父親の帰宅を知り、ユーリンドは急いで、父のいる小広間へ降り

て行った。

両親が、揃って卓の傍の椅子に腰を下ろし、深刻な表情で何かを話し合っていた。

「お帰りなさいませ、お父様」

彼女が挨拶すると、アルフォンスは疲れた笑顔を愛娘に向けた。

「まだ起きていたのかい。もう休みなさい」

すると、母が言った。

「いいえ、ユーリンド。あなたにも聞いてもらいたいわ。ここにお座りなさい」

また何も教えてもらえないのかと落胆しかけたユーリンドは、ほつとして、母の示す椅子に腰掛けた。

アルフォンスは不服そうに妻を見た。

「この話はまだユーリイには……」

「何をおっしゃっているの、あなた」

カレリンドは夫の目を見て、きっぱりと答えた。

「ユーリンドはもう子供ではありません。そして、アトラウスの許婚で、聖炎の神子の後継者です。この大事を知らずに過ごせる筈もありません」

「それは……」

アルフォンスは返答に詰まり、妻の言葉の正当性を認めない訳にはいかなかった。

「そうだね、カリイ。きみの言う通りだ。それに、他人から無責任な噂を聞くより、きちんと話をした方がいいのだろうな」

ユーリンドの心臓は、早鐘のように拍ち始めた。大事、とはなんだろうか？ それに、何故いま、アトラの名前が出るのだろうか？

不安に耐えかねたユーリンドは、思わず話を逸らせようとしてしまった。

「お父様、ファルは？ なぜ帰ってこないの？」

「ああ、うん。ファルは騎士団の宿舎に寝泊まりしているようだ。かれも忙しいんだよ。別に、それは心配しなくてもいい」

そう言いながら、アルフォンスはちらりと妻の顔を見やった。
父は、母と兄の口論を知っているのだろうか？何か聞いてもら
しい様子だ。

兄は、父のことも、母に対してしたように責めたのだろうか？
そして、そのことは、大事、と関係があるのだろうか？

「ユーリンド。今、都で騒がれている事件のことは知っているね？
若い娘が大勢殺害された」

「ええ、お父様」

「では、その殺され方や、犯人について、噂されている事は？ 何
か聞いている？」

「いいえ……それは、知らないわ。誰も何も教えてくれないもの」
両親は、顔を見合わせた。

「ユーリンド……きみには衝撃が過ぎる話かもしれないが……娘た
ちは、皆、心臓を抉られ、その血を絞りとられていたんだ。ノイリ
オンは、これは呪術が行われたに違いないと言っている」

「……呪術……ですって……？」

あまりに凄惨な話に、ユーリンドは意識を失いそうな気がしたが、
かろうじて己を保つ事が出来た。

「いったい、何の為の呪術なの？ そんなに多くの、血を……」

「それはまだわからない。ただ……わかっている事がふたつあるん
だ。娘たちの死体が見つかった家……それは貸家で、それを借りに
来た者は、黄金色の髪をしていたと証言されている事。そして、も
うひとつは……」

苦悶に満ちた表情で、アルフォンスは思わず掌を広げ、自らの顔
を覆った。

「死体が発見された夜から、カルシスが行方不明だという事だ」

「それはいつたい……どうということなの」

恐ろしさに青ざめ、かすれた声でユーリンドは尋ねた。

「叔父様が行方不明……？ それは……それはもしかして、叔父様

もその犯人に殺……つ、連れ去られた、という事なの？ ああ、そんな…… かわいそうなアトラ！」

「……いや、そうじゃないんだ、ユーリイ……」

愛娘の鈍さに、流石のアルフォンスの面にもほんの一瞬だけ、苛立ちが浮かんだが、すぐにそれは流れ去り、かれは苦笑した。

「いや、そういう可能性もない訳じゃないな。いつそ、そうだったら良いのだが」

「まあ、お父様、なんて事を！」

父親の言葉が信じられない、という表情のユーリンドに、今度は母親が諫めるように言った。

「お父様のおっしゃる事が正しいのです。もし、単にカルシスが何者かに連れ去られた、というだけの事なら、冷たいようだけど、彼一人の身のことです。でも、そうではない場合、ことは、ルーン家の名誉に関わります。ルーン家の根幹を揺さぶるようなことかも知れないのです」

ユーリンドは戸惑った。

「どういう意味……」

「ユーリンド。いまや、国中の噂となっているこの事件の犯人が、カルシスかも知れない、と言っているんだ」

これ以上曖昧な言い方をしても伝わらないと知って、アルフォンスは、苦い口調ではつきりと告げた。

ユーリンドは、ぽかんとした。

「叔父様が……犯人？ 人殺し？ まあ、なんて事を……そんな事が、ある訳ないわ。アトラのお父様が……」

「わたしもそう思いたい。だが、今のところ、そうでないという証拠はどこにもない。カルシスは、あの、死体が見つかった日、わたしとファルに知らせがくるより前に、ダリウスとアトラウスと共にその場に行ったらしい。そして、そこから帰宅した後から行方が知れない。誰かに連れ去られたというような痕跡はまったくない。執

事が言うには、彼は、大慌てで旅支度を整え、一番脚の速い馬に乗って出て行ったという事だ。それから、忘れてはいけない、死体の見つかった館を借りたのは、聖女の血筋のあかしの、黄金の髪を持つ者だという事を。この事は、最早あらゆる場所で噂になっている事なんだ」

「そんな……そんな……」

蒼白なまま、涙を流す娘の肩を、カレリンダはそっと抱いた。

「わたくしたちも、どうか彼が無実であってほしいと、心から願っています。でも、それを明らかにするには、まず、彼を見つけ出さなければならぬの」

「ええ……ええ、そうね。きっと、見つかるわ、無事で……そして、叔父様が無実だと、みんなにわかるわ……」

それから、ユーリンダは、はっとして顔を上げた。

「アトラは？ アトラはどうしているの？」

「彼には、自宅待機を命じている。こんな話が知れ渡っているのに、出歩く訳にもいかないだろう？」

「そうね……ああ、でも、どんなに心を痛めている事でしょう！

わたし、明日、アトラに会いに行きます」

「駄目だ」

きつぱりとアルフォンスが言ったので、ユーリンダは驚いた。

この優しい父からは、悪戯だった幼年期を過ぎて以来、厳しい事を言われた記憶がほとんどなかったからだ。

「事の真相が明らかになるまで、アトラウスに会ってはならない」

「まあ、そんな。わたし、アトラの許婚なのよ。いつだって、会いたい時に会える筈だわ」

「ユーリイ……ねえ、聞いておくれ。わたしだって、こんな事は言いたくない。わたしもお母様も、きみの幸せをまず第一に考えている。その事を、どうか忘れないで欲しい」

夫が躊躇い、言い淀んでいる様子を見て、カレリンダは、嫌な役目を引き受ける事にした。

「ユーリイ。そうならなければどんなに良いかと、わたくしたちも思っているわ。でも、ここまで話をしたからには、あなたにも覚悟を持っておいてもらいたいの」

カレリンダは、娘の衝撃を和らげるにはどういう言い方がよいのか、考えを巡らせた。

「が、結局は、簡単な言葉で、ありのままに告げるしかない、と思いついて、娘の、自らによく似た大きな黄金色のひとみを静かに見つめた。」

「もしも、噂が真実だと明らかになるなら、あなたとアトラウスの結婚を許す訳にはいきません」

ファルシスは単騎、愛馬を駆っていた。

この数日間で、かれの世界は、大きく変化していた。

これまでは、かれにとって何よりも大きなものは、ルーン家であり、その後継者として相応しくある為に、ただその為に生きてきたと言っても過言ではない。

両親への敬愛と思慕の念、半身ともいべき双子の妹を慈しみ、護ろうという思い……それらは今、砕かれ、心の欠片は千々に乱れ、そしてただひとりの人間に向かおうとしていた。

リディアである。

彼女に逢いたい。

逢って、そして、ふたりでどこか遠いところへ行く。

彼女もきつと喜んでくれる筈。

彼女の婚約は、彼女の意に染まぬものなのだし、自分に想いを寄せてくれている。

ルーン家は、アトラがユーリイと結婚すれば、彼が何とかしてくれるだろう。

両親の事など、知った事ではない。

リディアとふたり、どこか遠くで生きていきたい……。

数日前まで、自分にこんな気持ちが芽生える事など、彼は想像した事もなかった。

長年の、リディアへの想いはあったが、それを実らせる事はないと、自分に言い聞かせ続けてきた。

ルーン家の後継である自分が、一介の侍女を正妃と出来る筈もない。

望めば、愛妾とする事は可能かも知れなかったが、本当に愛する

娘をそんな立場に置くくらいなら、傍から、彼女が好きな男に嫁ぎ、幸福に暮らすのを見ている方がまだましだと思っていた。

将来は、愛妾の数で歴史に残りたい、という夢を持つティラール・バロックなどからは、全く理解されないであろう頑なさを、かれは持っていたのだ。

しかし今、その頑なさは、これまでと別の方向へ向かおうとしていた。

従者の目を盗み、騎士団の宿舎を夜半に抜け出し、夜通し駆け続けた。

リディアの実家のある街に着いたのは昼頃。

ローラムの一番大きな宿屋『金の角笛亭』に向かった。

そこはリディアの実家で、リディアはそこにいるか、そうでなければ、彼女が今どこにいるかを聞ける筈である。

かれは、フードを目深に被っていた。

『聖女の血筋』のあかしである、黄金の髪と瞳は、密かに行動したい時、いつも邪魔になった。

黒髪と黒目の者ばかりが暮らすこの地方で、それは余りにも人目を引きすぎるのだ。

馬を繋ぎ、入り口をくぐると、どうも様子がおかしかった。

室内は薄暗く、客を出迎える者もない。

「……誰か？ いないのか？」

大きな声で呼ぶと、ようやく、小間使いとおぼしき少女が現れて、

「申し訳ありません。今は、閉めているんです。よそへ行かれて下さい」

と、頭を下げた。

「どういう事だ？ わたしは、宿を借りにきたのではない。この宿の娘のリディアと話をしたいのだが」

小間使いは、驚愕の表情を浮かべ、後ずさった。

少しお待ち下さい、という言葉を残して少女は奥に消え、ほどなく出てきた女に、ファルシスは軽く驚いた。

リディアと瓜二つの容姿。しかし、リディアではない。他の者なら取り違える事もあるうと思えたが、彼はすぐに判った。

双子の姉がいると、以前話していた。会うのは初めてだが、間違はなく、彼女がその姉であろう。

「リディアに会いたいとおっしゃっているのは、あなたさまですか」

何故か怒りと警戒を露わにした女の態度を訝しく思いながらも、ファルシスはフードを外した。

「わたしは、ファルシス・ルーン。お初にお目にかかるが、貴女は、リディアの姉上のエリア殿ですね？ よろしく」

身分を明らかにすれば、エリアの警戒は解けると思ったのだが、彼女は、ファルシスの黄金色を目にして、一層顔をひきつらせた。

「あなたが？ ルーン家の若君？ …… いったい、どういふつもりでいらしたのですか？ 悲嘆に暮れる家族の様子を見ようとでも？」

ファルシスは戸惑った。

「悲嘆……とは？」

「とぼけないで頂きたいわ。あの娘は、攫われました。人相の悪い男に、無理矢理連れ去られるのを、物乞いの老人が見ていたのよ」

「なんだって……!!」

「巷で騒がれている事件の犯人に決まっているわ。即ち……」

「エリア!! お止め!!」

興奮した娘の言葉を、背後から中年の女が制した。

「これはルーンの若様、こんな所へわざわざお越し頂いて……」

リディアの母親だった。彼女には、何度か会った事がある。

「申し訳ありません、この娘は取り乱しているのです。双子の妹が攫われてしまって……」

母親は深く頭を下げ、娘の非礼を詫びた。だが、ファルシスは、それに構うどころではなかった。

「リディアが攫われたとは、どういう事だ？ あの事件の犯人に？ まさか……」

「何が、まさか、なの？ 犯人は、ルーン家のひとなんでしょう？ それで、あなたは様子を見に来たんでしょう？ そうでなければ、若様がわざわざ侍女を訪ねてこんな所に来る理由なんかないわ！」

「エリアー！！ なんて失礼な！！」

母親は、娘の頬を打った。

「奥へお行き。行かないと承知しないよ」

「でも、母さん」

「うちの店に傷をつけるような真似は許さないよ。さあ、お行きったら！」

娘は、母親の目をじっと見つめていたが、やがて大人しく奥へと消えて行った。

エリアの姿が見えなくなると、すぐに彼女の事はファルシスの意識から消えていった。彼女の言葉の棘について、考えている場合はなかった。

「アークレー夫人、リディアが攫われたというのは、確実なのですか？」

まさかこの家族の様子が演技でもあるまいし、リディアがいなくなったというのは確実なようである。

しかし、よりによって、彼女が噂の殺人者に拉致されたなどは、思えないし、思いたくなかった。

「もしや、意に染まめ結婚が嫌で、姿を隠した、という事はないだろうか？」

そうであつて欲しい、という思いを、彼は口にした。

だが、その言葉を聞くと、夫人の顔は険しくなった。

「若様。あの娘の身を案じて頂いて、感謝致します。でも、あの娘

は、自分で決めた事から、黙って逃げ出すような娘ではありません。幼い頃に手元から離れたとはいえ、あの娘は私の娘です。それくらいこの事は、私にはわかります」

これを聞いて、ファルシスは途端に恥ずかしくなった。

「……済まない。まったくその通りだと思っ」

そうだ、彼女はそういう性格であり、その生真面目さ、芯の強さが彼女の魅力のひとつだと、わかっていたのに。

ただ、あの婚約を、彼女が自分で決めた、という言い方には、あまり賛同できなく思えた。そうせざるを得ない状況に、彼女は追い込まれていたのだから。そして、その原因は……。

「あの娘の許婚は、歳は少し離れているけど、本当に良い方なのですよ。リディアを本当に気に入って下すって、それはもう、良い縁に恵まれたと思っっていたのです。なのに……」

涙ぐむ夫人に、それは違うだろうとは言えなかった。相手は、評判の悪い、酷薄な金貸しだろう、とは。

「若様、ところで、リディアに何のご用でいらっしやっただけでしょう？」

「ああ、それは……妹の事で、ちょっと尋ねたい事があつて、用意していた言い訳に、幸い相手は疑問を持たなかったようだった。」

「まあ……お役に立てませず、申し訳ありません。姫さまに、折りを見てお話下さいませ……もう、リディアはお側に戻れないかも……知れませんか……」

離れて暮らしていても、リディアは家族から愛されているようだ。これ以上、母親の嘆きを目の当たりにしているのも辛く、攫われた時間と場所を聞き、ファルシスは立ち去る事にした。

「きつと……犯人を捕まえる。きつと、無事に助け出します」

そう言つと、夫人は、深く頭を下げた。

「お願い致します、若様……どんな相手であろうと、きつと真実を明るみに出して下さる、と信じています」

どんな相手であろうと、という言葉は、勿論、噂されている相手の事を指しているのだろう。

ファルシスはただ頷き、その場を後にした。

明るい日差しが眩しかった。リディアはいない。いなくなった。

束の間、呆然とファルシスは佇んでいた。

彼女を連れて逃げるつもりで来たのに、これはどういう事なのだろう？神が彼の心を知り、彼女を隠したのか？という思いさえ浮かんだが、すぐにその思いは打ち消した。

これは、人間の仕業なのだ。目撃した者もいるのだから。

必ず、救い出す。

例え、噂されている人物を破滅に追いやる事になっても……真実を明らかにせねばならない。

攫われた場所に行き、周辺を調べた。

目撃したという者にも会えて、リディアは馬車に押し込まれ、連れ去られたという事が分かった。

もう、この街にはいないだろう。その直感を頼りに、彼はアルマヴィラ都へ戻る事にした。

黴臭さと埃っぽさに鼻腔を刺激され、リディアは目を開けた。

周囲は、薄暗かった。

がんがんと痛む頭を押さえ、彼女は起き上がった。

薬をかがされ拉致された後、どこかへ移動しているようで、不快な長いまどろみの間、微かに馬車の振動を感じていた。

誰かが見ている、彼女が目覚ましそうになると、また薬をかがされた。

あれから、いったいどれくらいの時間が経ったのか、まるで判らなかつた。

身体の下には、古いカーペットがあつた。

美しい織りの上質なものだが、かなり長い間、手入れもされていないようで、黴と埃の臭いは、主にこのカーペットからきているようだった。

周囲を見回すと、彼女は、薄暗い部屋の中にいた。

以前は何か家具や道具が色々置かれていた形跡があるが、今は、忘れられたようなカーペット以外何も無い、使われていない部屋だ。

空気が、ひどく淀んでいた。

一方の壁の、とても高いところに、格子のはまった窓があり、太陽の弱い光が射していた。

同じく格子のはまった扉は固く閉ざされており、格子の向こうに見える廊下には明かりもない。

外界との接触は、その窓を介して以外、ないようだったが、窓はあまりにも高く、小さかつた。

(地下牢だわ)

リディアは思った。

何ゆえに、自分は地下牢に囚われているのだろうか？

そうだ、それはいま巷を騒がせている、若い娘を攫っては殺す狂気の犯人の仕業かもしれない。

すると、自分もまた、心臓を抉られ、殺されるのだろうか。

まだ、薬の効き目が完全に抜けておらず、ぼんやりとする意識の元でも、彼女は恐怖を覚え、どこかに逃げ道はないものかと、部屋のおちこちを探った。

(……?)

部屋の片隅、カーペットの半ば下敷きになりながら、何かが落ちていた。

拾うとそれは、小さな古びたペンダントで、裏には彼女のよく見慣れた刻印があった。

ルーン家の紋章。

やはり、巷の噂の通り、ルーン家の人が、犯罪に手を染めているのだろうか？

掌にのせてそれを見つめていた時、扉の外に何か気配がしたので、彼女は慌ててそれをポケットにしまった。

「お、気がついたようだな。」

扉の格子の向こうから、男が覗いていた。

「だれ?!」

リディアは大きな声をあげた。男は笑った。

「誰でもいいさあ。いま、世の中を騒がしてる、おつそろしいお方のご命令で、おまえをさらってきたのさあ」

「それは……だれなの？ 本当に、ルーン家の方なの？」

髭面の小汚い身なりの男に対し、何故カリディアはそれほど恐怖を感じなかった。単に、感覚が麻痺していただけかも知れない。

しかし、牢に囚われた力無い娘の問いかけに、男は一層大きく笑っただけだった。

「ふん……もうすぐわかるさあ！」

「娘が目を覚ましたのか？」

そんな声がした。

それは、どこかで聞いた声だった。

「へえ、殿様。」

男がかしこまって答えていた。

リディアは、格子のはまった扉へ近づき、男の持ったランプの明かりで照らされた、薄暗い廊下の向こうを見た。

ひとりの男が、こちらへ向かって歩みを進めてきていた。

（あの方は……）

あり得ない人物を、そこに、リディアは見出した。

深夜、こっそりと、ユーリンドは、身支度を整えた。

準備は万全……の筈だ。

彼女はこれから、ちよつと前までは、考えもつかなかったような冒険をするつもりなのだ。

（お父様もお母様もひどすぎるわ。私はアトラの奥方になるのに、会ってはいけないなんて、あんまりよ。アトラはきつと、苦しんでる。ここに来られないのなら、私が行つて、励ましてあげなくちゃ）

動きやすい乗馬服に着替えた彼女は、昼の間に、シーツや古いドレスを繋いで作った紐を抱えて、バルコニーに出た。

彼女が勝手な行動をしないよう、公爵夫妻は侍女に、気をつけて見張るよう命じていた。

次の間に控えている侍女は、決して彼女を通してはくれない。

だが、おとなしやかな姫君が、手製のロープを伝つて、3階の自室から外へ出るとは、侍女も、そして両親も、想像していなかった。

もう何年も、理想的な貴族の姫君として日々を送っていた。恋のために、アトラウスに振り向いてもらうために。

だから、周囲も殆ど忘れていた。子供の頃のユーリンドは、兄と一緒に木登りをする程、お転婆だった事を。

しっかりとシーツの端をバルコニーの柱に結びつけ、外へ垂らすと、丁度よく地面の僅かに上まで届いた。

緊張したが、所々足場もあつたので、意外と危ない思いもせず、土を踏む事が出来た。

頬に当たる夜気が冷たい。

第一段階の成功に胸を躍らせ、彼女は小走りに馬屋へ向かった。

同じ頃。

アルフォンス・ルーンは、妻の寢所にいた。

最早若いとはいえない公爵夫妻だが、強い愛情で結ばれた夫婦であり、他に一切愛妾を持つ事もしないアルフォンスは、私邸で過ごす日の殆どは、妻の寢台で眠っていた。

愛の営みを終えたあと、彼は、火照る身体を冷まそうと、何も纏わずに寢台に腰掛けていた。

「本当に、最近は良くない事ばかりだ」

彼は愚痴った。

「まさか、カルシスがあんな事をしでかすとは。子供たちも、憎々しげに私を見る。良い結婚をして欲しいという、親の心は、なかなか伝わらないものだね」

「まあ、あなた」

素肌に白い絹のローブを羽織ったカレリンダは、小さく笑った。

「それは、仕方がない事かもしれません。両家に結婚を反対されながら、こうして結ばれたわたくしたちの子供なんですから」

「そうかね……そうかもしれないね。でも、今まで、本当に素直に良い気質を持って育ってきたのに、こんな風に反抗されると、やはり気落ちするね」

アルフォンスは吐息をつき、言った。

「ちよつと、これを言うのは勇気がいるのだけどね。きみがくれた、護り刀をなくしてしまった。あれがなくなっただけから、悪い事ばかり起きていく気がするよ」

カレリンダは眉を顰めた。

「護り刀……って、あの、あなたがわたくしたちの結婚の許可を求めて王都へ行かれた時に、わたくしが差し上げた、あの短剣ですの？」

「そつだよ……すまない」

申し訳なさそうに言う夫に、カレリンダは、慰めるように微笑みかけたが、その瞳は不安に曇っている。

「なくなってしまうものは仕方ありませんわ。でも、どうして……」

それは、うら若かった彼女が、恋人の無事を願って特別に作らせたもので、柄にはルーン家の紋章が刻まれており、ふたつもないものだ。

この思い出の品を、夫妻は何となく、幸運の象徴のように感じて、アルフォンスは、大事に、常に携えていたのだ。

「わからない。盗まれたとしか思えないが……そんな機会がある者は限られているし、皆、そんな事をする筈がない者ばかりだ」

アルフォンスは疲れたように首を振った。

「とにかく、早くカルシスが見つかるかよいのだが。あの事件と無関係であってくれる事を、毎晩祈っている。そうであれば、ユーリイを悲しませずに済むしね」

しかし、その望みが叶う可能性は、最早とても小さくなってきているように夫妻は感じていた。

カルシスは姿を消したままだし、他に容疑者は浮かんでこないのだ。

もしも彼がこの犯罪の首謀者であるのなら、いくらルーン公の弟といえど、死罪は免れない。

人柄も資質も、誰の目にも兄より激しく劣り、故に子供の頃から劣等感を持ちつつも、その劣等感を刺激されると狂ったように怒り散らす弟だった。

また、亡くなった彼の最初の妻、アトラウスの母親は、もともとアルフォンスの許婚であった。

物静かで優しい女性で、恋愛感情は遂に生まれなかったものの、彼は人間として彼女を敬愛していたし、その彼女を傷つけてしまう結果になってしまい、それでも彼を恨まないと言う彼女に、幸せに

なつて欲しくて、弟に、くれぐれも頼むと言って託した。

しかし、結果的にカルシスは、彼女を虐待し、自死を遂げさせてしまった。その事は、感情的に大きなしこりとなって、兄弟の間に今も沈んでいた。

仲の良い兄弟とはとてもいえない間柄ではあるが、それでも実の弟には違いない。それを自ら裁かねばならない事になるかと思うと、アルフォンスの心は否応にも沈んだ。

勿論、ルーン家にとって大変な不名誉であるし、アトラウスがいくら将来を囑望する血の繋がった甥であるとはいっても、そんな父親の息子に、次期聖炎の神子となる大切な一人娘を嫁がせる訳にはいかない。

アトラウスまでがこの事件に関係しているかも知れないとは、彼をよく知るアルフォンスは疑わない。だから、彼までも罪に問う気はないが、カルシスの所領は一旦預かり、この件が風化する頃まで、謹慎させるべきだろう。

そうなれば、その間に、ユーリンドは別の貴公子を探して縁づけてしまわなければならない。

どんなにか、愛娘に恨まれる事が、と、娘を溺愛する父親は、深く溜息をついた。

ひんやりと心地よい風が、頬を颯る。

だが、黄金色の髪は、しっとりとした汗で額に張り付き、風にふわふわと揺れる事はなかった。

冒険の第一段階の成功に、ユーリンドは興奮を覚え、涼しい夜気にあたっても尚、身体の火照りを感じていた。

軽やかな足取りで庭園を駆け抜け、馬屋の傍までたどりついた。

ここで馬を騒がせては、見張りの目にとまってしまうかも知れない。

慎重に、近づこうとしたその時……。

「誰だ？」

背後からの声に、ユーリンドは心底驚き、とびあがった。

暗がりには、男の影がみえる。誰かに見つかってしまった。彼女は、なんとかかこの場を誤魔化す為に、色々と考えていた台詞を頭の中に並べてみた。

「わ、わたし、怪しい者ではありませんわ。そ、その、姫さまのご用で、お使いに行くところ……」

影が、一歩近づいた。

「まさか……ユーリイ？」

雲が動き、月明かりが男の貌を照らし出した。

「ファル……！」

ローラムから戻ったファルシスが、単身、裏門から入り、馬を戻したところだったのだ。

「いったい、こんな時刻にこんなところで何をしているんだ？」

信じられない、という目で、ファルシスは双子の妹を眺めた。

しとやかで従順な姫君な筈の彼女が、夜中にたった一人で馬屋に

忍び込もうとしている、という状況は、臨機応変な彼の頭脳にも、すぐには受け入れがたいものだったのだ。

ユーリンドは、暫し動揺していたが、やがて開き直った。

「私、アトラに会いに行くの」

「……え？」

「お父様もお母様も、ひどいわ。私はアトラの許婚なのに、会ってはいけないなんて。私を見張らせて、部屋に閉じこめているのよ。だから私、自分で会いに行く事にしたの」

「……なるほど、そういう事か」

ファルシスは、事情を飲み込んだ。あの両親なら、そうする事だろう。

「止めないでね、お願い」

妹は必死の表情で、自分を見ている。ファルシスは、ふっと笑った。久しぶりに、笑う気分になった。

「止めないけど……どうやって、裏門から出るつもり？ 見張りの兵がいるよ？」

「それは……お使いを頼まれた、って言うわ。顔はフードに隠して

「真夜中に何のお使い？ 顔も見せない相手を通す程、彼らは不真面目じゃあないよ。それに、君の態度は怪しすぎる」

「そんな……」

ユーリンドは、思わず涙ぐんだ。自分では、完璧だと思ったのに、そうではないのだろうか？

ファルシスは、そんな妹に歩み寄り、ぼんと頭に手を乗せた。

「大丈夫。協力してあげるよ」

ユーリンドは、目深にフードを下ろし、兄の腕に包まれて馬の背に揺られていた。

夜半に帰館したばかりの若君が、顔を隠した女性を愛馬に乗せて、また裏門から出てゆくのを、見張りの兵は無論咎める事もなく、通してくれた。

夜のお忍びは、この公子には特に珍しい事でもなく、父親も黙認しているのだ。

フード越しに星明かりを感じながら、ユーリンドは深く吐息をついた。

うまく抜け出せた事は嬉しいが、自分一人では絶対に無理だったと、兄に断言された事が少し悔しい。

「ユーリイ、絶対に顔や髪を出しちゃだめだよ」
門を出る前にも行った注意を、ファルシスは再度妹の耳に囁いた。

自身も、注意深くフードを引き下ろしている。

事件のせいで、都には普段の賑わいはなく、表通りも人通りは少ない。

だが、そんな中でも、この夜更けに、大量殺人を犯したとされるルーン家の者が出歩いているのを見咎められたら、それがどんな事に発展するやも知れない。

民に篤く慕われる領主の子女とわかって狼藉を働く者はそうはいないと思われるが、ファルシスには、リディアの姉エリアの、敵意に満ちた瞳が忘れられない。

あのような視線を向けられたのは、生まれて初めての経験だったのだ。

「わかってるわ、ファル」

そう返答しながらも、ユーリンドは、ルーン家の名を、隠さなければならぬと言われた事が悲しい。

無論、こうした状況下でなくとも、深窓の姫君が、夜中に館を抜け出す、などという事が、他人に知られてよい筈もない事ではあったが。

こうして、兄と二人きりで外に出るなんて、いったい何年ぶりである事か。

幼い頃は、何もかもを分かち合った双子の兄妹であったのに、成長と共に、貴族の習慣が二人の間に見えない壁を築いていった気がする。

今しかないと思ったので、ユーリンドは尋ねてみる。

「ファル……どうしてこの間、お母様に怒っていたの？」

ファルシスは微かに身じろぎした。

「ユーリイ……知っていたのかい」

「ええ……偶然聞いてしまつて……ごめんなさい」

ファルシスは、馬の足を緩めた。

「ぼくもユーリイも、ルーン家の者として生まれて、誇りに思う事、素晴らしい事もたくさんあつたと思う。だけど……この家に生まれただけに、本当に大切な人と共に生きられないのなら、それはやはり不幸な事なのかも知れない……」

ユーリンドは、胸がどきんとした。彼女は勿論、本当に大切な人と生きていくつもりで、それが成らないとは思っていなかったからだ。

それから次に、ファルシスの大切な人とはいったい誰なのかと思つた。

ファルシスは、遊び慣れた主に年上の女性と、何度も浮き名を流している。

本当に想う娘と、身分違いの為に結ばれる事がない、という空虚さを埋める為の行動であるなど、ユーリンドには思いもつかず、顔を知る何人かのレディのうちの誰なのであろうか、と思わず想像を巡らせた。

だが何となく、それは誰なの、とは聞けなかった。

「父上も母上も、所詮は、ルーン家の世嗣としてのぼくが大切なんだ。そして、ルーン家の為には、誰かを不幸にしようと構わない。手段を選ばないんだ」

「そんな！ そんな事はないわ！ お父様やお母様が、誰かを不幸にするような事を、なさる筈がないわ！」

驚きの余り、無意識にフードをはねあげ、ユーリンドは兄を振り返った。

ファルシスは冷静に、妹のフードをまた元に戻した。

「じゃあ、きみはどうなの、ユーリイ。本人同士にはなんの咎もないのに、アトラとの仲を裂こうとされているだろ」

「それは……」

ユーリンドは返答に詰まった。

「ぼくは別に、両親が冷酷な人間だと言っている訳じゃないよ。ただ、ぼくたちはもう、自分の事、ルーン家の事、自分で考え、決められる年齢になっているのに、それを認めず、ぼくたちの生き方を操り、ぼくたちの大切な人の事などどうでもいい、という考えが許せない、と言っているんだ」

ユーリンドはうなだれた。

ファルシスの言う事は、きっと正しいのだろう。両親が自分や兄を愛してくれている事は間違いない。自分や兄に、幸福に生きて欲しいと願っている事も、多分間違いない。

でも、それが、その手段が、正しい事なのかどうか。それで自分や兄が本当に幸福になれるのかどうか。

答えが、見つからなかった。

カーテンの隙間から、月明かりが寢所に忍び込む。

アトラウスは、まだ眠るつもりはなかったが、ランプは点けず、薄く淡い月明かりの下で、壁の肖像画を見つめていた。

父親と継母に気を遣い、普段は隠していた肖像画。

だが、いま、父親はどこに居るのか知れず、継母は、この騒ぎで、娘と共に実家に戻っていた。

誰にも憚る事なく、アトラウスは肖像画を壁に飾った……自害した生母の肖像画を。

「母上……」

アトラウスは、絵を傷つけぬように気をつけながら、そっと指で母親の頬を撫でた。

「あと少しです……」

父親はいったい今、どこにいるのだろう。何の便りもない。

だが、やがて結末が来る。闇から光の中に出でても尚、探し求めたものが、もうすぐ得られる筈。

アトラウスは戦慄した。

控えめに、扉が叩かれた。

「若様。起きておいでですか」

押し殺したような執事の声に、思いを遮られ、アトラウスは苛立った。

「起きています。何か？」

「ユーリンド様がお見えです」

余りにも意外な言葉に、一瞬返答に詰まった。

もう館の者は寝静まっている時刻、あの、ひとりではフォークも用意できないような姫君が、この深夜に、いったいどうやって来たのだろう。まさか、父公爵が許可して取り計らった訳でもあるまい

に。

怪訝な気持ちを抱いたまま、彼女の待つ客間へ向かった。

「アトラ……私、来たわ。会いたかったの。叔父上のこと、信じているわ」

顔を見るなり、許婚はそんな風に言った。

「ユーリィ……会えて嬉しいよ。だけど、どうやって来たの？ 父君のお計らい？」

「まさか、そんな訳はないわ。私、窓から抜け出したのよ。それから……ファルが助けてくれたの」

成る程、とアトラウスは思った。窓から一人で抜け出したとは驚きだが、ファルシスが手助けしたと聞けば納得がいく。

「ファルはどこに？」

「別室で待つてるわ」

そう言つて、ユーリィダは一步、許婚に歩み寄つた。

窓から射す清廉な月明かりが、整つた細面を照らし出す。やつれてはいたが、白く浮かび上がったユーリィダの顔、愛しいひとにやつと逢えた歓びに輝く黄金色のひとみは、息を呑む程に美しかった。

「アトラ……もし……もしも……」

ユーリィダは、懸命にことばを探した。

今度いつ訪れるかわからない逢瀬、普段のように奥ゆかしく振る舞っている場合ではない。限られた時間に、言すべき事を言つておかなければならない。

「もし……お父様が、結婚を許してくれなくなつたら……私を、どこかへ連れて行ってくれる？ 二人でどこかへ行つて、一緒に……」

顔を赤らめながら、精一杯の勇気を振り絞つて、ユーリィダは言つた。きつとアトラは頷いてくれると信じながら。

だが、アトラウスの表情は翳つていた。

「……………」

「アトラ？」

返答が遅いので、ユーリンダの貌に不安が浮かぶ。アトラウスは面を伏せた。

「ユーリイ……それはできないよ」

「！アトラ！ そんな……どうして？ アトラは、結婚できなくなっても、いいの……?!」

ユーリンダのひとみが、信じられない、と語るように大きく見開かれた。

衝撃に思わず、涙がぼろぼろと零れた。アトラウスは悲しそうに吐息をついて、愛おしげにその涙を指で拭う。

「そんな事は……きみを不幸にしてしまう。何不自由なく暮らしてきたきみに、逃亡の生活なんて耐えられる筈がないよ。ぼくは、ぼくの為にきみを不幸にするくらいなら、遠くからきみの幸せを見つけている方がずっとましなんだ！」

「そんな、私なら大丈夫よ。アトラと一緒にさえいられば、幸せなの。アトラと離される以上の不幸なんてないわ！」

「いまはそう思うだろうけど……………」

アトラウスは、ユーリンダの、痛いほどにまつすぐな視線から逃れようとするかのように、窓の方へ顔を反らした。

「きつと、すぐにきみに相応しい男が現れる。そうだ、ティラール卿がいるじゃないか」

ユーリンダの眉が吊り上がった。

「あんなひと、大嫌いよ！」

アトラウスは、彼女の怒りを無視した。

「元々、この婚約は不釣り合いだったんだ。きみは、聖炎の神子となる身だが、身分から言えば、王妃にだってなり得る。一方、ぼくは一族の出来損ないで、怖ろしい犯罪を犯すような男の息子だ……。ぼくは、ぼくの子供をきみに産んで貰うのが怖い。聖炎の神子から、黒い髪と瞳の子どもが生まれたら……………」

「アトラ……アトラは、叔父上が……やったと思ってるの？」

「他に考えようがないじゃないか……」

「そんな事ないわ。信じなくちゃ……アトラが信じなくて、どうするの。私は信じているわ。アトラのお父様が、そんな怖ろしい事をする訳ないって」

アトラウスは苦笑した。

「ユーリイ、きみの気持ちは嬉しいけど……きみは、あの男の事をわかっていない。あの男は……」

ユーリンドは、アトラウスが自分の父親を、あの男呼ばわりするのを聞いて驚いたが、黙って次の言葉を待った。

アトラウスは少し躊躇いをみせたが、そのまま言葉を継いだ。

「妻を殺すような男だ……ぼくの母を……よく調べもせずに、何年も責め続け、死に追いやった」

「……それは……」

その経緯は、カレリンドからざっと聞いてはいたが、アトラウスがユーリンドに母親の話をするのは、実はこれが初めてのことだった。

いつも、楽しく、優しく、甘い話ばかりをしてきた。

愛おしいひとが、ようやくこんな段階になって、心の奥深くについた傷跡を垣間見せた事に、ユーリンドは何を言っただよいかまったく判らなかつた。

アトラウスは手をあげ、彼女が何か言おうとするのを制した。

「あの男を庇うような事を言うのはやめてくれ。きみにまでそんな事を言われたら、ぼくはただ、益々苦しいばかりだ」

「アトラ……私……」

自分が無力だと、この時ほど感じた事はなかつた。彼女はただ、黙って俯き、涙を流した。

アトラウスは、ふっと表情を和らげた。

「ごめんよ、ユーリイ。きみにこんな話を……折角、会いに来てくれたのに」

「いいの、いいの……私……なんにも判ってなくって、ごめんなさい……」

噀り泣く許婚を、アトラウスは優しく抱き寄せた。

「きみには、あかるい陽射しと、綺麗なドレスや飾り、甘いお菓子が似合う。きみはただ、それに包まれて笑ってればいいんだ。苦しみなんて何も知らずに……。そして、ぼくは、そんなきみを、この手で……」

アトラウスは、彼女の肩に回した手に、そっと力を込めた。

「この手で……守りたかった……でも、もう、出来そうにない……」

「そんな、そんな事言わないで……アトラ、私の傍にいて……」

かつてなかった程に間近に、アトラウスの顔があった。

白く澄んだ月明かりの中で、愛しい愛しいひとに抱き寄せられ、

ユーリンドは、経験した事のない歓びと哀しみを感じていた。

ユーリンドは、そっとひとみを閉じた。アトラウスの吐息がひそやかに顔に感じられた。

だが、その時……。

執事が強く扉を叩いた。

「ユーリンド様！ 至急、お戻り下さい！ お館からお迎えの者が参っております！」

ファルシスは、通された客間のテラスから、白く光る月を眺め、物思いに耽っていた。

ユーリンドは今頃、アトラウスに何を語っているのだろうか？もしもあの二人が駆け落ちをしたいと言うのなら、自分は喜んで手伝ってやりたい。

しかし、妹が家を捨てるのなら、自分は……？

妹と従兄に家を任せ、自分こそ家と両親から離れようと思っただ。

しかし、自分も妹も共に家を捨てる、などという事は、出来ない。

嫡男として育てられた身には、やはり、ルーン家の存続が何よりも大事であるという思いが、魂の底に染みついている。

自分の願いの為には家の存続などどうなってもよい、という風には、考える事が出来ないのだ。

だからこそ、ずっと胸に秘めてきたリディアへの愛は、生涯押し隠したままで、しかるべき妃を娶り、やがては父から爵位を継いで、父のような立派な領主となって生きていく事が当然だと、少年の頃から思い続けてきたのだ。

だが今、父親への尊敬の念は、薄れてしまった。

信じられない非道さ……次期当主となる自分の為に、と言われても、到底納得出来ない。

リディアが攫われた事を、アトラウスに相談したい。

ひとつ歳上の従兄は、常に親身に話を聞いてくれ、適切な助言をくれる。

気さくで隔てのない性格のファルシスは、友人も多かったが、本当の心の底を明かせるのは、やはり、血縁で、将来義兄となるアト

ラウスだけだった。

アトラウスとユーリンダには、是非幸せに生きて貰いたい。駆け落ちなどしなくとも、数年もすれば、今回のこともだんだんと記憶から薄れ、父も結婚を許すのではないだろうか？

それまで、他所に縁づけられないよう、自分がユーリンダを守ってやって……。

二人が結婚すれば、次期領主の座はアトラウスに譲り、自分はリディアと……リディアが、生きて傍に居てくれれば、だが……。

リディアは、どこにいるのだろうか？
少年の日、ある事件から、心が死んでしまうような孤独と恐怖を、誰にも知られずに、ひとり抱えていたあの頃、リディアの温かさが、かれを絶望の淵からすくい上げ、もとの明るい世界へ引き戻してくれた。

もし今、リディアが暗いところに囚われて怯えているのなら、どんな事をしてでも、救い出したいのに……彼女は、いったいどこにいるのだろうか……。

こうしている間にも、いのちが危険に晒されているかも知れないのに、手がかりは何もない。

そこまで思いを巡らせた時、玄関ホールの方が、急に騒がしくなってきた。

ファルシスは急いで廊下に出てみた。

館から誰か来たようだ。ユーリンダの不在が、気づかれてしまったのだろうか。

ファルシスは、大きく溜息をついた。

同じ頃、リディアは、高い所にある窓の格子の間から、薄く射し込む同じ月の光を見ていた。

毛布を与えられたが、眠る事は出来なかった。

夕暮れに味わった、あまりの衝撃に、頭は疲れている筈なのに、

眠気など訪れる気配もない。

『あなた様が……どうしてここに……』

薄笑いを浮かべて牢の扉に歩み寄ってきた男の姿に、リディアは暫く声も失い、それからようやく、絞り出すように細い声で問いかけた。

『おまえを助けに来た』

『えっ……？』

『……という言葉でも期待していたのか？残念だな。それは違う。おまえが察している通りだ』

『……あなた様が、私を攫わせた。そして、そして、あなた様が、あの怖ろしい事件を引き起こした？まさか、そんな……あり得ません！』

『あり得ないと思いたければ、思っておくがいい。おまえの考えなど、どうでもよい事だ。ただ、おまえにとって、幸いな事を伝えるに来てやっただけだ』

『……さいわい……なこと……？』

『そうだ。当面、おまえを殺すつもりはない、という事だ。おまえには、役に立つてもらわなければならぬからな』

『私に？』

『そうだ。これから、国中を驚かせるような事が起こる。そして、おまえは、計画に必要なのだ』

『私……私のような、ただの侍女に、何ができると思っているのですか……？！ 計画とは何ですか？！』

『いまにわかる』

それだけ言うと、男は笑いながら去って行った。

（まさか……ああ、ユーリンド様、ファルシス様……！ 私、いったいどうすれば……）

この日は、ユーリンドアにとって、生涯忘れ得ぬ日となった。

また逢いに来るから、と何度も念を押すように言いながら、泣く泣くアトラウスと別れた。

彼は諦めるような事を言っていたが、ユーリンドアにはまったくそんなつもりはない。

愛するが故に身を引こうと考えている彼を、今後、どんな風に力づけてゆけばいいだろうか？

彼と別々に生きてゆく程の不幸は彼女にとってあり得ないと、本当にちゃんと伝わっただろうか？

慌てふためいて、とりあえず彼女の所在を確かめに来た使者は、迎いの馬車までは用意していなかったので、帰路もまた兄の愛馬の背に揺られながら、ユーリンドアはそんな事ばかりを考え続けていた。

やがて、館が見えてきた。

空は、白みかけていた。

こんな時間に、外から自分の住居を見る事は、記憶に残る限り初めての事だった。

彼女は急に、疲れを感じた。眠りたい。これまでの人生で一番大きな冒険は、彼女にとっては一応の成功を収めた。あとは、暫し何も考えずに、柔らかな寝具にもぐりこみたいものだ。

玄関の前に、執事や乳母や侍女達と共に、両親が立っていた。

両親は、どうせ怒っているに決まっている。

それより、彼女は、泣きじゃくっている侍女の方が気になった。

彼女の部屋の次の間に控えていた侍女だ。きっと、両親や侍女長

に責められたのだろう。彼女には悪い事をしてしまった……。

「ユーリイ……無事で……」

カレリンダが感極まった声をあげたが、その隣で、アルフォンスは無言だった。

「……ごめんなさい、お父様、お母様。でも私……」

少しだけふてくされた表情で俯き気味にユーリンダが言いかけた時。

アルフォンスは娘に歩み寄り、その頬を打った。

「……！！」

思いもしなかった衝撃に、ユーリンダの細い身体はよろけて倒れかかり、それをかろうじてファルシスが背後から受け止めた。

「ちよつと待って下さい、ちちう……」

驚いて言いかけた息子の頬を、今度は拳でアルフォンスは殴った。

ファルシスと、彼に支えられていたユーリンダは、共に地面の上に投げ出された。

「あなた……！」

「お止め下さい、公爵様！」

温厚なアルフォンスの怒りの爆発に、殴られた当人達も周囲も、驚きに息を呑んだ。

息子の教育には厳しい面も見せるアルフォンスだったが、愛娘にはひたすら甘く、手をあげるなど、当人にも誰にも、これまで考えもつかなかった事だからだ。

「どれだけ……どれだけ心配をかけるんだ?!」

公爵は身体を震わせて怒鳴った。

ファルシスは、口元についた血を拭いながら立ち上がり、妹の手を引いて助け起こした。

その面には、少々の呆れが浮かんでいる。

「心配って……許婚のところに行っただけではありませんか。父上

が無体に会う事を禁じられたから、こんな手段しかなかったんだ」
兄の言葉に、痛みと驚きに呆然としていたユーリンドも励まされた。

「そ、そうだわ。黙って抜け出したのはいけない事だけれど、元々は、お父様やお母様が、無茶な事を仰るからなのよ。アトラが傷ついている時に、私が会ってはいけないなんて……！」

「……」

アルフォンスの瞳から、興奮と怒りが消えた。かれは嘆息した。

「ファルシス、きみまでそんな事を言うのか？ わたしは、ユーリイがアトラウスに会ったから怒っている訳ではない。そんな事も解らないとは、悲しい事だ」

ファルシスとユーリンドは戸惑った。

「それは……？」

黙り込んだアルフォンスに代わって、カレリンドが口を開く。

「あなたたちは、後先考えずにした事でしょうけれど、大人しいユーリンドが、自分で3階の部屋から抜け出して、この数日騎士団の宿舎の方に寝泊まりして帰っていないかったファルシスが手助けして、警護の騎士がいる門から出て行くななんて、誰が思うでしょう？ 私たちは皆、ユーリンドの不在に気づいた時、真っ先に思ったのですよ。カルシスに連れ去られたに違いないと……！！！」

ユーリンドとファルシスは、言葉が出なかった。

両親や館の者達がそんな風に思うとは、想像していなかったのだ。

「も……申し訳ありません、父上、母上」

ファルシスは詫びた。それに思い至らなかつた己を恥じ、やや赤面している。

ユーリンドも、続いて詫びようと思った。

だが、その時……騎士の喚くような声が、その場に響き渡った。

「た、大変でございます！ 一大事でございます！」

都市の大門の警備所に詰めていた筈の騎士だった。

それが、乗馬のまま、血相を変えて駆け寄り、転がり落ちるように馬から下りて跪いた。

「一大事でございます!!」

繰り返す騎士に、面をこわばらせながら、

「いったい何事だ？」

とアルフォンスは問いかけた。

「は、申し上げます。金獅子騎士団団長、ウルミス・ヴァルディン様が……開門を要求され……」

騎士はそこで、言葉に詰まったように言い淀んだ。

アルフォンスは怪訝そうな表情で騎士を見つめた。

「ウルミスは我が旧友だ。訪問の知らせは受けていないが……何が一大事なのだ？」

「ウルミス卿の配下はおよそ五十騎の精鋭……公爵様にお知らせするまで、その場にお留まり頂くよう、尽力したのですが、備えもなく、また、剣を交えてもよいものか判断もつかず……申し訳ございません!!」

「……剣を交えるだと？ 気でも狂ったのか？ なぜ、国王陛下直属の金獅子騎士団と剣を交えるなど……」

その次に見た光景は、この朝から始まった長い長い悪夢の発端であり、射し始めた朝日を受けて、煌めく金色の鎧や兜は、ユーリンドダにとって、生涯忘れ得ぬ恐怖の象徴として、眼に焼き付き消え失せぬものとなった。

金獅子騎士団団長ウルミス・ヴァルディンとその配下の騎士達は、息苦しい程の重圧感を放ちながら、館の正門に通じる道からゆっくりと進んで来た。

待ち受ける人々の目についたのは、騎士達に幾重にも囲まれた一台の馬車だった。

それは粗末な造りのもので、窓には板で目張りがされている。

囚人を護送する為のものだと、ユーリンドにさえ、察しがついた。

いったい、誰を護送する為のものなのか？

罪びと……という言葉に、ユーリンドの脳裏に真つ先に浮かんだのは、叔父、カルシスだった。

事件を起こしたカルシスを捕らえに来たのだろうか？ やはり叔

父は、怖ろしい罪を犯したのだろうか？

ユーリンドは、恐ろしさと辛さに震えた。

一方、公爵夫妻やファルシス、執事などは、ユーリンドよりずっと、物事を理解していた。

いくら国中至るところで噂になっていることとはいえ、地方で起こった事件……貴族の子女も含まれているとはいえ、犠牲者の多くは平民に過ぎない事件の為に、国王直属の騎士団がわざわざ出向く筈もない事くらい、当然察しがつく。

ウルミス・ヴァルディンは、重い空気の中、ゆっくりと馬を下りた。

気の進まない瞬間を迎えるのを、少しでも遅らせようとするかのよう。

18年前、前国王の御前試合で、全力を出し尽くしてアルフォンスとウルミスは闘った。

ほんの僅かな運の傾きで、勝利はアルフォンスにもたらされたが、以後、二人は親友となり、年に数回、アルフォンスが王都を訪れた際には、必ず共に酒杯を交わすし、互いの領地も行き来する仲である。

ウルミスは、実直で、情に脆い男だった。無論、金獅子騎士団

長の名に恥じぬ剣豪でもある。

「ウルミス……いったい……？」

躊躇いがちに声をかけたアルフォンスの顔を辛そうに見つめたウルミスは、独言のように小さく声を発した。

「やはり……これは間違いなのだ。その顔を見れば、わかる」

「閣下！」

咎めるような声をあげたのは、彼の背後の部下。

「わかっている」

ウルミスは短く言った。

それから、懐から一枚の書状を取り出した。国王の印のある正式な書状である。

彼はそれを広げ、アルフォンスに突きつけた。

「これは、勅命である。アルフォンス・エル・アルマヴィラ・ルーン。卿は、大逆罪……恐れ多くも、国王陛下の暗殺を企てた罪で告発されている。わたしは、速やかに、卿を捕らえ、王都へ護送するよう、命を受けてここに来たのだ」

場が沈黙に包まれたのは、刹那のことか、数刻か。
ルーン家のひとびととその家臣達は、それすら直ぐには判らぬほどの衝撃を受けていた。

侍女の中には、誰かに説明を求めるかのように、不思議そうにきよるきよると辺りを見回す者もあった。

誰もが予期し得なかった宣告に、暫し、その場の刻が止まったかのように思われた。

その沈黙を、最初に破ったのは、ファルシスだった。

「いったい、何の事ですか?! あり得ない!」

若さから、彼は、国王直属の騎士団団長にして、父親の親友であるウルミスに対する礼儀も忘れ、顔色を変えて詰め寄った。

「大逆罪、とは如何なる事でしょうか? 父はこのところずっと、ここを離れていないし、何のおかしな事ありません。暗殺など…こんなところから、都まで刺客を差し向けた、とでもいうのですか? 国王陛下に対する忠誠は、他の誰にも劣らぬ事は、息子のほかが一番よく知っています。そして、父と親しいあなたもご存じの筈だ!」

「……控えないか、ファルシス」

乾いてかすれた声で、アルフォンスは息子を制した。ウルミスは悲しげに首を振った。

「構わない。まったく当然の疑問だ。……そして、きみはどうなのだ、アルフォンス? ご子息と同じ疑問を放つのか? それとも、罪を受け入れるのか?」

「受け入れられる筈もない」

アルフォンスは即答した。息子の言葉のおかげで、かれは衝撃から立ち直り、徐々に冷静さを取り戻しつつあった。

「わたしが陛下に背いたと？ いや、それより、暗殺とは穏やかでないが、まさか陛下の御身に何事があったのか？ こんな田舎にあつては、何も知りようもない。教えてくれ、ウルミス」

「陛下は御無事だ。はつきり言おう。刺客などではない。きみは、呪術によつて、恐れ多くも陛下を弑逆せんと企てた、と、告発されているのだ」

ウルミスは、アルフォンスをひたと見据えて告げた。

「呪術……だと？」

その言葉に、アルフォンスは顔色を無くした。

「やはり、心当たりがおりなのですか」

ウルミスの背後の副団長がすかさず言った。

「まさか……しかし……」

アルフォンスは、咄嗟にうまい返答を考え出す事ができなかった。だが、直ぐに思い定めた。

あの事は、既に国中の噂になつてゐる。ウルミス以下の者達が、派遣されてここにいるという事は、王都の方で独自に調査を行い、確信を得た結果なのだろう。下手な隠し立てなどは、かえつて状況を悪化させる事に他ならない。まずは、とんでもない誤解を解かなければならない。

「……確かに、最近我が領内で、多くの婦女子が惨殺され、その被害が呪術目的だったと推測されている。その事について、様々な憶測がなされ、国中で噂されているとも聞いている。こちらでは、一刻も早くその犯人と推測されている者の身柄を拘束すべく、都警備隊と騎士達が尽力している所だ。だが、まさかその呪術の目的が、陛下の呪殺などという大それた、恐るべき企みだとは、こちらではまったく掴めていなかった」

「ほう？ それはおかしな事ですな」

幾分揶揄するような口調で、金獅子騎士団副団長ノーシュ・バランは言った。

「ご領主のルーン公がご存じないとは……この呪術の真相について、鑑定を行ったのは、このアルマヴィラのルルア大神殿の長にして、公の従兄であられる、ダルシオン・ヴィーン様であるというのに？」

「なん……だつて？」

今度こそ、アルフォンスはことばを失った。

「ノーシユの言う通りなのだ、アルフォンス」

沈鬱な声でウルミスが言う。

「ほんとうに知らなかったのか。ではいったい、誰がどのような目的で、これを行ったと思っていたのか？」

「身内の恥だが……我が弟カルシスがやった事だと思っていた。私への呪詛だろうと……。かれは、事件が発覚して以来、消息を絶っている。私が陛下を弑するなどんでもない。それに、弟にも、そんな大それた事をする理由も能力もない筈だ。まずは、弟を捜し出し、その意図を尋ねよう。大逆などとは、まったく見当違いだと、すぐに判る筈だ」

「その必要はない」

「……え？」

親友の返答に、アルフォンスは不思議そうにその目を見返した。ウルミス・ヴァルデインは、その視線を避けようと、余所を見やるふりをしたが、険しいルーン家側のひとびとの視線にぶつかって、僅かに目を伏せた。

「カルシスどのを捜す必要はない。かれは、王都に滞在している。アルフォンス・ルーン、卿の大逆罪について、国王陛下直々に目通りを願ひ、告発したのは、きみのただひとりの弟なのだよ……」

ユーリンドは、目の前で何が起きているのか、まったく解らなかつた。

大逆罪？ 国王を呪殺？ カルシスが告発？

ウルミスおじさまはいつたい何を言っているのだろうか？

すべては、まるで現実とはかけ離れた、造りもののお芝居のように感じられた。

ただ、お芝居にしては、周りのひとびとの反応が、あまりに深刻めいていた。

カレリンドは、貧血を起こしてよろめき、侍女頭の腕に支えられた。

「……不吉を感じていました、昨夜から。私は、ユーリンドの身に何か起こったのだと思ったのです……。まさか、こんな……」

ファルシスは、顔を真っ赤にして喚いた。

「こんなばかな話はない！ 叔父は、昔から父とは不仲だった。とち狂って、そのような事をしでかしたんだ。父に罪をなすりつけようと。呪殺……？ 我が父がそんな卑劣な事が出来る人間かどうか、ウルミス卿、あなたもよくご存じだろうに！」

ウルミスは、悲しげに軽く首を振った。

「わたしは、陛下に剣を捧げた騎士。わたし自身が何を知っているかは、この件に関して何の救いも与え得ないのだ。わたしは、アルフォンスの人柄を知るのみ。一方、カルシス卿は、この告発に、ちやんとした証拠を添えている。彼を支持する人もいる。そして何より、陛下が、この告発を真実と思われているのだよ……」

「陛下は……これを信じておられるのか。わたしが、陛下を弑そうと企んだと」

アルフォンスは、呻くように言葉を発し、片手で顔を覆った。

「……きみに告げるのは辛い。だが、いずれは耳に入ることだろうから、わたしの口から言っておこう。陛下は激怒され、すぐにきみの首を持ってくるようにと仰せだった。それを、居合わせたラングレイ公とわたしが、何とか押しとどめ、まずはきみの身柄を拘束して、エルスタックで裁判を行う、という話になったのだ。だからどうか堪えて、あの馬車に乗ってほしい。或いは、それは、きみの命運を断つ結果になるかも知れないが……わたしは、出来る限りの尽力をして、きみを擁護すると誓う。きみの様子を見て、わたしなりに、真実を悟ったからな」

「……ウルミス。きみの友情に感謝する」

くぐもった声でアルフォンスは言い、顔を上げた。その顔は蒼白だったが、瞳には、徐々に冷静さが戻りつつあった。

「了承した。まずは、陛下にお目にかかり、話を聞いて頂かなくては。それに、カルシス。ああ、勿論、わたしはエルスタックに行かねばならない。身の回りの支度をする時間をくれるか、ウルミス」

「勿論だとも。我々はここで待っている」

「閣下、某がルーン公に付き添いましよう」

アルフォンスは、進み出たノーシユ・バランスを冷ややかに睨め付けた。

「無礼者。わたしが逃亡するとても申すのか」

物静かだったが、その声には、アルフォンスの失脚を確信している様子の副団長を一步下がらせる力が込められていた。

「い、いや、しかし……」

「わたしが付き添おう。勿論、きみを監視する為ではなく、話を続ける為だ。いいだろう、ルーン公？」

「当然だとも、団長閣下」

アルフォンスは謝意を込めて旧友を見返し、引きつった面持ちの

家人の方を見やった。

「大丈夫か、カレリンダ？」

侍女頭に支えられている妻に歩み寄り、心配顔でその面を覗き込む。

「わたくしは大丈夫ですわ。でも、あなた……！」

「横にならなくて大丈夫か？では、ちよつと待っていてくれ。ファルも、ユーリイも」

そう言うと、彼は、わなわなと震えている老執事のウォルダースを軽く促し、ウルミスと共に、館へ入っていった。

程なく、小姓に荷を運ばせて、ルーン公は戻って来た。

大貴族といえども大逆の罪人の疑いをもって護送される身としては、ごく僅かな品の携行しか許されない。

身の回りの世話をする為、一人だけ随行を許された、気に入りの小姓のリックが、荷物を馬車に積んでいる間、アルフォンスは家族と話をする事が出来た。

「ファルシス、あとを頼む」

「父上……！！」

強ばった表情のファルシスを力づけるように、アルフォンスは微笑みを浮かべて息子の肩を叩いた。

「ルルアに誓って、わたしは何の罪も犯していない。だから、何も心配はいらない。カレリンダも、ユーリンダも、わかったかね？」

「あなた……アルフ……ああ、なんという事でしょう……！」

妃は遂に耐えきれずに、大粒の涙を零した。

「あんまりですわ！王家に対し、長年の忠誠を尽くして来られたあなたですのに、なぜ、どうして、こんな愚かな告発が通るのですか？！」

「大丈夫だと言うのに。陛下はきつと解つて下さる。きみは、ルルアに祈つて待つていておくれ。そうだ、あの、結婚を賭けた御前試合に赴いた時のように。あの時の護り刀がない事だけが、少し不安

だけでもね」

「……これをお持ちになつて」

夫の言葉に、思い出したようにカレリンダは、首にかけていたペ
ンダントを外した。

「僅かですが、守護の魔力を込めています」

「ありがとうございます、カリイ」

アルフォンスは、妻の頬に口づけた。

それから、今にも気を失いそうな様子の愛娘の頭を優しく撫でた。

「良い子にしているんだよ。もう、お母様に心配をかけないように」

「おとうさま……」

ほろほろとユーリンダは涙を流し続けた。何か言わなければいけ
ない、と思うのに、言葉が出てこない。

少しでも怖いことがあると、これまではいつも、優しく強い父親
が、彼女を護ってくれていた。

いま、これまで経験した事がない程に怖いことが起こっていると
いうのに、父親は彼女の前から連れて行かれようとしている。

ルーン公爵が、望みもしないのにどこかに連れて行かれるなど、
想像した事もなかったのに。

意識を手放してしまいそうなくらい、怖い。気を失って、目覚め
れば、これはたぶん、ただの恐ろしい夢に過ぎなくなっているだろ
う。だからもう、目を瞑ってしまいたい……。

そう思いながらも、ユーリンダは父親の顔から目が離せないでい
た。

もしかしたら、いまが、愛する父親との永のわかれになるかもし
れない。

考えたくもないのに、そんな思いが、いくら逃れようとしても決
して離れない自分の影のように、胸の内から消えないでいたからだ
った。

何も言えずにいる娘を優しく抱きしめ、アルフォンスは再び嫡男の顔を見た。

「ハーヴィスとダグは力になるだろう。大神官とノイリオンには気をつけるように。……それから、アトラは……この件には無関係だろうと、わたしは思う。だが、きみの判断に任せる。母上とウォルダースに色々相談して……また、書簡をよこすから……頼む」

「はい、父上」

ファルシスは、下唇を噛み、しっかりと父親の眼を見つめた。

「道中、お気をつけて……御無事な御帰還をお待ちしております。

こちらの事は、どうぞ心配なされませぬよう……しっかりと留守を守ります」

「頼もしくなったな、ファル。では、行ってくるよ」

アルフォンスは微笑を浮かべ、もう一度息子の肩に触れると、踵を返した。

その様子はまるきり、普段の公務をこなしに王都に出向く時と、変わりがなかった。

アルフォンス・ルーン公爵は、何の動揺も見せず、理知的で穏やかないつもの気品と風格を纏い、まるで事態を樂觀視しているかのように、周囲に思わせた。

その様子は、少しばかりは、ルーン家側のひとびとを力づけた。

「これはひどい、この馬車は」

罪人護送の粗末な板張りの馬車に乗り込む時、かれは肩を竦めて言った。

「腰を痛めそうだ。なんとかならないのか、ウルミス？」

「後でクッションを用意させよう。それで我慢してくれ」

ぎこちなく笑って、ウルミスは答えた。

こうして、アルフォンス・ルーンは、アルマヴィラを発ち、王都エルスタックへの旅路に就いた。

騎士団の最後のひとりの姿がみえなくなるのと同時に、ユーリン

ダはくずおれて意識を失った。

なぜ、父に、心配をかけてごめんなさい、と言えなかったのか、
と、心の奥で、悔やみながら。

23 (後書き)

第一部 完

ヴェルサリア王国は、広大な面積を持つバルトリア大陸に於いて、大陸暦354年から、約250年にわたって栄えている王国である。大陸の面積の、約7割を占める国土を持つ。

残りのうち、1割は、北方の山脈とその果ての未踏の地。

後の2割は、東や西の僻地、辺境、と呼ばれる地域。ヴェルサリア人が蛮族と蔑む、自給自足の人々が暮らす、痩せた土地である。

かつては、この大陸も、いくつもの公国が並び立ち、大陸の覇権を得んとする戦の続いた時代もあった。

だが、その中から遂に、ヴェルサリア家が抜きん出て、国家統一を成し遂げてから約250年、大陸は、緩やかな繁栄と、表面上の平和に恵まれ、安寧なときを過ごしていた。

現国王エルディス3世は、第15代国王。若干19歳。父王の突如の事故死の後の即位から、まだ一年と少しである。

鶯色の髪と瞳を持つ優美な若者で、少年の頃から、帝王の器を充分に備えていると評判が高かった。

争い事を疎み、書を好み、しかし、武芸の腕前も天賦の才を持ち合わせている。

下々の者にも常に公平で優しく、王太子時代、宮廷に仕える者を始め、民草に人気が高かった。

しかし、そんな性質が、やや変貌してきたと、最初に傍仕えの者達を感じ始めたのは、王が、即位とほぼ同時に、王妃を娶って程な頃の頃からである。

王妃リーリア。宰相アロール・バロツクの嫡男シャサールの長女。絶世の美姫との評判と、学問塔の博士達も舌を巻く才気と知識を併せ持つ。

この、非の打ち所のない王妃は、同時に、強い選民意識も持ち合

わせ、初めてにして唯一の女性を得た王を虜にしたばかりか、多大な影響を与えていた。

王都エルスタックは、大陸のほぼ中央部に位置する。

気流の関係で、同じ緯度の他の地方より温暖で過ごしやすい気候である。

国王直轄地及び七公爵領全てに通じる街道の集結点であり、大陸の要として常に賑わう、地方の者にとっては、憧れの都なのである。高い城壁に囲まれた城塞都市であり、万が一外から攻撃を受けても、半年は保ち堪えると言われている。

ヴェルサリア王国には、王家の下、七公爵家と呼ばれる大貴族が存在する。

バロック、ローズナー、ヴェイヨン、ルーン、ブルーブラン、ラングレイ、グリーンサム。

かつて、王国建立前、ヴェルサリア家と鎬を削った公国の主の末裔である。

筆頭は、イルランドのバロック。

イルランド地方は肥沃な平地で、王都にもほど近い、要となる地域。

当主にして宰相のアール・バロックは59歳。

国の重鎮にして王妃の祖父でもあり、王妃を通じて、若き王に多大な影響を与え得る存在である。

アルポートのローズナー。

アルポートとジョーレイは、南方で、大きな港町を含み、他国との貿易による益により富んでいる。

当主は、女公爵のスザナ・ローズナー、39歳。

快活で気っ風の良い女性であり、女ながらに武芸も嗜む。

ジョーレイのヴェイヨン。

当主は、ローダー・ヴェイヨン、55歳。

嫡男がアロール・バロックの長女を娶っており、バロック家との関係が深い。

ローダーは、物欲が強く、酷薄な人物で、領民からもあまり慕われていない。

シルクウツドのブルーブラン。

シルクウツドは西方で、織物や細工物の生産が盛んな地域である。

当主は、リッター・ブルーブラン、25歳。

少々浮世離れた所があり、風流を、王家の次に愛すと公言している。

オースタンのラングレイ。

オースタンは北方の痩せた土地が多く、険しい山脈と接し、そこに暮らす人々の気風は、質実剛健。

当主は、ポール・ラングレイ、62歳。

落ち着いた人格者で、尊敬と親しみを込めて、ラングレイ老公、と呼ばれる。

グリムのグリーンサム。

グリムは、七公爵家の領地で最も狭く、その大半は深い森で、王都に距離的に近いにも関わらず、未開で排他的な土地柄である。

当主は、シュリク・グリーンサム、8歳。

半年前に前領主が急逝し、跡目を継いだが、実権は、母親のイサーナが握っている。

そして、アルマヴィラのルーン。

当主は、アルフォンス・ルーン、36歳。

アルマヴィラは、光神ルルアの大神殿が建立された聖地であり、領内に国内最大の金鉱を有し、一帯は栄え、治安もよい……よかつた。

多数の乙女が誘拐、殺害され、その心臓の血が、国王呪殺を目的とした呪詛に用いられ、事もあるうちに、その大罪を犯したのが領主アルフォンスとされ、王都に護送される事態になるまでは……。

カーテンを透かして柔らかくに射し込む、陽の光に包まれてユーリ
ンダは目覚めた。

いつもと変わらぬ、清潔で上等な寝具に包まれて、彼女は自分の
寝台に眠っていたのだ。

ユーリンダは思わず、安堵の笑みを洩らした。

そう、やっぱりあれは悪い夢だったのだ、と、確信したからだ。
普段通りの自室。何かが起こった様子などまるでない。違うと言え
ば、今が朝ではなく、正午を過ぎているようだという事くらいだが、
昨夜は冒険をしたので、疲れて寝坊をしてしまっただけの事だ。

お父様やお母様に心配をかけて申し訳なかった。きちんと謝りそ
びれたので、早くお父様とお母様にお目にかかって、お詫びをしな
くては。

彼女は起き上がって寝台を離れ、ガウンを羽織ってバルコニーに
出た。光を浴びて、しっかり目を覚まそうと思ったのだ。

見慣れた庭園を見下ろした時、彼女の眼に、見慣れないものが映
った。

陽光を浴びて燦々と煌めく黄金色の鎧。彼女は悲鳴をあげた。

「姫さま?!」

悲鳴を聞いて、すぐに次の間から侍女が現れた。

「お気がつかれたのですね。よかったです」

マリスという年かさの侍女は、混乱してよろめいたユーリンダ
の肩をしっかりと受け止めた。

「なに……あれは。どうして、ここにいるの?!」

「金獅子騎士団の騎士でございますよ。暴徒からご家族を護る為、
と称して見回っているのです」

「暴徒……暴徒ってなに?!」

マリースは困ったように作り笑いを浮かべた。

「それは……物騒な事件が起こっていますし……」

その時、別の侍女に呼ばれたカレリンド妃が室に入ってきた。

「ユーリンド？大丈夫ですか？いきなり倒れるのだから、心配したわ」

「お母様……」

カレリンド妃は、げっそりと竄れていた。光り輝く美しき聖炎の神子、と吟遊詩人に謳われる美貌がかすんだようだ。

カレリンドは、侍女達に下がるように言い、ユーリンドを寝台に座らせ、自身も並んで腰をかけた。

「ユーリイ……気を強く持たなければなりませんよ。あなたを様々な現実から護って下さっていたお父様は、もうここにはいないのです。これからは、あなたも、ひとりの大人として、ルーン家の長女として、事実には立ち向かっていかなければいけません」

「事実……ああ、やっぱりお父様が連れて行かれたのは、事実だったのね。夢ではなかったのね」

カレリンドは、悲しげに口元を歪めた。

「夢ですって……あなたらしいわ」

「お父様は……どうなってしまうの？」

「……」
たった今、現実を知るように説教したばかりでありながらも、カレリンドは、この質問にいったいどのような言葉で答えればいいのか、この娘に耐えられるのか、と迷った。しかし、この期に及んで言葉を濁しても、結局後で知る事になるだけだ。それに、いくら現実に疎い娘でも、大逆罪がどのような罪で、それを犯せばどうなるのかくらい、勿論本当は解っている筈だ。

「もしも……この告発が事実だと、裁判で判決が下されれば、死罪です。それ以外にはあり得ないでしょう……」

途端に、ユーリンドの瞳から涙がこぼれ落ちた。また娘が気絶す

るのではと思つたカレリンダは、慌てて付け加える。

「でもね、お父様は無実なのですから、そんな事になる筈はありません。ルルアがお護り下さいます。罪はカルシスの方にあると、真実が必ず明らかになる筈です」

「カルシス叔父様がいけないの？ カルシス叔父様が、お父様に罪をなすりつけたという事なの？」

「勿論、そういう事です。カルシスはずっと、お父様を妬んでいた……あなたまさか、本当にお父様が罪を犯したなんて思っていないでしょうね？」

「まあお母様、どうしてそんな事を仰るの?! そんな事を思う筈がないでしょう?! あんなに……誰にでも優しく、高潔で、国王陛下に常に忠実でいらつしやつたお父様の事を!」

ユーリンダは憤慨した。母は、素直に謝つた。

「……そうね、ごめんなさい、ユーリイ。わたくし、どうかしていいわ」

だがこの時、ふとユーリンダの脳裏に浮かんだ光景があつた。誰かが、お父様の事を、卑怯だと言つていた気がする。そんな訳はないのに……あれは、いつ、誰が言つたのだつただろう?

混乱しているユーリンダの頭は、それ以上、その事を詳しく思い出す事は出来なかつた。

「お母様……私達はどうなるのでしょうか？」

「……わかりません。今のところ、私とあなたは、外出を禁じられ、この館に軟禁されている状態です。見た通り、館の外には、ウルミス卿の残していった騎士たちがいます」

「マリースは、暴徒がいる、と言つたわ。暴徒つて、どういう事？」

「ああユーリイ、アルマヴィラの民が、この館を襲うなんて事はあり得ないわ。マリースの言つた事は気にしないで」

強い口調でカレリンダは言つたが、その瞳には、微かな不安の影がある。これまで、アルマヴィラの民はずっと、領主に忠実で、特

にアルフォンスは、領民に慕われていた。だが、もしも、大衆が、この罪を本当にアルフォンスが犯したと信じ込まされてしまえば、どうなるだろう？ 忠誠を誓っていた公爵が実は、罪のない娘たちを、おぞましい儀式の贄にする為に殺害するような人物だった、と教えられれば？

「ファルはどこにいるの？ ……それから、アトラは？」

カレリンダの答えを素直に受け入れたらしいユーリンダの問いに、カレリンダは、不安を心の奥底へ押しやった。

「ファルは騎士団の宿舎の方で謹慎しています。アトラの事は、わたくしには分かりません」

アトラウスの名が出た事で、母子の間に微妙な空気が流れた。カレリンダは、アトラウスの事をどう考えてよいか、判断しかねていた。父親とぐるであるのか、何も知らされていないのか。

アトラウスがもし逢いに来たら逢ってよいか、ユーリンダは母親に尋ねたかった。だが、母が怒るかも知れないと思い、彼女はそれを言い出せなかった。

「ファルはじゃあ、無事だけでも、当分帰って来られないのね？」

「…ああ、せめてリディアがいてくれたら、私を力づけてくれるのに！」

「そうね……でも、リディアにとっては、ここにいないくてよかったでしょう。館の者は皆、怯えています。リディアには嫁ぎ先も決まっているのだし、ここに戻らず、普通の暮らしをしていく事が出来るのですから。あなたも、自分の事ばかり考えず、そういう風に思ってみてごらん下さい。お父様は、いつもそうなさっていますよ」

「そんな……もう、今まで通りには戻れないような事を仰らないでお父様は帰ってこられる。そして、また元の通りになるわ。そうでしょう？！」

「そう……そうね。あなたの言う通りだわ。ごめんなさい、ユーリイ。一睡もしていないものだから、わたくし、おかしい事を言ってしまうのかも知れないわ。リディアは嫁いでもまたここで勤めるで

しょうし、ファルも良い相手を探して……あなたも……」

カレリンドは、言いながら、眉間に指を当てた。

「少し休む事にします。あなたは、あまり心配せずに、お父様の為にお祈りをしてください」

そう言い残して、彼女は立ち去ろうとした。その時、丁度マリィスが、客の訪れを告げに来た。

「お妃様、姫さま。アトラウス様がお見えになっています」

ファルシスは、騎士団の宿舎の固い寝台の上に身体を伸ばしていた。

昨夜は一睡もしていないにも関わらず、横になってもまったく眠気は訪れない。眠って、ほんの一刻でも、現実から逃れたいのに。

これからどうなるのか。カルシスの目的は何なのか、いったい誰と誰が関与しているのか。情報があまりにも少なすぎた。

判っているのは、これが前代未聞の事態であるという事だけだ。

王の信篤い筈の七公爵の一人が、罪人として王都へ護送されるなど、建国以来の歴史のどこにも、起こった事のない事件である。

もし、父親が有罪となつたら？ 当然、父は死罪、大逆人の嫡男という事で、自分も死罪となる可能性もある。よくても永久追放……。

ほんの昨日まで、自らすべてを捨てる覚悟を決めていたのに、いま、自分の意志とは遠いところで、すべてを奪われようとしている事が、他人事のように、不思議に感じられた。

愛の為に家を捨てようなどと考えていた昨夜までの自分自身もまた、他人のように思われた。

この、家の一大事に、自分の個人的な感情は、自然と胸の奥深くに沈んでいる。リディアの事を想わぬ訳ではないが、いま、彼女の為にしてやれる事は何ひとつない。彼女が自分自身の力で、陥っているであろう苦境から逃れ得るように祈るばかりだ。

いまは、アルフォンス・ルーン公の嫡男として、家と名誉を守り、母と妹の身を護ることを考えなければならぬ。その為の事ならば、この軟禁状態の身でも、出来る事はある筈だ。

今のところは、面会などは禁じられておらず、この建物の中に限っては、自由に過ごす事が出来る。

まずは、父が信頼できると言い残した騎士団団長ウィルムと警備隊長のダリウスに会って、都の様子、旗下の貴族や騎士たちの動向、そして何より、アトラウスの関与と、カルシス、ヴィーン家の内情を探らなければならない。

アトラウスが関わっているとは疑いたくないが、可能性を考えておく必要がある。

「若君、団長閣下が面会を希望されています」

彼の身の回りの世話を担当する、見習い騎士の少年が扉をおらずと叩き、そう告げた。

すぐに通すように言うよりも早く、聖炎騎士団団長ハーヴィス・ウィルムは少年の背後から歩み寄って来た。

「若……申し訳ござらん」

これが、ウィルムの第一声であった。喉の奥から絞り出すような、無念さを湛えた声。

「団長殿……何を謝られるのですか？」

ファルシスは次期領主であるが、現在は、団長配下の騎士団の一員でもある。団長には常に敬意をもって接しているし、ウィルムも、若君相手といえども、普段の待遇においては、他の騎士と差をつけるような事はしなかった。

ウィルムは、先代領主の時代から聖炎騎士団を束ねる長で、現在62歳。

厳格な武人で、先代からもアルフォンスからも信頼篤い人物である。以前から本人が希望していた引退の話が、そろそろ現実化する空気があった矢先のこの事態に、老武人はいたく衝撃を受け、それを隠しきれないでいた。

「某が地方へ出向いている間にこんな事に……某がおれば、むざむざと殿を連れて行かせはしなかったものを。ウルミス卿と刺し違えてでも、殿をお護りしたものを！」

「しっ、滅多な事を仰るものではありません」

ファルシスは、慌てて戸口の方へ視線を走らせた。人の気配はないが、しかし、ウィルムの言葉は余りに不用意なものであると思っ
た。

「どこに金獅子騎士団の耳があるか知れませんが、それに、父はその
ような事は決して望んでいませんでした」

「しかし……裁判だなどと言っても、カルシス卿などの狂言を真に
受けるような王の御前で、本当に公正な裁判が行われるのか……」

「団長殿！」

ファルシスは一層表情を険しくし、早口で言った。

「我らがここで陛下の批判などしていたと金獅子騎士団の者に言わ
れれば、一層父の立場が悪くなる事、何故お判り頂けませんか」

ファルシスの言に、ウィルムは流石にはつとなり、次いで情けな
さそうな表情を浮かべた。

「……申し訳ございません……まだまだ耄碌はしておらぬつもりで
ございましたが、あまりな事に、周囲を見る目を失っておったよう
ですな。若に教えられるとは……成長なさいましたな……」

「お判り下さればよいのです、団長殿」

答えながらも、ファルシスは心中やや失望していた。立派な人物
ではあるのだが、この取り乱しようでは、果たして今後、冷静に己
の役回りをこなしてくれるのかどうか。

だが、この状況では、ファルシスが信頼してもよい人間は、ごく
限られている。

「過ぎた事はいくら嘆いても動かしようもありません。それよりも、
情報を集めて現状を把握し、出来る限りの手を打たなくては。団長
殿……手を貸して下さいますね？ 父の為に、ルーン家の為に」

「勿論ですとも、若。某が剣を捧げているのは、王ではなく殿でこ
ざいます。殿をお救いする為なら、この老骨、如何様にでも、若の
手足となって働きましようぞ」

「ありがとうございます、団長殿。団長殿の忠誠は、きっと父に伝わりますよ
う。では、早速、相談なのですが……」

一層声を落とし、ファルシスは、自分の考えを語り始めた。

カレリンダとユーリンダ母子が客間に入ると、俯きがちに窓の傍に立っていたアトラウスは顔を上げた。

「アトラ……」

許婚の顔を見ただけで、ユーリンダは思わず涙をこぼした。昨夜の冒険が、遠い昔に感じられる。

カレリンダは彼を見て、今朝までは、自館で謹慎を命じられていたのは甥のほうなのに、何もかも逆転してしまっている皮肉を、目の前に突きつけられたような気がした。

「ユーリンダ、伯母上……」

アトラウスは二人の姿を見て、表情を歪めた。

「何を言おうと信じてもらえないかも知れない。そう思いながらも、どうしても一言、謝罪がしたくて、合わせる顔がないのは承知で、来てしまいました」

「謝罪ですって？」

どうしたって棘のある口調になってしまっ、と思いながら、カレリンダは用心深く言った。

「何を詫びようと言うのですか？ あなたは、すべてを知っていないから、娘やわたくしたちを騙っていたのですか？」

「お母様！ アトラはそんな人じゃないわ！」

「あなたは暫く黙ってなさい」

あまり意味のない弁護に思わず苛立ち、常になくカレリンダは厳しく言った。

「すべてを知って……など、とんでもありません。まさか、父がこのような恥ずべき行いをするとは……いくらあの父でも……まったく予想していませんでした。ただ、それでも、僕の実の父親が、こうして讒言により伯父上を窮地に陥らせている事は、動かしようのない事実です。その事を、ユーリィに、伯母上に、ファルシスに、

謝罪しなければと思いました」

尖った伯母の言葉に対し、ただただ沈んだ声でアトラウスは答えた。

「僕と父の仲は、冷え切っています。父は、他に男子がいないから仕方なく、気に入らない僕を嫡男として認めているに過ぎないし、僕は父を憎んでいる。そういう間柄で、何かを共謀するなど、あり得ません。それだけは信じて欲しいのです」

「あなたはカルシスを憎んでいる？」

それは勿論、父子の過去の経緯を考えれば充分あり得る事ではあったが、これまで、アトラウスは一切そうした感情を他人に感じさせた事はなかった。むしろ、評判の低い父親を庇い、支えていこうとしているような姿勢を見せる事が多かったのだ。

幼い彼を幽閉し、愛情を注がなかった父親。そんな父親でも、この世にたったひとりの血の繋がった親であるが故に、その愛情を得たいのだろうか、とカレリンダはひそかに思っていたものだった。そんな事もあって、アトラウスの言葉をすぐさま鵜呑みにする気には、彼女はなれなかった。

「父を愛そうと、努力した時もありました。……でも、できなかつた。あの男が、母上にした事を思うと、どうしても。息子として、あの男を立ててきたのは、ユーリーの為です。僕が父親といがみ合っている姿を見せれば、優しいユーリーが悲しむだろうと……でも、もう、僕の中でも限界が来ていた」

「限界？」

「あの男が姿を消した時、僕は、恐らく妬みから伯父上の呪殺を試み、失敗したのだらうと思いました。その時、僕はこう感じました……うまく逃げおおせたつもりでいるあの男を、何とか見つけ出し、思い知らせてやれないだろうかと。僕は、伯父上に、父が行きそうな処に心当たりはないかと聞かれた時、ないと答えたけれど、本当は、父が夜半に慌ただしく出て行った時、不審に思って、館の者にあとをつけさせたので、父が王都方面へ向かった事を知っていた。

でも、まさか王都へ行くとは思わず、その近辺に身を潜めるつもりなのだろうと思っていた。それで、ひそかにその辺りを捜させていたんです。僕は……あの男を見つけて、裁きを受けさせよう……いつの間にか、当たり前のようにそう考えていたんです。助けの手を差し延べるふりをして、捕らえようと。あの男がそうして衆人の前で処刑されれば、母上の魂もどれだけ安らぐかと。でも、一方で、実の父親の惨めな死を願う自分を忌まわしく思う気持ちもあった。いま思えば、それゆえに、昨夜は、ユーリイを突き放すような事を言ってしまったのかも知れない。こんな恐ろしい自分を、清らかなユーリイに知られたくない、と」

「アトラ、そんな事を考えていたの？」

震え声でユーリンドは口を開いた。

「あなたが忌まわしいだなんて……そんな訳はないわ。私が清らか？ いいえ、あなたのそんな気持ちを、まったく気づかずにいた私は、ただ、何も見えていなかったただけなんだわ。ごめんなさい、アトラ……」

「アトラウス、ではあなたは、生きている父親よりも、亡くなった母上の事を思っているのですね？」

カレリンドは冷静に尋ねた。アトラウスが味方なのか、敵なのか。それは、今後の一家の運命に必ず大きな影響を及ぼしてくる判断である。ユーリンドのように感情に流される事なく、それを見極めなければならぬ。

「伯母上、絶対に」

アトラウスは強い目でカレリンドを見つめ返した。

「僕が親として愛しているのは、亡き母上です。そして、許嫁のユーリンドの御両親である伯父上と伯母上。ルルアにかけて、誓います。僕は、ユーリンドと彼女の家族、つまりは僕の家族を、命をかけて護ると。昨夜は言えなかったけど、今は違う、自由に動ける身になったから、必ず護ると、誓います」

その言葉を聞いたカレリンドは、ふっと力が抜け、ソファに座り

込んだ。

「お母様？」

驚いて心配そうにユーリンダが駆け寄った。

「大丈夫です、ただ、少し安心したの」

カレリンダは微笑した。そうだ、この青年は、大切な一人娘を託すに値する誠実な青年だと、長い年月をかけて見てきて、知っていた筈だ。忘れていたその事を、彼女は、今のアトラウスの言葉で、思い出す事が出来たのだ。

「ありがとう、アトラ……」

同日夜。

アルフォンス・ルーンを護送する金獅子騎士団の一行は、ルーン公領内リンクスという町で宿泊する事となっていた。

『踊る金貨亭』というこの宿は立派なもので、位の高い貴族も利用する処である。アルフォンスも、この主人がこれまで最も敬意を払ってきた上客であった。

騎士団長ウルミス・ヴァルデインは、この宿で最高の室をアルフォンスにあてがい、自分はその隣の部屋をとった。そして、この町名産のリップ酒という果実酒と食事をアルフォンスの部屋へ運ばせ、夕餉を共にする事にした。

「いいのかい、罪人をこんな扱いにして？」

アルフォンスは、粗末な馬車に一日揺られてあちこちが痛む身体を、上等のソファにゆったりと沈めながら尋ねた。

「構うものか。まだ罪が確定した訳ではない。大貴族様を質素な部屋に監禁する訳にもいかないだろう？」

ウルミスは冗談めかして答えたが、すぐに溜息をついて、まあ、王都が近くなれば、こうもいなくなるかも知れないが、と付け加えた。

副団長の balan などは、大逆人へのこの待遇に、あからさまに不満な顔を見せている。

やはり、国王が告発を是とし、激怒している事を知る者にとっては、裁判など待たずとも、アルフォンス・ルーンは憎むべき存在なのである。

「とにかく、今宵は飲もう。積もる話もあるしな」

「ああ、そうだな。飲まずには眠れそうもないしな」

アルフォンスは微笑して答えた。

「状況は、悪い。何ゆえに、陛下が簡単に告発を信じられたのか？それは、きみの弟の背後に、バロツク公がついているからだ」

「やはりな……そういう事だろうと思っていたよ」

アルフォンスは嘆息した。

国王の寵愛を一身に受けている王妃の祖父にして、先王時代からの宰相、アロール・バロツク。その意志には、この国内において、何者も逆らう事は困難である。王妃は祖父に忠実で、国王は王妃の言いなりだからだ。

バロツク家とルーン家は、領地を接している。歴史的には、ヴェルサリア建国後の両家の関係は悪くなかった。だが、現在、アルフォンスには、バロツク公に疎まれる理由があった。

アロール・バロツクの子息ティラール・バロツクと、長女ユーリンドアの縁談を断った件である。

従兄との婚約を理由にしたものの、バロツク家側にすればそれは後出しであり、アロールにとってこれは、若造のアルフォンスから侮辱を受けたに等しい出来事だったのである。

アロール・バロツクは、非常に矜持の高い人物である。己の顔に泥を塗るような行いをした者を許すことは、決してあり得ない。その事は、十分に理解した上で、アルフォンスはそれでも、愛娘の幸福の方を優先したのであった。まさか、こうした事態に繋がるとまでは、予想もしなかった事ではあったが。

一方、カルシスは、アロールの三女アサーナを妻としていた。

彼の愚行により最初の妻に起こった悲劇は、当時国中の噂話となっており、当然アロールの耳にも入っていた筈であった。そんな中で、大切な娘のひとり、そのように思慮が浅く、しかも伯爵に過ぎない男の後妻に、という話もたらされた時、アルフォンスは驚きと戸惑いを禁じ得なかった。無論、こちらから断る理由もなく、カルシスも大喜びで受けたものだったが。

その後、アサーナは、身体的にも精神的にも弱い女性である事が

わかり、何とか一女をもつけた後は、身の回りを世話をする者以外、夫を含めた誰をも寄せ付けず、娘と共に引きこもる生活を送るようになってしまった。その為、アルフォンスや周囲の者たちは、アサーナがそういった性質である為に、厳格な父親に疎まれ、厄介払いされたのであろうと、心中考えたものだった。

だが、今にして思えば。もしかして、アロール・バロツクはこう考えていたのではあるまいか。

アルフォンスの次に、ルーン公爵の継承権を持つのは嫡男ファルシスであり、その次には弟カルシスである。だが、アルフォンスもファルシスも若く健康であり、ファルシスがやがて妻を娶って男児を成せば、その子供たちがファルシスの次の継承権者である。普通に考えれば、カルシスがルーン家の長となる可能性は低い。

しかし、アルフォンスとファルシスが、揃って爵位を放棄せざるを得ない事態に陥れば。次のルーン公爵はカルシスである。彼と前妻の息子など理由をつけて廃嫡してしまえば、アロールの孫が、その次のルーン公爵となる……。

「きみとバロツク公が疎遠になった経緯については理解しているつもりだ。だが、それだけで、こうまでの大事を仕掛けてくるとは思えない」

「勿論、あちらには、以前から色々な思惑があったのだろう。カルシスが行方不明になった時に、彼の舅に対して、ただアサーナ殿を氣遣うばかりで、裏を考えなかったわたしは、あまりに迂闊すぎたというものだろう」

自嘲気味にアルフォンスは言い、リップ酒の杯をあおった。

「カルシス一人で、こんな大それた事が出来る訳がない。カルシスにノイリオン、そして神官長だ。わたしはノイリオンにも恨まれていたからな。そしてそれにバロツクが手を貸している……」

「誰が敵で誰が味方なのかを、慎重に見極めねばならん。宰相の意向に逆らっても、きみを擁護しようという者は、少数だろう。だ

が、わたし以外にも、そういう者はいくはない筈だ」

「ウルミス……わたしの為にきみの立場を悪くしては、申し訳が立たぬ」

ウルミスは酒杯を手にしたまま、にやりと笑った。

「水くさいことを言うな、アルフォンス。わたしは宰相など懼れないぞ。きみの無実を確信した以上は、宰相が何と言おうとも、真実を陛下にお伝えするのがわたしの役目」

勇ましく騎士団長は言い放ったが、陛下、という一言が出た途端、二人の表情は暗くなった。

「たとえバロツク公が口添えをしたにせよ、いったいどうして陛下は、わたしが陛下の御身を害そうとしたなどと、信じてしまわれたのか。わたしはそれ程に、陛下の信薄い家臣であったのか。それがいちばん、情けないことだ」

現国王エルディス・ヴェルサリアが王太子であった頃、アルフォンスは、かれに特に気に入られていた。

おべっかを使わず、実直で温かな視線で見守り、色々な知識を与えてくれるアルフォンスは、他の貴族たちからは感じられない親しみを王子に感じさせた。年に数度、アルフォンスが王都を訪れる度、王子は時間の許す限り、アルフォンスと共に過ごして、学問や剣の稽古に付き合わせたものだった。

また、アルフォンスも、優しく繊細で向学心の強い王太子を格別愛しく思い、時間のやりくりをしては極力、彼の要求に合わせていた。

王太子殿下とルーン公は、まるでご兄弟のようにお仲がよろしくて、とは、宮中の婦女子には、当たり前前の挨拶のように言われていたような間柄であったのだ。

そんな間柄が、少し変化の兆しを見せるきっかけとなったのは、王子の結婚である。

宰相の孫娘との盛大な結婚式を、アルフォンスも万人と共に、何

の裏心もなく寿いだ。

艶やかで賢しい王妃は、ヴェルサリアの繁栄に一層の華をもたらすであろう……誰もが、そう信じて疑わなかったのだ。

だが、婚儀から二ヶ月の後、アルフォンスが若き国王に伺候した時、エルディス3世の様子は、以前とはやや異なつたものを感じさせた。

下々の者にも思い遣りを持った性質であつたのに、些細な失敗で側仕えの者をきつく叱り、打擲した。衣服や室内の調度も、依然と打つて変わつて、華美なものを好むようになっており、それを入手した経緯を自慢げに語つた。

アルフォンスは、その変化をよく思わず、小姓を打擲した際、そこまでなさらずとも、と軽くたしなめた。すると、これまでは、アルフォンスの進言は全て素直に受け入れてきた王が、急に不機嫌になり、会見を打ち切つてしまった。その背後には、王妃リーリアの鋭く冷たい視線があつた。

アルフォンスはこれを寂しく思ったものの、まだお若く、新婚の身であられるのだから、今だけの事であるだろう、聡い質をお持ちの方なのだから、と自らに言い聞かせ、王都を後にしたのだつた。

その後、王と個人的に会話を交わす機会は殆どないままに、半年以上が過ぎていたのであつた。

アルフォンスの中では、国王は未だ、素直な瞳を持った少年のままである。

だが、婚儀以降も常に側近くにあつたウルミスは、彼の変化を詳細に捉えていた。

国王を唯一無二の主として剣を捧げた彼は、僅かにも主君に対し、非難がましい言動をとる事はない。

しかし、思う事は自由である。

「王太子であられた頃と同じ陛下であると思うな。……わたしが言える事は、それだけだ」

幾分沈んだ口調に、アルフォンスも彼の含みを察した。

「わかった」

だが、ウルミスは、まだ伝わっていない、と、もどかしい思いを持った。アルフォンスは、王に目通りして直に話せば、きっと理解が得られる、という望みを持っている。しかし、現在の国王を知る者としては、決してそうは思えない。

カルシスが王への目通りを願ったあの日。

傍で一部始終を見ていた彼は、その時の王の様子を忘れる事が出来ない。

告発を聞いた王は、まず、うるたえ、視線を泳がせた。聡かった王太子時代、彼はこんな表情を臣下に見せる事は、まず、なかった。だが、この時点では、王にはアルフォンスへの過去の信頼が残っていた。

しかし。

泳いだ視線が王妃へ向かった時、王妃はそれを真正面から受け、きっぱりと言い放ったのだ。

「これは、ゆゆしき事態ですわ。即刻、ルーン公を討つべきです」

意見を求められた訳でもないのに、女だてらに……という気持ち
を、内心持つてしまったウルミスだったが、その言葉を聞いた王の
類には途端に赤味がさした。

「そうだ！おのれアルフォンスめ、許せぬぞ！これまでの数々の
恩義を忘れおつて、大逆の徒と成り果てたか。ウルミス！すぐに奴
の首を、ここへ持つて参れ！」

こう叫んだのである。

だが、国の重鎮、七公爵の一人であるルーン公を、一方的な告発
ばかりを鵜呑みにして討つ訳にはいかない。

まずは、王都へ召還し、弁明の機会を与え、それから罪状を判断
すべき……そのように話を落ち着かせるのに、ウルミスと、居合わ
せた、常識的な人物として知られるラングレイ公は、かなり骨を折
った。

王妃の一言で、王はかなりの興奮状態となっていたのである。

王妃は、気分が不良だと、途中で退席した。

そして、王妃の祖父、カルシスの舅であるバロツク公は、同席し
ながらも、不気味な沈黙を保っていた。ウルミスとラングレイ公の
説得には、一言も口添えする事なく……つまり、逆の立場であると、
無言で示していたのであった。

「それから、もうひとつきみに知らせておく情報がある。まだ公に
はなっていないが、王妃様は、ご懐妊しておられる」

「なんと、そうなのか？ それは目出度い事だ！」

思わずアルフォンスは微笑して言った。ウルミスは呆れ顔になっ
た。

「……勿論、目出度い事だが、きみの立場で、それが言えるのか？
王妃様がお世継ぎをお産みになれば、バロツク家の権勢は、最早何
者も阻む事が出来なくなる」

「ああ、そうかも知れないな。だが、エルデイス殿下……いや、陛
下に、御子がお生まれになると思うと、わたしは、自分に孫が出来

るように嬉しいよ。まだ、孫はいないがね」

ウルミスは嘆息した。

「なんと人の良い。これが大逆の疑いをかけられた者だとは。こんなお目出度い者に、呪術で暗殺など、企めるものか」

ウルミスは、少し酒がまわってきたようだった。

「おや、まだ疑っていたのかね？」

アルフォンスは、華奢な外見に反して、酒に強い。酔って頬を赤くした親友を見やり、静かに笑った。

「そういう訳ではない。今は、一片もきみを疑う気持ちはない」
むっとしてウルミスは言い返した。

「判っている。冗談だ、気を悪くしたなら謝る」

「冗談にする事でもなかるうに」

「この二人だけの場では、いっそ冗談の種にもしたくなる。まったく、未だに、悪夢の中にいる、としか思えぬ状況だからな」

嘆息したアルフォンスに、ウルミスはいきなり頭を下げた。

「済まぬ、告白しておくが、実際にきみに会うまでは、もしかや……という気持ちは心のどこかにはあったのだ。この世には、時としてあり得ぬと思いついてきた事が起きるからな。弟どのと折り合いが悪い事は知っていたから、かれの告発のみでは、鼻で笑って済ませていたであろうが、ルルア大神殿の神官長のお墨付きは大きい。それに、陛下の即位後、以前とは打って変わって、きみは陛下に冷遇されていたようだったから……」

「言つな、ウルミス」

アルフォンスは苦笑し、酒杯をあおった。

「きみは、金獅子騎士団長として、陛下の御為に、すべてを疑ってかからねばならない立場だ。何も詫びる必要などない、職務を果たしているだけだ。……きみの気持ちは、本当に感謝している。たとえ我が命運がどのように尽きようと、この事を忘れはしない」
「礼を言われる程の事はしていない。本当に疑いを晴らす手助けが出来たら、その時に礼を言ってくれ」

「無論、その時には、出来る限りの礼をするとも。きみの望むどんな形ででも、謝意をかたちにしよう。……まったく、ルーン公爵が言葉で感謝を伝える以外、何の術もないとは、情けない限りだ」

視線を落としたアルフォンスに、ウルミスは答えた。

「感謝の形が欲しくてきみの味方になる訳ではない。あくまで、己の信ずる所に従っているだけなのだから、何も気にする事はない。それより、必要な事を話そう。誰が味方で誰が敵か、という事だ……」

ほろ酔いではあるが、ウルミスはきちんと考えを巡らせていた。

「裁判には、被疑者が王族やそれに準じる者である場合の形式で行われるだろう。つまり、きみを除く七公爵全員が王都に召還されるという事だ。最終的な判断を下すのは陛下だが、彼らがどう陛下に意見するかは大きい」

アルフォンスは頷いた。

「バロツク公はわたしを死罪にしたい。ヴェイヨン公は当然、バロツク支持だろう。ラングレイ老公は、公平な方だから、話によっては理解して下さる可能性があると思う。ローズナー家のスザナは、幼い頃、よく遊んだ仲だ。長じてもわたしは心を許せる相手だと思っているし、味方になってくれると信じたい。ブルーブラン公リッターは、どう出るかまったく読めないな。グリンサム家も同様だ」

堅い板張りの馬車に揺られながら一日考えていた事を、アルフォンスは簡単に纏めた。

「読めない、とは言っても、ブルーブランとグリンサムには、わたしに付く益は特にない。リッターは、独特の思考をするから、かれの興味を引ければ、話を聞いてくれるかも知れぬ。グリンサムは、体制が整っていないから、バロツク公に楯突く事はあえてしないだろうな」

「わたしも同意見だ」

ウルミスは答えた。

「ローズナーの女公爵どののは、快活で理知的な方だ。話を鵜呑みに

する事もないだろうし、理由もなくバロックに擦り寄る事もないだろう。老公に関しては、告発を聞いた後も、しきりにわたしに、アルフォンスがそんな真似をするなど信じられない、と繰り返しておられた。きみが直接話をすれば、きつと力になって下さると思う。ただ……このお二方が支持に回っても、陛下に影響を及ぼすバロックを覆すのは難しいかも知れない。バロック家と関係の深いヴェイヨン公は仕方がないが、あと残りの二家を、味方に付けられれば、望みのある展開になるかも知れない」

「なかなか難しいな」

アルフォンスは苦笑した。

「リッターとイサーナ前公妃か。どちらも掴めない人物だ。……だが、汚名を濯ぐ為には、難しいとばかりも言っておられぬ」

「面会の手筈など、出来る事は何でもやるから、頑張ってくれ」

ウルミスは酒杯を掲げて言った。

夜は更けてゆく。

小さく響く足音に、リディアは浅い眠りから引き戻された。狭い高窓から、淡い光が射し込んでいる。朝になったらしい。

足音は、ひとりのものではない。

リディアは、自らを激励し、訪問者が覗く前に、扉の格子から外を窺った。

ひとりは、あの牢番のような男だった。もうひとりは、どうやら昨日の訪問者とは違う人間のようだ。

ようだ、と曖昧な印象なのは、その人物が、すっぽりと黒いフードを被り、目の下まで黒布で顔を覆い、黒いマントに身を包んでいるからだ。顔は見えないが、体格は昨日の男より小柄だった。

その者は、扉の前に立ち、険しい顔で立っているリディアを、品定めするような目で見つめた。

「なかなか気が勝っているような娘だな。これなら、試練にも耐え得るだろう」

牢番の男に向かって、というより、独り言のように、黒衣の男は呟いた。

「試練……？ 試練ってなに？」

もしかしてそれは、おぞましい呪術の為に心臓を抉られる事だろうか？ 男の言葉の持つ不吉な響きに、リディアは内心怯えたが、なるべく面には出さないように努めた。

だが、彼女の心を読んだかのように、男は低く笑った。

「命が惜しいのか？ 安心せよ、おまえを殺しはせぬ」

「……じゃあ、試練って、なに？」

なるべく多くの情報を、この男から引き出そうと思ったリディアは、重ねて質問した。黙っているよりはいいだろう。

「いまは言えぬ。おまえを無闇に怯えさせるのは本意ではないから

な」

言葉とは裏腹に、男はリディアの恐怖を煽る事を愉しんでいるようだった。

リディアにもそれが判ったので、男を悦ばせぬよう、今は、恐ろしい想像はしないよう努めた。

「おまえのその気丈さがあれば、試練に耐えられる。耐えた暁には、何でも手に入るぞ」

「何でも……？」

「そうだ、美しいドレスも宝石も、望むがままだ。命を落とさず持ちこたえれば、姫君のような生活が待っている。普通に侍女として仕えていれば、一生手に入る術もないものだ。嬉しく思え」

「私はそんなものは欲しくないわ！ 取るに足りない侍女の身で、そんな身の丈に合わない望みを抱いた事なんか無い。それよりも、私を放して。私は、ユーリンド様のところへ帰らなくては！」

「忠誠心、か？ 違うだろう？ 本当に帰りたいたいのには、公女ではなく公子のもとではないのか？ それこそまさしく、分不相応な恋慕ではないのか」

「なっ……！！」

リディアは絶句した。何年間もひた隠しにし続け、同僚の誰ひとりにも気付かれる事なかった胸の内を、なぜこの男は安々と言い当てるのか。

でも、違う、と思った。ファルシスに逢いたい、その声を一言でもいいから聴きたい、という鋭い願いは常に心にあつて、それが叶わぬ事で内側から彼女を傷つけ、血を流させてはいたけれど、いまユーリンドの元へ帰り、護らなくてはならない、護りたい、という思いもまた確かにここに存在しているのだ。

「私が帰る場所は、ユーリンド様の傍。姫様が私を必要としなくなる時まで、私は姫様をお護りし続ける。それ以外には何も無い……一介の侍女が、何かを想ったとしても、それが何かに影響を及ぼす事などない。私の心のなかは完全に私だけのもの。おまえなどにと

「やかく言われる筋合いはないわ」

リディアは男を睨み付け、能う限り平静な口調を保ちながら言った。男は甲高い声で笑った。

「なかなかにしつかりした声で鳴くじゃないか。それでこそ、我が神への供物に相応しい」

「我が神……？」

「愚かにして哀れなる娘よ。我が神の与え給う試練に耐え得た時、おまえは最早いまのおまえではない。おまえだけのものであるおまえの心の中も、今のものとは全く異なったものとなっているだろう。その時にまた、話をしてみたいものだ」

そう言うと、男は踵を返した。

「待って！ どういう意味……?!」

だが、男はもう、リディアへの興味をなくしたように、振り向くとはしなかった。

牢番の男に、彼女が体力を失わないようにしつかり食物を与えるように、と指示をし、そのまま、廊下を歩み去って行った。

聖炎騎士団団長ハーヴィス・ウィルムが辞した後、次に来るのはアルマヴィラ都警備隊長のダグ・ダリウスに違いないと、ファルシスは予想したが、それは見事に裏切られた。

夕刻頃になってもダリウスは姿を見せず、代わりに、室に来た見習い騎士は、意外な名を告げた。

「レディ・ローゼッタ・ドースが、面会を希望されています」

ファルシスは驚いたが、すぐに気を取り直し、面会室へ向かった。

ローゼッタ・ドースは、アルマヴィラ地方のオークという小市を治めるゼファード・ドース子爵の令嬢である。

年齢は22歳、独身。嫁き遅れと言われても仕方のない齡だが、当人は気にしていないし、家族は諦めている。

美人だが奔放な性格で、恋多き女性として知られる。

2年前、7歳年下のファルシスに、恋の手ほどきをしたのが、このローゼッタだった。

活発だった子供時代を経て、その時期のファルシスは、優秀で礼儀正しいが打ち解けにくい少年と周囲に思われていた。

そんな公子と出会ったローゼッタは、灰色の世界を生きていた彼にかりそめの色彩を与え、呼吸し易い仮面の被り方を教え、ひとときの享楽を知り甘いだけの時間を過ごすことは決して己を汚すことではない、と囁いたのであった。

二人の男女の関係は、半年ほど終わりを迎えたが、以後も、ローゼッタは、時には姉のように、時には恋人のように、ファルシスを見守り、また、彼もそれを受け入れていた。

この数ヶ月は逢っていなかったが、呼吸が苦しくなった時、ファルシスは何度も彼女のもとを訪れていたものだったのだ。

面会室に入ると、ローゼッタは椅子から立ち上がった。

「まあファルシス、なんて顔色なの」

豊かに波打つ黒髪の豊満な美女は、公子の姿を見るなり、まず、そんな風に言った。

「ローゼッタ……わざわざ来て下さるとは、思いもしませんでしたよ。お父上にはちゃんとお断りされたのですか？」

「父のことなど関係ないわ。今頃、兄たちと家族会議でも開いているでしょうけれど」

「関係ない、という訳にはいかないでしょう。貴女はドーヌ家の長女なのだから」

ローゼッタは軽く肩をすくめた。

「そんな固いことを言わないで……折角逢いに来たのに、あなたつて、嬉しくないの？」

「それは、嬉しいですが……」

彼女の真意を測りかねたファルシスに近づき、その首に、ローゼッタは白くしなやかな腕を回した。

「あなたが心配で駆けつけたのよ。大逆罪なんて恐ろしい……でも、あなたは関係ないわよね？ ねえファルシス……」

潤んだ瞳で見つめると、ローゼッタはそのまま、ファルシスの胸に顔を埋めた。そして、小声で囁いた。

「……皆、固唾を飲んで成り行きを見守っているわ。ドーヌもオルセンもイファースも……八割がた、ルーン公支持よ。事前にカルシス卿に懐柔されている者もいるようだけど。ただ、どこも、表立って動くことは出来ないわ。わたしは、繋ぎ役としてここに来たの。安心して、まだ手はあるわ」

ファルシスは驚き、次いで思わぬ力添えに胸が熱くなった。

ローゼッタが名を挙げたのは、いずれもアルマヴィラ地方の小貴族である。

王家から爵位を受け、忠誠を誓ったものではあるが、アルマヴィ

ラに限らずどここの地方でも、王家直轄地を除いては、八公国時代から地方貴族たちはそれぞれ、王家より、地方の長である公爵家との関わりのほうが遙かに深い。

今回のことで、小貴族たちがどのように判断をするかは、ルーン家の行く末にとって重大な問題である事は、ファルシスには痛いほどに判っていた。

王家に叛旗を翻す事は恐らくあり得ないのだが、かれらがアルフオンスの無実を信じるか、カルシスにつくか、は、最悪の事態に陥ったときに、母や妹を逃がす事が出来るか、という点には大きく関わってくる。

「獅子が聞き耳を立てているからあまり話せないけど、それを伝えるに来たのよ」

「ありがとう、ローゼッタ……」

身体を押し付けるローゼッタを、ファルシスは思わず芝居ではなく、力を込めて抱き締めてしまっていた。

それから、ファルシスは、この意外な援軍に、もうひとつの大きな懸念について相談する事を考えた。

「ローゼッタ。前に話した、妹の侍女のことなのだけど……」

「あなたの想いびとのことね」

『姉』としての顔を持つローゼッタは、リディアに対する、ファルシスの胸のうちを知っていた。『姉』でありながらもかつては『恋人』であった彼女にしてみれば、複雑な感情がまったくないと言いつけるものではない。それでも、ファルシスは、彼女の人となりをよく知っていたから、おのれの信頼を裏切るようなことはないと言信じることが出来た。

ファルシスは、彼女を抱き寄せたまま、早口で言った。

「何者かに拉致されました。最初は、叔父の仕業かと思っただけど、この状況で、わざわざ妹の侍女を狙って拉致する益が掴めない。貴女の情報網で、もし何か行方に関することが知れたら……」

「わかったわ。私に出来る限りの事をしてみるわ」

そう囁いて、ローゼッタは身を離れた。

「ファルシス。たとえ父から勘当されて何の身分も財もない女になるとしても、あなたのことを想い、信じているわ。また、逢いに来るわね」

これは、扉の外の耳に入るように紡いだ言葉だった。そうと判っていたが、ファルシスは心からこう応える。

「ありがとう、ローゼッタ。貴女の気持ちは、僕の大切なものです」

ローゼッタの纏った香水の匂いがほのかに残るほどの頃、次の面会人がファルシスの室を訪れた。

「アトラウス・ルーン様がおみえです」

ファルシスの機嫌を伺うかのように、やや小さめの声で見習い騎士は告げた。

ファルシスとアトラウス。

ルーン公爵の、嫡男と、甥にして愛娘の許婚。

幼馴染であり従兄弟同士のふたりは、これまで仲違いしたことなく、二人の道は、常に同じ方角に続いているようだった。

華やかで社交家の次期領主と、穏やかで実直な従兄。

間もなく義理のきょうだいとなり、アトラウスは、義兄となる従弟の片腕となり、ルーン家の繁栄は益々のものとなるであろう……つい最近まで、誰もがそう信じて疑わなかった間柄のふたりである。

だがいま、ふたりの道は、大きく逸れようとしているかとみえた。アトラウスの父親カルシスが兄公爵を裏切り、そのために、アルフォンス・ルーンとその家族の命運は、いまや風前の灯火といっても過言ではない。

アトラウスは、父親の計画にどれほど関与していたのか？

そのことが、自分の、母の、そして妹の運命を大きく変えるのだと、ファルシスは痛いほどに感じていた。

アトラウスが味方であってくれたら……と、願いつつも、聡明なかれが、愚鈍な父親のこの、身の程にそぐわない大陰謀に、まったく気づかないなど、あり得ないのではないか、という疑いが、ファルシスの身のうちにはくすぶっていた。

胃の奥底が焼けるような思いで、ファルシスは従兄を待った。
こんなに早く彼がやって来る事も、予想外だった。
昨日は彼が謹慎の身で、今日は自分が幽閉の身である。
運命の皮肉にファルシスは唇を歪めた。

「こんにちは、ファル。たいへんなことになったね」

そんな風に、アトラウスは挨拶した。

いつもの柔らかな笑みを浮かべ、まるで「昨日の雷雨で大木が折れたね」とでも話すような口調である。

「ああ……そうだね」

ファルシスは、自分も笑顔で返そうかと思ったが、やめておいた。余裕のなさを見せたくはないが、彼ほどに自然に笑う自信がない。顔色が悪いね。大丈夫かい？」

「ああ、寝不足なだけさ」

軽く肩をすくめると、ファルシスは少し落ち着きを取り戻した。どこかで話を窺っているであろう金獅子騎士団は気になるが、白々しい会話を続けるような時間はないのだ。

「用件はなんだい？」

アトラウスは頷いた。

「ユーリンドに会ってきたよ。母君にも」

「……二人はどうしていた？」

「元気がなかったよ」

当然のことをアトラウスは言った。ファルシスは平静を装いつつも、鼓動が早まるのを自覚せずにはいられなかった。アトラウスは明らかに、彼を苛立たせ、挑発しようとしているようだ。

「だろうな。それから？」

「それから？ そうだね、僕が、絶対にきみたちを守る、と言ったら、泣いて喜んでいたよ」

アトラウスは笑みを浮かべたままである。しかし、いつからか、その笑みからは、見慣れた温かさが消えていた。

「可愛いね……ユーリンド……いついかなる時も、僕を信じて、ついてくる……まるで従順な犬みたいだ。知っていたかい？ 僕は、犬が好きなんだ……」

「アトラ……何が言いたい？」

「どうしたんだい、怖い顔をして？」

「守る、という言葉は、本気なのか？」

「ぷっとアトラウスは噴きだした。」

「本気か、だつて？ ファル……きみらしくもない、愚鈍な質問だ」「どういう意味だ」

いまやファルシスは、険しい顔つきで訪問者を見据えていた。家族同然に理解していると思っていた相手が、まるで見知らぬものように遠い。

「本気、という言葉に、何の意味がある？ 本気を出せば、伯父上を救える？ 本気を出せば、金獅子騎士団を王都に追い返せる？

違うだろう……言葉も誓いも、何の効力もない。必要なのは、力だ。そして、僕には、何の力もない。そうだろう？ ブラック・ルーン……一族の出来損ない、それがこの僕だ。ルーン家存亡の危機にも、指をくわえて見ているしかないのさ」

「アトラ……本気なのか？ 本気でそんな風に……」

「ほらまた出た、本気。僕の本気がそんなに気になるのかい？ ああそうだ、愛しのユーリンドは、本気で守るよ。僕の子供が将来ルーン公爵となる為には、濃い血が必要だ。そのへんの貴族の娘では、黒髪の子供が生まれてしまう可能性が大きいからね。それから、きみの母上は、ノイリオン殿が、本気で守ると思うよ。なんと云っても、20年もかけた横恋慕が、ようやく想いを遂げられる訳だからね」

「な……なんだつて？」

「きみは誰が守るだろう？ 本気で守るよ、義兄さん……それでも言えば、きみも泣いて喜ぶかい？」

次の間に控えていた見習い騎士は、部屋の中から突然聞こえた大きな物音に、仰天して駆けつけた。

彼と殆ど時を違わずに、どこからともなく金獅子騎士が二人、部屋の入りに姿を現した。

「やめたまえ！」

怒号と共に、ファルシスは後ろから羽交い絞めにされた。

もう一人の騎士が、アトラウスを助け起こした。

「怪我はないですか？」

アトラウスは頷き、唇の端に滲んだ血を袖で拭った。

ファルシスが彼を殴り倒し、更に馬乗りになり、襟首をつかんでいるところに、人々が入ってきたのである。響いた音はアトラウスがぶつかつた小テールブルが、ひっくり返つた時のものだった。

ファルシスは騎士の手を振り払つた。

「ファルシス卿……貴殿は謹慎し、王都からの沙汰を待つ身ですぞ。面会人を殴り倒すとは、いったい何事ですか？」

問うたのは、彼を羽交い絞めにした騎士で、この宿舎を囲み、ファルシスを見張る一隊の責任者で、ロギンズという男だった。

「なんでもありません。ただの、きょうだい喧嘩みたいなものですよ」

応えたのはアトラウスだった。ファルシスは暫く目を伏せていたが、

「お騒がせして申し訳ない。つい、神経が高ぶつてしまつて」と詫びた。

「きょうだい喧嘩！ ルーン家では、きょうだい喧嘩がおおはやりなのですな」

揶揄したのは、もう一人の、ウルブという騎士だった。だがロギンズは、こうした軽口を好まず、きつい視線を送つた為、ウルブは面白くなさそうに口をつぐんだ。

「済まなかつたよ、ファル。きみの気持ちをもっと思いやって話

すべきだった」

いつもの柔らかな口調でアトラウスは言った。

「いいから、今日はもう帰ってくれ」

そっぽを向き、かろうじてファルシスはそう返した。

「また来る。今度はもっと、良い話をもってこられるといいんだが」
そう言っつて、アトラウスは騎士たちに挨拶して退室した。

疲れた様子で椅子に座り込んだファルシスを、騎士たちは少しの間、窺うように見ていたが、やがて出て行った。

ファルシスは、指が痺れるほどに拳を握り締め、机にのせたその拳に頭をつけた。

拳のなかには、一切れの紙片が収められていた。

ファルシスとアトラウスがひと騒動を起こした同じ頃、ユーリンドのもとにも来客があった。

刻は夕暮れ。

厳戒態勢の館にいきなり、白馬に跨り臆する様子もなく近づいた若い男に、慌てて金獅子騎士が駆け寄る。

「待て！ 許可なき者はなんびとたりとも、ルーン公邸に近づくと、まかり通させぬ！」

剣の柄に手をかけそくな勢いの騎士に対し、男は眉間に皺を寄せつつこう返した。

「俺は、宰相アロール・バロックの息子、ティラール・バロック。誰の許可が必要なのか、教えてくれ」

騎士は一瞬逡巡したが、男の容貌に、式典の折にみた宰相と相似するものを見出し、退いた。

「失礼致しました。宰相閣下の御命であれば、どうぞお通り下さい」
ティラールは僅かに複雑な表情をみせたが、頷き、馬を進めた。

ティラール訪問の報に、ユーリンドは戸惑いを感じるばかりだった。

このところ、来訪がなかったため、彼がまだアルマヴィラに滞在していることすら、意識の外だった。

今の窮状に、もっと親しい者たちも誰一人、訪れてはくれぬのに、なぜ彼が？と訝しんだ。

実際は、彼以外の訪問者は皆、金獅子騎士によって追い返されていたのであるが。

「姫。此度の事は、さぞかしお胸をお痛めの事と存じます」
そんな風にティラールは言った。

「勿論、そうですわ」

ユーリンドは返した。今回の出来事に、自分がこのティラールとの縁談を嫌がった事が絡んでいるかも知れない、などとは思いつらない。生まれて初めて経験する、辛く不安な気持ちを慰める為にわざわざ来てくれたのだと思うと、いくら嫌いな相手でも、僅かに気持ちちが和らぐ。だが、だからと言って、愛想笑いをする気にはなれない。

「ご不自由はありませんか？私に出来る事なら何でも助力致しますゆえ、何なりと仰ってください」

「不自由はありませんが……」

ユーリンドはふと言いだんだ。

（何でも助力？）

その台詞で初めて彼女は、相手がこの国の権力者の息子である事を思い出した。

「お助け下さると仰るなら、どうぞ父をお助け下さいまし。あらぬ疑いをかけられているのです。父は大逆の罪を犯すような人柄ではございません。そのことは、娘であるわたくしが誰よりも知っています。どうか、お父君の宰相閣下におとりなしをお願い下さいませ」

もしもこの願いが、同じ宰相の息子でも、彼の兄たちに向けられたものでもあつたなら、たちまちに一笑に付されたものであつたらう。バロック家とルーン家の確執は、彼女の意向に端を発しているのであり、それをよく理解していないのは、当事者のなかでは彼女くらいのものであつただから。

だが、ティラールは、軽くあしらう代わりに、真摯な眼差しで頷いた。

「正直に申し上げると、末っ子で不肖の息子である私の言葉に、父がどれ程耳を貸すかは判りません。ですが、姫のお言葉はきつと、わが父に伝えましょう」

「ほんとうですか」

ユーリンドのやつれた頬に、ほのかに赤みが差した。彼女の感じ

やすいところは、この一言で、目の前の優男に対する評価を変えた。（誰もが助けてくれようともしないのに、冷たくしていた私の願いをこんなに真剣に聞いてくれている）

と言つても勿論、恋愛感情とは程遠いものである。許婚のアトラウス以外の男性が、恋愛の対象となるなど、ほんの子供のうちから、ユーリンドには考えもつかなかった事なのだ。

「ティラール様、ありがとうございます。今のお言葉でわたくし、どれほど力づけられたか、言葉にしようもない程ですわ。色々、あの、失礼な事も致しましたのに……」

ティラールの訪問に対し、しよつちゆう、理由をつけては会わずに追い返していたユーリンドである。

「なんの、どうかお気になさらないで下さい。アルマヴィラに滞在させて頂いている間に、ルーン公の実直なお人柄に折につけて触れ、誠を感じ入っています。罪を犯されるようなお方ではない。そのことをきつと父に知らせましょう。本当にお役に立てた時には、私という男の評価を、改めて頂ければ望外の喜びですが」

もちろんですわ、と言いかけた時、扉がノックされた。

「お話中失礼致します。ルーン公妃が、ティラール様と面会を希望されております」

執事の言葉に、ティラールは軽くとまどいの表情を浮かべながらも、勿論、と頷いた。

その返事を待っていたように、カレリンドが執事の後ろから現れた。

うつうつと仮眠をとっていたが、ティラールの来訪を聞き、すぐに身なりを整え、しゃんとしていた。

「これはルーン公妃殿下、ご挨拶が遅れ、失礼致しました」

「とんでもございませんわ、ティラール卿。わたくしこそ、もっと早くご挨拶致すべきでしたわ」

カレリンダの瞳はいつもとは違う光を帯びていた。

「お母様！ ティラール様は、お父様の無実について、宰相閣下におとりなしをして下さるそうですのー！」

幾分得意げに、ユーリンダは言った。

「おとりなし？」

「そうよ、お父様が無実である事を、ティラール様は、ちゃんとわかって下さったわ」

単純な答えに、カレリンダは軽く嘆息し、ティラールに向き直った。

「本日は、どのようなご用件で、娘をお訪ね下さったのでしょうか？」

「……それは無論、ユーリンダ様が、心細い思いをなさっているであろうと……」

「心細いのは当たり前ですわ。父親が、謂れない罪を着せられているのですから。それにしてもティラール卿におかれましては、この事を、驚かれるようなこともなかったではありませんか」

思いを、カレリンダは率直に口にした。

聖炎の神子とはいっても、政治的な駆け引きの手ほどきを受けた訳でもない。

正しいやり方がまったく確信が持てなくとも、夫と子供たちを守る為に、思うように闘うしかない。

バロツク家の息子……彼がユーリンダに近づいた事が、災いの発端としか思えない。

しかし、もしもこの若者の愚かさが、飾りではなく、本心からユーリンダに惚れているとするならば、最大限に利用するべきである。

「どついう意味ですか」

怪訝そうにティラールは問い返した。見る限り、二心があるようではない。しかしカレリンダはもう後にはひけない。

「お父君から、このような事が起こる、と、前もってお聞き及びだ

ったのではないですか、と申し上げているのですわ」

「……」

ティラールは暫し考え込み、それから慎重に口を開いた。

「妃は、父がルーン公を陥れた、とお考えなのですか」

「……証拠は何もありません。ですが、宰相閣下が是としなければ、今回の騒動は起こらなかつたのではないかと思っています」

「陛下に直訴したのは、妃の義理の弟どのですよ？」

「かれは宰相閣下の娘婿ですわ」

わかりきったことをなぜわざわざ言わせるのだろうか？もしかして、自分は誘導されているのだろうか？カレリンドは、急に心細くなつた。目の前の、誠実そうな表情を浮かべた優男の真意は、まったく読めない。

その時、ユーリンドが口を挟んだ。

「何を仰っているの、お母様！」

「え？」

「ティラール様は、お力添えをお約束して下さったわ。それなのに、そんなこと……失礼ではありませんの？」

ユーリンドは憤慨していた。

宰相バロツク公がどう思っているのか、彼女にはわからない。しかし、その息子ティラールは、たった今、助力を誓ってくれたばかりである。そんな彼を糾弾するような物言いは、失礼ではないのか。「ユーリンド。これは大事な話なの。要らない口を挟まないで頂戴」また娘が見当違いの事を言い出した。とカレリンドは思い、思わず幼子を叱る様に、有無を言わせぬ口調で言った。

「妃。要らない口ではありません」

ティラールは眉をひそめて言った。

「わたしはユーリンド姫を訪ねてきたのです。姫のお言葉はすべて、わたしには貴重なもの。姫がわたしを頼りにして下さった事は、わたしにとって感涙にいたる事。わたしは暫く父と会っていませんし、父が何を考えているか、正直に言って、わかりません。しかし、父

の息子である事を最大限に利用し、姫とご一家の為に役立とうと思
っているところです。どうか、姫と同じように、わたしを信じてい
ただけませんか？」

そう言われても、カレリンダはまだ、この若者を信じる気にはな
れなかった。

だが、これ以上ここで責めても、事態が何か好転する筈もない。
カレリンダは俯いた。

「申し訳ありません……ティラール卿。ご親切なお言葉には、痛み
入るばかりですわ。わたくしは、混乱しているのです。突然、あら
ぬ疑いを突きつけられて……ご理解頂けますわね？」

「勿論ですとも」

ティラールは、気の毒そうな表情でカレリンダを見た。

「ユーリンダ姫の母君に対し、悪く思う筈ありません。どうか今
は、休まれて下さい。わたしはこれより、父に書状をしたためます。
朗報を待っていて下さい」

嬉しそうなユーリンダと共に、カレリンダは礼を言うしかなかっ
た。

「国王陛下のお渡りでございます」

侍女の告げた言葉に、王妃の柳眉は逆立った。

「不例ゆえ、お控え下さるよう、伝えた筈じゃ！」

王妃リーリアは、初めての妊娠による悪阻に苦しんでいた。

食べ物匂いを嗅ぐだけで嘔吐し、果汁を口にするのがやっと。

それゆえに、王妃宮に勤める者すべてが、口臭を放たぬよう、果実以外のものを口にする事を禁じられていた。

国王の口からは、オリブ油の匂いがした。悪阻中の王妃は、その匂いを疎んじていた。

「何ゆえ、ちゃんと陛下にお伝えせぬのじゃ。まったく、無能な者ばかり！」

八つ当たり気味に王妃は嘆いた。

だが、実際に国王エルデイスが室に入ると、リーリアは柔らかな笑みを浮かべて迎え入れた。

「陛下、お疲れでございます。何か飲み物を用意させましょうか」

エルデイスは頭を振った。

「よい。早うそなたと休みたい」

これを聞いて、一瞬、リーリアの面に苛立ちがよぎった。豪華なソファに座り込んで、疲労をあらわに頭を抱え込んでいる国王は気づかない。

「陛下……陛下の御子は、生まれ出れば親思いの素晴らしい御子に育ちましようが、今は、母親を苦しめてばかりですよ」

この言葉によろやく、国王は、何よりも寵愛している大切な王妃の不例を思い出した。

「そ……そうか、そうであったな。腹の御子が、そなたをな。身体

の調子はどうなのか？何か、要るものはないか？」

「祖父が色々と届けてくれますので、間に合っておりますわ。それにわたくし、今は果汁しか口に入れられませんの」

幾分素っ気なくリーリアは応えた。エルデイスは疲れも悩みも忘れ、愛妃の機嫌を窺うようにおどおどと彼女の肩を撫でた。

「そ、そうか、随分難儀なことだな。確かに、痩せて顔色も悪いよ。うだ。男にはようわからぬが、十分に身体を労わるのだぞ。何か食べられそうなものがあれば、何でも用意させるから言ってくれ」

「食べ物のことなど、今は考えたくもありませんわ。それより、わたくし、身体が熱くて、侍女に扇がせていないと眠ることが出来ませんの。ゆえに、ここでは、陛下がゆつくりと御休みになれないかと案じて、そのように伝えさせたのですが……」

暗に同衾を拒む言葉だったが、その意味に気づいた様子もなく、国王は首を振った。

「さぞや辛かろうに、余の睡眠を案じてくれるとは、さすがそなただな。扇がせるのは構わぬ。そなたの寝台で休みたい。も、もちろん、そなたが暑くないよう、少し離れておるからな。触れたりはせぬから、よいか？」

そう言われては、否とも言えず、お心遣い嬉しく思います、と答えるしかなかった。

嫁いだ時、無論リーリアは男を知らなかったが、国王を籠絡すべく、様々な閨の手ほどきをつけていた。

彼女に諸々を伝授したのは、祖父アロールの手が付き、ひそかに子をなしている侍女長。

政治や学問ばかりに関心を向けていた若い王が、自分の虜になってゆく様は、なかなか愉快なものだった。

夫に対し、愛情もあるが、それ以上に、大胆にも、気に入りの操り人形にしたい、という気持ちは強い。

だが妊娠が判って以来、なぜか、夫に触れられることが、いやで

ならない。

『孕むとそのようなことになる女性は多うございますから、おかしいことではございません。なれど、姫様は王妃陛下。いつもいつも夫君を寄せ付けぬ、という訳には参りませぬよ』

輿入れの時、リーリアに付いてきて、そのまま王妃宮の奥事情を取り仕切っている侍女長のエラは言っていた。

勿論、国王の心が王妃から離れぬよう、アロールに含みを持たされ、才気芳しいが我侭でもある若い王妃の行動を監視する役目を担っている。

怖いもの知らずのリーリアも、祖父に直結しているこの中年女の言葉は、そうそう無視する事はできなかった。

「では、休みましようか。イーラ！ 扇を持っておいで。朝まで手を抜かずに扇ぐのよ」

王妃は次の間に控えている侍女に言った。だが、エルデイスは妃をとどめた。

「待ってくれ……まだそなたと話をしたい。アルフォンスの事だ」

「またそのお話ですよ！」

思わずリーリアはそう言ってしまった。

このところ、国王の頭の中は、ルーン公背反の件でいっぱいである。それが、リーリアの気に入らない。彼の初めての御子を宿している自分にこそ、もっともっと、関心を持つべきである。

だがさすがにリーリアは、その感情をあからさまにするほど愚かな女ではなかった。

「お気の毒な陛下。あれほど信頼されていたルーン公の大逆は、どれほどご心痛か、このリーリアは、よくわかっていますわ。今頃はルーン公は身柄を拘束され、こちらへ向かっています。どのような弁明をするかは分りませぬが、カルシス卿の告発には、真偽を疑う余地はありませんもの。七公裁判で速やかに罪状が確定すれば、公とその家族は死罪。王家への忠義篤いカルシス卿を新たなルーン公

とし、それでお終いですわ。もうそんなに、お悩みにならないで下さいまし」

「死罪……か……」

国王は呟いた。兄とも友とも慕っていたアルフォンスを、自ら裁く、という現実に、エルデイスは怯えていた。

アルフォンスに、自分と釣り合う年齢の娘がいると聞き、その姫を妃に、と望んだ事もあったのだ。彼の娘なら、さぞかし美貌であろう、という風評に惑わされたのではなく、アルフォンスと義理の親子になればたらどんなによいか、という思いがあったからである。

「田舎育ちの不調法者の娘で、とても殿下のお傍に参らせるような者ではありません」

と、断られてしまったが。

純粹かつ単純なユーリンドが、権謀渦巻く宮廷にあつて、うまく立ち回れる筈もない事は、父親のアルフォンスが、誰よりも知っていた事だったのである。

「陛下？」

リーリアは、エルデイスの伏せた面をいきなり覗き込んだ。

僅かな間だが、リーリアに言えない事を思っていたエルデイスは、国王の威厳もまるきり示せずにはびくりと肩を震わせた。

ここに居て彼の子を身籠っているのが、アルフォンスの娘であったなら、こんな事は起こらなかつたのだろうか、と考えていたのである。

「どうなさいましたの？ お顔が赤い……」

大きな綺羅らかなその黒い瞳に見つめられると、エルデイスは平穩を保つことが出来なくなる。

「リーリア……休もう」

孔雀の羽を散らした豪華な扇を手にした侍女の戸惑いも気に留めず、国王は、憂い顔の王妃の手を引き、寝台へと導いた。

夕食を部屋でとりおえ、今日はこれ以上の面会はなさそうだった。なぜ、真っ先に来ると予想していた、守護隊長ダリウスは来ないのか。考えても答えは出ない。小さくため息をつき、ファルシスは寝台に横になった。今夜は眠れるだろうか。この寝台に眠れる夜は、あと幾日なのだろうか。

読みかけのままに置いていた書物を手に取った。そして、袖の中に挟みこんでいた紙片を、頁の間に落とし込む。

アトラウスから渡されたメッセージを、監視の目を盗んで見る瞬間を、ファルシスはずっと待っていたのだった。

息を呑み込みながら、書物に目を落とすふりをして、微かに震える指で、ファルシスは紙片を開いた。見慣れたアトラウスの字が、小さくびっしりと書き込まれている。

『ファル、君を怒らせた僕を許してほしい。金獅子どもには、僕と君の仲が決裂したように思わせた方が、動きがとりやすい。愛するユーリンダと唯一無二の親友の君、そしてご両親を、全力を尽くして守る気持ちに、決して二心はない。最悪の場合、君たちを逃がす算段を立てているところだ。団長殿は気概はあるが、真っ直ぐ過ぎて危うい。君の所へ行つたローゼツタ嬢は、残念ながら信用できない。ダリウス殿とは連絡をとっている。かれを通じて、また連絡する』

ふうつと呑み込んだ息を吐き出した。

激しいやりとりの間にも、どこかで違和感を感じていたが、芝居だったという訳だ。

この手紙を疑う気持ちは、ファルシスは持たなかった。なぜなら、もしアトラウスが裏切り者であったなら、いまや無力な存在である

従弟に、こんな手の込んだ芝居までして、味方だと思わせておく必要があるとは思えないからだ。

日和見的な計算があれば、ただ近づかなければよいだけで、わざわざ挑発して殴られに来ることもない。

だが、ローゼッタが信用できないとは、どういう事なのか。アトラウスを信じると決めれば、彼女は信じてはいけないという事になってしまう。ファルシスにとっては、どちらも大切な存在だった。アトラウスには、他の誰にも話した事のない心のうちも見せている。

リディアへの想いも、ローゼッタとの関係も、愚痴を言うように明かしたのだ。

それを知りながら、彼女を信じるなというからには、相応の根拠があるのだろう。

彼女の人柄をでなく、彼女のもたらす楽観的な情報を鵜呑みにしてはいけない、という事かも知れない。こんな短い手紙では、わからないことばかりだ。

ファルシスは、紙片を小さく固く丸め、水とともに飲み下した。

寝台に横になると、急に、どこかに隠れていた疲労感がまとめて噴出してきた。

眠る事は、必要だ。かれは抵抗せず、睡魔に身をまかせ、泥のような眠りにおちていった。

同刻。

同じアルマヴィラ都内のある邸宅の一室、座して書物を開いているのは、リディアの元を訪れた黒衣の男である。

表紙が擦り切れかけている、何の装飾も施されていないその革張りの本は、ある宗教の聖典であり、ヴェルサリアでは禁じられた、

「俺が愛しているのは、昔から、カレリンダだ。ユーリンダは、欲する奴に譲ろう。カレリンダはまだ子が産める齡。ユーリンダがいなくとも、次期聖炎の神子は、俺が産ませてやる」

ここ何年も、ユーリンダに求婚していたことなどなかったかのように、ノイリオンは高らかに宣言した。

カレリンダに子を産ませる……己が言った言葉に、ノイリオンは興奮した。

「ああ、待ちきれぬ。早く、この手に……」

隠者は、黒いフードの下で冷やかな表情をつくった。

「産ませる、と言っても、カレリンダ妃は、最早子を成せぬ身体と聞いているが。ルーン公とこの上なく睦まじいのに、双子のあと、出産していない事をみれば、たしかな事であろう」

「そんなこと、何が確かなものか」

ノイリオンはむっとした顔になる。ルーン公と睦まじい、という言葉が気に入らなかったのだ。

「睦まじいなどと、表面だけのことも知れぬ。長く子がいないのは、アルフォンスの方に子種が尽きているのかも知れぬではないか。アルフォンスに出来なかったものを、俺が再び赤子を産ませてやれば、カレリンダも奴のことなど忘れて、俺を愛するようになるだろう」

「……………」

すべて己の都合の良いように組み立てた仮定の話だが、ノイリオンは本気でそう思っているらしい。

愛情と平和に満ちた生活を引き裂き、夫と子供を奪った男に無理やり子を産まされて、どうしてその男を愛することになるだろうか。愛情などとは無縁の隠者にも、それくらいのひとの心は判るのだが、そんな単純なことを、欲に囚われたノイリオンは気づかぬようだ。

（まあ良い）

心中、隠者は呟いた。

（愚か者が何を信じようと、最早ことは加速をつけて流れ出している。聖炎の神子は、いずれ始末せねばならぬものであるし、子を成

そうが成すまいが、ときが来れば、まとめて葬ってしまえば良いだけのこと)

「……男女の仲のことなど、私には解らぬが、とにかく妃は卿のものになるのだから、思うようにされるがよからう」

囁くような声で隠者は言った。ノイリオンは、嬉しそうに、頭髪のやや薄くなった頭を縦に振った。

夜が来たが、不安にさいなまれたユーリンドは、眠る気持ちになれなかった。

だが、とりあえずのつもりで寝台に横になると、精神的な疲れから、あつという間に意識は沈み込んでいった。

ユーリンドは、不思議な夢を見た。

彼女は、浅紫色の煙が揺らめく、砂と岩ばかりの荒野に佇んでいた。

そんな荒れた場所は、見たこともなく、どうしてこんなところにいるのかと怯えた。

すると、かすんだ視界の向こうに、人影が見えた。

『だれ……』

叫ぼうとしたが、口が動いただけで、声は音とまらない。この世界は無音なのだ、ユーリンドはその時気づいた。

やがて、人影の周りの曇りが僅かに晴れ、ひとりの人物が現れた。ユーリンドは息を呑む。そんな容貌の人間を、見たことがなかったからだ。

その人物は、まだ若いようだったが、真っ白な頭髮を持ち、肩の辺りで無造作に切りそろえていた。背は高くなく、すらりとした身体を革の鎧で包み、レイピアを佩いている。砂塵を払う為か、厚い布を目の下まで引き上げており、男なのか女なのか、判断をつけかねた。

ユーリンドの気配を感じたらしく、その人物は、閉じていた瞳を開けた。その瞳は、燃えさかる炎のように赤い。

雪のような深白の髪と、火のような純赤の瞳。

その異様さと、その稀有な美しさに気圧され、ユーリンドは思わ

ず後ずさった。

炎のひとみはユーリンドアを捉え、険しく睨み付けた。

『……………!!』

激しい怒気が、ユーリンドアに向けて放たれた。苛立ち、憎悪……
覚えのない感情が、しかしはつきりと、この見知らぬ人物から伝わってくる。

「あなたはだれなの」

ユーリンドアは叫んだ。叫びは声にならず、ただ彼女の口がその思いに沿って動いただけだったが。

相手は、怒気を含んだまま、腰のレイピアを抜いた。

斬りかかってくるのかと、ユーリンドアは腰が抜けそうになったが、そうではなく、地面にレイピアで文字を書き出した。

この静寂の世界で、何か伝えようとしているのだ。

だが、どうやらその行為は禁忌であつたらしい。

まばゆい稲光が空を裂き、レイピアは跳ね飛ばされた。

『出来ないと言っただろう!!』

無音だった世界に、突然、聞いたことのない女の声が響く。完全な静寂に順応していた耳は、その声に痛みすら覚えた。

『運命は変えられぬ。運命は救われぬ。おまえは、救われぬ……………』

ぞつとするような不吉な声。白髪の人物は、レイピアを弾かれた手を押さえながら、更にユーリンドアを忌々しそうに睨めつけた。それから、思い出したように、顔を覆っている布を、引きおろそうとした。

だがその時、急速に周囲の景色がぶれ始めた。

「だれ。だれなの……………」

見知らぬ風体でありながら、激しい怒りをぶつけられながら、それでもその人物に、ことばに出来ない何か、おろそかに出来ないものを感じた。

いつか、どこかで会った……………？ わからない。でも、もっと触れ

合いたかった。

しかし、夢は終わる時間のようだった。

世界はほんやりと崩れ、あとは、夢のない眠りが支配した。

同刻。

ユーリンドアの夢に現れた人物を、不思議な事に、離れた地で微睡む彼女の父親もまた、目にしていた。

不毛の大地に立つその若者に、アルフォンスは声をかけた。

「そなたは何者だ？」

だが、彼の声は、音とはならなかった。

何らかの魔道の力が働いている、と彼は気づいた。

白い髪に紅いひとみ。初めて見る風体にも興味をそそられたが、それ以上に、若者の纏う雰囲気かひどく気にかかった。

憎悪。絶望。触れれば弾かれそうな激しい気流が、その細い身体から吹き上がっているように感じた。

数多くの騎士や戦士を知っているかれも、このような気を放つ者には出会った事がない。

険しい視線をアルフォンスに向けたその人物の感情の波が、かれをみとめた刹那、爆発した。

「なんだ?!」

若者の背後に、突如、紅蓮の炎が燃え立った。

「そなた……?!」

竜巻のように渦をなし、空へ螺旋を描きながら燃え上がる炎に包まれながらも、若者は熱さを感じる風もない。また、間近にいるアルフォンスにとっても、同様だった。

魔道の炎。

それは、アルフォンスも何度となく目にした事のあるもの。

聖炎の神子である妻が、儀式の際にいつも灯す炎。

だが、このような激しいものは、見た事がない。

その時、どこからともなく、何者かの声が、無音の世界に響き渡

った。

『お止め！ お止めたら！ 莫迦な子だね。世界が壊れてしまっよ！』

その声に、我に返った若者は、慌てて炎を消そうとしたようだった。

だが、遅かったらしい。

魔道の力の均衡が崩れたのか、立っていた地面が大きく揺れ始める。

よろめいたアルフォンスに、若者は咄嗟に手を伸ばした。

その時、若者の顔の半分を覆っていた布が外れた。

「きみは……」

純赤のひとみから、涙の粒が零れる。

アルフォンスは、そのひとの名を呼ぼうとした。

だが、その瞬間に世界は崩れ去り、かれはただ深い闇の眠りへと墜ちていった。

幸せな夢に笑みを浮かべる夜。

恋人と甘く酔い痴れる夜。

苦しみ、悩み、眠れぬ夜。

悪夢に苛まれ、のた打ち回る夜。

疲れ果て、泥のように眠る夜。

どのような夜も、やがては明ける。

深夜まで密談をし、短い睡眠をとったアルフォンス・ルーンは、明け方には目覚め、隙なく身支度を整えた。

何か、夢を見たような気がする。それも、とても大事な何かを思わせるような……。

暫し、記憶をまさぐってみたが、『重要』というイメージ以上の

ものは思い出せず、もどかしい。

すぐに、考えるのをやめた。

夢などに拘っている暇はないのだ。考えるべき事は山積している。

宿の玄関のあたりが、騒がしいようだった。

どうしたのかと思う間もなく、扉が叩かれ、ウルミスが朝の挨拶と共に姿を現した。

「おはよう。何かあったのかね？」

「きみに面会人だ」

ウルミスは答えた。

「アルフォンス！ 久しぶりね」

笑みを浮かべ、男装の女性は言った。

「ああ、久しいね、スザナ」

道中での突然の訪問に、驚いたとしても動揺を微塵も見せず、何の憂いごともないかのように、にこやかにルーン公は彼女を迎えた。

七公爵のひとり、ローズナー女公爵、スザナ。

齡三十八にして、華やかさがいまも盛りのように見える男勝りの麗人は、アルフォンスとは幼馴染の間柄であった。

彼女の父親の前ローズナー公とアルフォンスの父、先のルーン公は、親しい仲であり、先代の頃には、王都に逗留する際は勿論の事、それ以外にも折につけ、家ぐるみの交流の機会があったのだ。

まだ幼少の頃、歳上ではあるが、スザナをアルフォンスの許婚にという話まで持ち上がったものだったが、スザナの二人の兄が相次いで夭折し、彼女がローズナー家の跡取りとなった為に、立ち消えになった、という経緯さえあった。

子供の頃の二人は、伸びやかで明るい気質が良く合い、仲睦まじい姉弟のように過ごしたものだだった。

だが、長じて、互いに家庭を持ってからは、流石に男女の別があ

る為、親友のような付き合いはなくなっていた。

とはいえ、七公爵家のうちで、アルフォンスにとって、最も親しい間柄の家であり、スザナの娘フィリアとユーリンドは、まめに書簡のやり取りをする仲である。

現在、窮地に陥っているアルフォンス・ルーンにとり、ローズナ―女公爵が、昔からの絆に免じて、かれの言い分をきちんと吟味し、もしその潔白を認めたら、力になってくれるのか……ということ、かれの命運を左右する、極めて大きな要素のひとつと言えた。

王都に護送されてしまえば、王家の監視なく話す事は難しい。

いち早くここに会いに来てくれた事は、アルフォンスにとって、望外の出来事だった。

「少しだけでいいわ。二人で話させて頂きたいわ」

波打つ豊かな赤い髪を後ろに払いながら、砕けた口調で、スザナはウルミスに言った。

だが、ウルミスより先に、副団長のノーシュ・バランが、険しい表情を作り応えた。

「お待ちください、レディ。護送中の大逆の罪びとと、何をお話なさりたいのか。国王陛下の御名において、公正な話であれば、お二人きりでなく、この場でお話頂きたい」

スザナは負けてはいない。

「わたくしは、ウルミス卿と話しているのです。他の者は、お下がりにさい」

「な……!!」

ノーシュにとっては、このヴェルサリアの尊き国王を護る金獅子騎士団の副団長として、国王の名を出したのに聞き入れられぬなど、いかに七公爵といえど、あつてはならぬ事である。

侮辱と感じた彼の丸く白い頬が、血の気を帯びた。

「陛下は、そこなルーン公に罪ありと、既に仰せなのですぞ。ローズナ―公におかれては、その罪びとに加担されるおつもりか」

「言葉が過ぎる、ノーシユ卿。裁判を行うと陛下がお決めなのだから、まだ罪が確定した訳ではない。ルーン公とローズナー公の面談を、何ゆえに、未だウルミス卿が口も開かぬうちに、そなたから禁じられねばならぬのか」

凜としてスザナは言い放った。

ノーシユが言葉を返す前に、慌ててウルミスが割って入る。

「レデイ、手短にお願ひ致しますぞ。出立の刻が迫っておりますからな。そちらの室をお使い下さい」

「団長！」

ノーシユが不満の声を上げる。その背後の数人の団員も、副団長と同じ目をしている。

ウルミスは、心中溜息を漏らした。固い信頼で結ばれている筈の配下。なのに、アルフォンスを擁護する、という決断を、だれも支持せず、喜ばない。

アルフォンスは、高潔且つ分け隔てのない気さくな人柄や、主だった貴族のうちで最も凛々しく整った容姿などから、既婚の身ながら宮中の婦女子に人気が高い。

だが、時の権力者バロツク公にも媚びず、王にも諫言を厭わない姿勢を、鼻持ちならぬと感じる騎士、貴族が多いのもまた事実であった。

国王直属の金獅子騎士団においては特に、王の暗殺を謀ったというおぞましい嫌疑をかけられた、というだけで、憎しみを持つ充分な理由になるのである。

王への忠誠篤い証といえなくもない反感を、咎めだてもできず、ウルミスはただ眉間に皺を寄せる事しか出来なかった。

「スザナ、わたしの話を聞いてくれるかね？」

ルーン公の問いかけに、女公爵はあっさりと首を横に振った。

「長々と話を聞いているいとまはないわ。わたくしはただ、これだけ聞きたいの。あなたは、やったの、やってないの？」

単刀直入な物言いに、アルフォンスは一瞬驚きながらも、すぐに吉兆を感じた。

スザナの言葉は、要すれば、アルフォンスの言い分を無条件に聞く姿勢があると意味している。

「やっていない。わたしは永遠に陛下の忠実なる臣だ。信じてくれ、スザナ」

「証拠は？」

「ない」

スザナはまじまじと幼馴染の顔を見つめた。

「それで他人を納得させられると思っっているの？ あなたの弟は、何やらルルア大神官も認めた立派な証拠を用意していると言っじゃないの」

「らしいね」

アルフォンスは頷き、軽く溜息をつく。

「しかし、ねえスザナ。もしもわたしが罪びとなら、こうした事態に備えて、何かしら身を守る準備をしているものではないかね？

あまりにも青天の霹靂……想像の域を遙かに超えた告発に対して、どうして前もって無実の証拠など、揃えられようか？」

「呆れた言い草ね。でもまあ、一理なくはないわ」

スザナは苦笑した。

「相変わらず弱みを見せないのね。少しは青くなってるかと思ったのに。無実の罪を着せられた人間は、もっとうろたえるものじゃないくて？」

「うろたえているさ。やせ我慢をしているだけだよ」

あっさりとアルフォンスは言う。スザナはかれの目をじっと見つめたが、その黄金色の瞳からは、何の動揺も怖れも読み取れなかった。

「……どうして、アロール・バロツクに喧嘩を売ったりしたのよ？」

「ひどい誤解だ。わたしは誰にも喧嘩を売った覚えなどない」

「バロツク公は、体面を傷つけた者を、決して許しはしないわ」

「しかし、それだけの理由で、こんなでつちあげを……」

「するわよ。元々、彼は、意のままになるヴェイヨン以外の公爵を邪魔に思っているんだから」

「スザナ……」

今度はアルフォンスが、スザナの濃い緑色の瞳を凝視した。

幼馴染とは言っても、成人して以来、当たり障りのない社交辞令や、他愛のない世間話ばかりで、笑い合う事はあっても、他人に聞かれてはならぬような話をした事もなかったのだ。

彼女がこんなにあからさまなバロツク批判を口にするとは予想していなかった。

「なんで縁談を断ったの。バロツクと縁戚になっていれば、こんな事は起きなかったかも知れないのに」

「ユーリンドには想う相手がいたんだ。娘を犠牲にしてまで、バロツクの機嫌をとるつもりなどなかった。たとえ、こうなる事がわかっていたとしてもだ」

「馬鹿ね。少女時代の恋愛なんて、過ぎれば幻のような思い出に変わるだけのものではないのに。貴族の娘にとっての幸せは、一族に望まれた結婚をする事だわ」

思いがけず語気が強くなったスザナは、すぐに我に返ったように首を振った。

「ごめんなさい。こんな話をしてる場合じゃなかったわね」

「スザナ……」

彼女の亡き夫は、彼女の父親が定めた、一族内のかなり年上の男だった。その結婚が、若いスザナにとって最初は意に沿わぬものだったとしても、子宝にも恵まれ、1年前に夫が事故死するまで、落ち着いた幸福な暮らしを送ってきたようだ。

ユーリンドとティラールも、そんな夫婦になれたのかも知れない。しかし、過ぎた事を今更どうする術もない。

「あなた、どうするつもりなの。このまま泣き寝入りして運命を受け入れるの？」

待ち受ける運命とは、汚辱にまみれた死であろう。アルフォンスは首を横に振った。

「泣き寝入りする気はない。死を怖れる心はないが、我が名が後の世まで、覚えなき罪状のもとに、卑劣で残虐な大逆の徒として語られるのは怖ろしい。陛下の命じる死であれば、甘んじて受け入れるしかないが、とにかく、心を尽くして真実を語り、陛下にわかつて頂こうと考えている」

「陛下はかつての素直な少年ではないわ。バロツクの娘の言いなり……聞いた？ 彼女の懷妊を」

スザナは敢えて王妃様ではなく、バロツクの娘と表した。アルフォンスは無論気づいたが、それには触れずに言った。

「ああ、聞いた。目出度い事だ」

「はあ？」

呑気な応えにスザナは目を剥く。目出度いのはあんたの頭だ、と言いたいのを堪え、スザナは首を振って、なんてお人よしなの、と咳くに止めた。

「今の陛下に、心を尽くした話とやらが、そのままに届くとは思えないわ。ウルミス卿も判っていると思うけど……ウルミス卿も味方なんでしょう？ さっきの感じから推測すると」

「も、という事は、きみもわたしを信じてくれるのか？」

「あなたがこんな似合わない事が出来る男だと少しでも思ったなら、わざわざこんなところまで来ないわ」

スザナは軽くまばたきをして笑った。遠い昔、少女の頃によくしていた仕草に、アルフォンスは懐かしさを覚える。

「ありがとう、スザナ……」

「私一人では、バロツクに太刀打ちできないわ。けれど、ヴェイヨン以外の公爵を味方にできれば、何とかなるかも知れない。私、一応策があるのよ。希望を捨てないで、アルフォンス」

「何と言って感謝していいか分からないよ。これもルルアのお導きか」

「いえ、あなたの人徳でしょ」
真面目な顔つきでそう言ってから、スザナは再度笑った。

王都エルスタックは、二重の高い外壁によって護られている。

外壁と呼ばれる石造りの塀は、もうひとつの内壁に比べ、かなり広範囲にわたって建てられていた。

この外壁と内壁の間に、所謂下町……一般市民の中でも中流以下の人々が住まう、広くもなく簡素な建築物が並ぶ区画がある。

簡素といっても、この町に、貧民と呼ばれるような層はない。

雑多ではあれど不潔さや暗さはなく、治安も比較的よい。

下町は、内壁の中に比べると新しく、今の形に区画整理されてから120年程度だが、王家の治世の安定に支えられた暮らしに不満の声は低く、祭事の折にバルコニーに立つ、豆粒のような姿と、馬車のカーテンの陰に見え隠れする影としてしか認識できない王の人氣は、それなりに高かった。

前王は、比較的気が大きく、機嫌のよい時には隔てのない性格であったので、国民の前に姿を見せる事を厭わず、馬車でなく乗馬で町に現れるのも珍しくなかったが、現王の代になってから、王が庶民の程近くに顔を見せる機会はずっと少なくなっていた。

下町の住人たちは、美点を誇張されて描かれた、若き王の絵姿を眺めては、あれやこれや、不敬にあたらぬ程度に、好き勝手な事を言い合うのであった。

下町と対比的に上町と呼ばれている地域は、内壁と宮殿の間に広がっている。

外壁より年代の古い内壁だが、その構造は外壁よりも遥かに堅固で、魔道の防力も籠められているとも噂されているが、これは大部分の市民にとっては、真偽を確認する術もないことであった。

この上町に、貴族や富商の大邸宅、騎士の宿舍や演習場、役場や宮中官吏の住居、学問所、そして大小の神殿が立ち並ぶ。

主神ルルアの神殿が最も大きく、中心部に構えているのは当然の事だが、総本山はこの王都ではなく、アルマヴィラの大神殿である。それもあつてここでは、軍神イネルキや豊穡神ミシア、商業神イトなど、人々の生活に密着した数柱の神々の神殿も、ルルア神殿に負けない規模で、競うように多くの参拝者を集めていた。

現在、自他ともに疑う余地なく、貴族の中で最高の権力を持つ者……即ち、宰相アロール・バロツクは、上町一の豪華な私邸で、ゆったりと肘掛け椅子に身を沈め、報告を受けている。

「リーリアは、まだ悪阻が治まらぬのか。あれの機嫌が悪いと、陛下もご機嫌悪くないか」

「陛下は、王妃陛下を大層労わつておいでです。腫れ物に触るかのように、お優しいうございます」

バロツク公の前に立つのは、王妃の侍女長エラ。

元は身分の低い端女だったが、際立つた美貌に加え、「乱世に生まれた男であれば、一国を獲れたであろう」とアロールに言わせた才気を持ち、彼の手が付き、子ももうけた間柄である。

今ではエラも中年となり、艶めいたことはなくなっていたが、アロールはこの女に深い信用を預けている。身分が高ければ、一の愛妾として国元に置き、諸事を委ねたかったが、出自の低さ故にそうもゆかず、今は、彼の一番の持ち札である孫娘の目付役とし、美貌と才を鼻にかけがちな王妃の手綱をとらせている。王妃は、祖父の力により、今の地位を得た事をよくわきまえ、忠実な顔をしてはいるが、才気芳しいだけに、いつ自身を過信して暴走するかわからぬ危うさを内包している。アロールは、王妃となつた孫娘を、自身で始終監視する訳にもゆかず、自分の手足と同じく信頼できるエラを、王妃付けとした。エラの役目は、アロールの野望を満たす為の重要な鍵と言えた。

「すべては順調でございますわ。悪阻でお苦しみながらも、妃殿下は、きちんと国王陛下の御心を掴んでおられます。慰みに踊りを所望されたなら、御自ら踊って頂けそうなくらいですわ」

「……助長すな。この国の一の御方ぞ。そなたごときが、そのように揶揄してよいと思つてか」

はつとエラは顔色を変え、主の機嫌を損ねたことを詫びた。

「申し訳ございませんぬ」

「ふん……まあよい。順調だということだな」

アロールはそれ以上、エラの不敬を咎めなかった。こうした事は初めてではない。王家より、ひたすらバロック家に心酔しており、それが普段は微塵も表さないのにアロールの前ではぼろっと出る。或いは、苦い顔をされるのを承知の上での表現かも知れなかった。こんな計算高さも、エラとリーリアは似ている。いつそ、ふたりが実の母子であつたならよかつたものを、とさえ、何度もアロールは思つたものだった。

「とにかく、あと数日で、アルフォンス・ルーンは王都へ到着する。昔のよしみを、微塵でも陛下に思い起こされては、不都合だ。とにかくそうさせないのが、リーリアの役目だ。アルフォンスを始末し、傀儡のカルシスを後釜に据えてしまえば、とりあえず我が版図は広がる」

版図を広げる為だけに、この大掛かりな罫をしかけた訳ではない。欲しいのは、アルマヴィラそのものではないのだ。

だが、その胸のうちは、エラにもリーリアにも明かしたことはない。

協力者の娘婿カルシスや、大神官のヴィーン家の者にも。

この件に関して、信用して重んじているのは、あの、黒衣の男だけ。

「天下をお取りなさいませ、バロック公」

言葉は、不思議な魔力を持っていた。これがなければ、寿命尽きるまで自覚もしなかつたかも知れない、野心が芽生えた。

『天下を……この国を牛ずる……或いはまた、一族が、この国を越えて……』

他の者が言えば、戯言と笑つか、怒り斬り捨てたかも知れない。しかし、あの男の言葉には、たしかに信を置かせるだけの、力があつた。

「早う無事に王子が産まれれば良いが」

胸の深いうちってしまった思いには触れずに、アロールは当たり前前の事を口にした。

「此度がたとえ王女様であられても、陛下のご寵愛はいささかも揺るぎないと存じますし、王子殿下のいずれのご誕生は確実にございますよ」

「まあ、そうかも知れぬが、王子の誕生は早いに越したことはない。王子さえ成せば、リーリアの地位は万全、そして儂の計画も一層盤石となる」

「そつでございますね」

エラは頷いた。

「早う、お館様の統べるヴェルサリアが見とつてございます」

「滅多な事を申すな」

探る者など近くには居ないのを承知の上で、アロールは叱りつけた。

「儂は、ヴェルサリアの覇権など欲しておらぬ」

「これは……申し訳ありません。端女の戯言と、どうかお聞き流し下さいまし」

また叱られるエラだが、しかし慣れてもいる。アロールは、心くすぐられる甘言を好みつつも、それを面に出したかららない。本気で怒っている訳ではないのだ。

「とにかくいまは」

アロールはまた先と同じ事を、念を押すように言った。

「陛下のご機嫌を損ねず、アルフォンスの咎を陛下の胸に焼き付け

るのだ。それが、御子を無事に産むことの次に、リーリアのすべき大事だ。そなた、しかと言い含めよ」

「弁えましてございます」

エラは丁重に礼をして、応えた。

「まあ、リーリアもその辺りはよく判っておると思うが。それに比べ、我が息子の何と役に立たぬことよ」

「……と、申されますと？」

半ばその先を予測しながらも、そ知らぬ顔で、エラは問い返した。「ティラールよ。あの阿呆め、鳥文にて、こんなものを送ってきた」

バロツク公は、文を投げて寄こした。エラは素早く目を通し、目立たぬよう、だが気づかれるよう、嘆息した。

「これは……」

「あの阿呆め、おのれが務めを忘れ果て、心底アルフォンスの娘の言いなりになって見ゆる。そこまでの惚れようなら、思いのままにしまえばよいものを、踊らされよって……まったくの出来損ないだ」

「まだ判りませぬよ」

とりなしてエラは言った。

「文では御本意はわかりませぬ。ルーン公一家にご助力を、など、お館様のご息ともあろう方が、本気で仰るとは、とても思えませぬ。何か裏があるかも知れませぬよ」

エラの瞳は意地の悪い光を放っていた。彼女はティラールの気性をよく知っていた。軽薄さに隠されてしまいがちな実直さ……それを彼女は、愚直、としかとらなかつた。逸材アロール・バロツクの正式な息子でありながら、その立場も資質も無駄にしていると思えないティラールを、彼女は、アロールの正室の子供の誰よりも心中嫌っていた。

「そうだろうか？」

だが、アロールは、側女で腹心のこの発言を、疑ってかかる事は

しなかった。賢すぎる女ゆえに、妬みなどとは結びつけて想像し辛い。彼女の進言は、いつも吟味の価値があると無意識のうちに思っている。

「あれも、旅するうちに、ちいとは賢くなったであろうか？ 傍にはザハドもつけておるしの。あやつは本当に、目端のきく奴だ。あやつを得た事は、テイラーめがこれまでしてきた事のうちに、最も役に立つ事だったのではないかと思うくらいだ」

「まあ、随分お買いかぶりでございますね、もとは奴隷ごときに「身分の如何をそなたが言うか。どのような出自でも、能力があればわしは重用する」

アロールはぴしりと言った。エラは背筋を正した。確かに、今は失言だった。

「申し訳ございませんぬ」と、すぐにエラは詫びた。

「このようなお文をテイラー様に書かせ、お館様のお心を騒がせて……とつい短絡的に思ってしまったのでございます。勿論、このお文の真意すら測りかねる状況で、言うべき事ではございませんでした。お許し下さいませ」

「もうよい」

ぶすりとしたままアロールは言った。

「とにかく、ザハドに報告させねばならぬ。テイラーが自分の役割を忘れておらぬかどうか……もしも骨抜きにされているのであれば、この大事なときにそのような体たらくの者、もはや我が息子とは呼べぬ」

そして、アロールは呟いた。

「そなたの息子の方こそ、儂の息子と呼ぶに相応しい器量だった」
「……死んだ者のことを語っても、何にもなりませんぬ」

エラは表情を硬くした。いくら褒められようと、もういない息子は彼女を喜ばせることはできない。彼女はたった一人の息子のことでさえ、そんな風にしか考える事が出来なかった。

同じ頃。

上町の別の邸、バロック公邸に比して敷地は劣らぬものの、まったく飾り気のない、実用一辺倒の、煤けた茶色の煉瓦造りのラングレイ公邸にて。

「……そなた、此度のことをどう考えている？」

邸内の一室、客間には、邸の外見と同じく、殆ど装飾もない。領民から贈られた素朴な麻織りのタペストリーが、古びた漆喰の天井から下がるのみ。

問うたのは、ポール・ラングレイ、62歳。灰白色の髪を刈りつめ、灰色の鋭い目をしたこの公爵は、アロール・バロックより3歳年長で、親しみを込めてラングレイ老公、と呼ばれている。質実剛健、曲がった事は許さぬ清廉潔白人柄、近寄りがたい風格を持つも、眼を細めて平民の幼子をあやすような一面も備えており、領民の人気は絶大で、王からも一目置かれている。時の権力者アロール・バロックも、ラングレイ公には、表面上、年長者に対する礼儀として、譲る場面も多かった。だが、あくまで、表面上、である。融通の利かぬラングレイ公を煙たがっているのは、すこし眼の利く者にとればあからさまとも言え、無論当のラングレイ公も承知していた。だが、かれは権力にはなんの興味もない。バロック公から疎まれようと、何の痛痒もなく、ただおのれの正義を貫くことに揺るぎはなかった。

しかし、今回の事件においては、ラングレイ老公には、かつてない迷いがあった。しかとした証拠があり、王もまたルーン公の有罪を信じているのにも関わらず、自身の勘、他者に対する信用……そのようなものが、それらを打ち消すからである。アルフォンス・ルーンについては、幼少の頃より知っており、その高潔、王家への忠誠は疑いようもないと知り抜いている、

万が一、王がバロツク家から王妃を得てからの冷遇に、彼が僅かに不満を抱いたとしても、彼ならばそれを公の場で表明する筈であり、まかり間違っても、罪もなき乙女を生け贄に王の呪殺など、思いもつかぬ筈であること、判りきっている事なのである。

しかし、その思いを打ち消すかのように、問われた男は応えた。

「さあねえ……人間というものは、とち狂って、よく知る他人にも思いもつかぬような事をしでかすものです。だからこそ、面白いんですかね」

「面白いなどと。まさか、儂以外の前で口にすなよ」

大逆罪の話題にして不敬ともとられかねない返答を、ラングレイ公は鷹揚に聞き流した。相手の気性をよく知っているからである。

リッター・ブルーブラン。王家の次に風流を愛すと公言している公爵。長い黒髪を背中中で緩やかに束ね、古風なデザインの詳細やかな刺繍の施された優美なチュニツクを纏い、緑色の瞳を愉しげに煌めかせながら、窓際に佇んでいる。まだおおやけにはしていないが、ラングレイ公の末娘を娶る話がまとまったばかりである。ラングレイ公は、以前より、この風変わりな青年貴族を気に入っていた。義理の親子となる事で、忌憚ない話ができると、ラングレイ公は期待していた。

「アルフォンスの気性はそなたも知つていよう。告発者である弟のカルシスは、長年かれと不和であるし、とても鶉呑みには出来ぬ」
ラングレイ公は、同調する意見が欲しい。リッターはそれを解つた上で、あえて同調しない。

「知られている被告の気性……それが裁判の結果を左右するようなら、秩序というものは何をもって成り立つでしょうか？ 大事なものは、証拠、そして、陛下のご意志」

「そんな建前を聞く為に話をしているのではない。判つておろうが」
やや、むつとしてラングレイ公は応えた。

「話を弄ぶのはそなたの悪い癖ぞ。時間は限られているのだ。アルフォンスがこちらへ着く前に、ある程度我々も腹を決めておかねば

ならぬ。無論、罪有りと見なせば、儂が自ら斬つて捨てようと思うくらいだが、そうでなければ……」

「おや、これは異な事を仰せでございますね、義父上」
「なに……」

リッターからこう呼ばれたのも初めての事であるが、それ以上にその言い草にラングレイ公は意外そうに目を剥いた。リッターは澄ました顔で続ける。

「アルフォンスが着いて直に話すまでは、黒か白か、いくらここで論議しても詮無きこと。そして、白と思えば勿論、そのように陛下に申し上げる。悩む程の事ではございませんでしょうか？」

「そなた……」

あまりの淡泊な返答に、ラングレイ公はかえって戸惑った。かれ自身は既にその気持ちを固めてはいたが、結果、バロツクと敵対するも同じである行動に、間もなく娘婿となるこの青年は、もつと慎重になると踏んでいたのである。

「そなたは、それでよいのか。勿論儂はそのつもりであるが、正直、そなたは、もつと利に聡い立ち回りをするのではと思っておった。儂などと違って、将来のある身なのだからな」

現実にルーン公支持派としてバロツク公と敵対し、そしてもし敗れる事になれば、ラングレイ公はさっさと隠遁して跡目を長男に譲り、自分の筋を通すことがラングレイ家そのものの危機を招かぬようにと考えている。だが、まだ若いリッターはそうもいかないだろう。跡目を継ぐ嗣子も無論まだおらず、彼の身に何かあれば、それはブルーブラン家の存亡にかかわる。

それに、リッターは、ラングレイ公のように、義理人情に厚い気質ではない。彼は前ブルーブラン公の次男であるが、間柄は悪くなかった筈の兄の事を、「風流を解さぬ人間は家運を傾ける」と言つて、善人だが凡庸である兄を廃し家督を自分に譲るよう父親に迫つた、という逸話を持つくらいである。話の真偽は、直接本人に問いただした訳ではないので判らぬし、他家の事情に首を突っ込むつも

りもない。だが、リッターが、善であつても愚である者を好まぬ事はたしかと知つている。此の度、アルフォンス・ルーンが、時の権力者バロツク公の怒りをつけた件、また、率直な諫言により国王の寵を失つた経緯を、リッターは或いは愚かしい行為、と見なすのでは、とラングレイ公は案じていた。リッターの判断基準は独特で、誰にも読めない。それでも、総合的にみて、ラングレイ公は、自分には決して持てない奔放さを好意的に思い、愛娘を嫁がせる事にしたのであるが。

（たしかに、アルフォンスは愚かで誤つた選択をした、と僕にも思える）

諫言は立派な事であつたが、ユーリンドアの婚約の経緯については、古い人間であるラングレイ公には、理解しかねた。バロツク公が、息子を入り婿にやつてもよい、とまで言つてきた話を撥ね、娘が想いを寄せている、という理由だけで身内の者に縁づける、など、娘可愛さに盲目になつていた、としか思えない。

女の幸せなど、所詮、嫁いだから決まる。バロツク公の息子で、しかも心根優しい美男子でユーリンドアにぞつこんであつたと評判の男に縁づける方が、実の兄を憎んで提訴するような男の息子にやるよりも、余程娘自身の為になつたに決まっている。アルフォンスは、もつと賢い男であると思つていたのに……。

だが、リッターは、未来の舅とは違う価値観を持つていた。

「アルフォンスのこれまでの、己を貫く行動は、私は評価します」
ラングレイ公の思いを見透かしたかのように、彼は言葉を継いだ。己を貫く行動……その言葉に、ラングレイ公ははつとさせられた。たとえ愚かしく見えようとも、信念を貫くことが何より肝要であると思つていたのは自分の方であつた筈なのに、それを逆に指摘され、ラングレイ公は虚をつかれた心持ちになつた。

「強者の言いなりにはならない……これこそ、風流を愛する者の行い。そのような男が、美しい乙女を犠牲に呪殺、などという醜い行為に走るとは、私には思えませぬよ」

「しかし、先にそなたは、証拠が重要だと言っておらんだか？」

「確たる証拠ならば。ですが、カルシス卿の持つ証拠は、罪を決するには弱い。アルフォンスと話してみても、言動に不審がなければ、私はいかれます」

「おお……そうか」

ラングレイ公の貌が綻んだ。意識していなかったが、リッターのこの言葉を待っていたのだ、と自覚した。

「天は義に味方する。陛下もきつとわかって下されよう！」

夜明けの光が薄灰色の筋となって厚いカーテンの隙間から洩れ入った。今日は天候が悪いらしい。僅かに意識を刺激されると、もうそれ以上寝台に横になっっている気もせず、アトラウスは身を起こした。色々考えていて、殆ど眠った記憶もないが、頭は冴え冴えとしていた。

カーテンを押し開けると、外は薄暗く、ひたひたと小雨が降っている。

(ユーリイ、きみはまだ眠っているだろうか。昨日、ファルに殴られたと聞いたら、卒倒するかも知れないね)

唇の端が青黒く腫れぼったい。今日は会わない方がいいかも知れない。彼女は待ち侘びているだろうが、この顔では心痛の種を増やすだけだろう。だが、会っておかないと、残された時間は限られている……という思いもあった。

(ファル……あの手紙を読んで、僕を信じてくれただろうか。君たちが僅かでも僕に疑念を持たず、僕の計画はうまくいかないかも知れない。だが、それでは困る。金獅子どもに君たちを渡しはしない……絶対に彼らから護ってみせる)

アトラウスは、ルーン公の冤罪が晴らされる可能性は低いとみていた。父親が姿を消してから、家に籠もってただ手をこまねいていた訳ではない。従僕らに情報を集めさせ、王都から様々な情報を得ていた。

平時より彼は、武力よりも情報が大事だと考えていた。いくら腕を磨き、武勇の者を集めたとしても、それ以上の軍に攻められればそれで終わりである。だが、情報を制していれば、少ない手勢でもいかようにしても勝機を掴める。穏和で争いごとを好まない、周囲からはそう評価されているが、それは当たっているとは言えない、と本人は思っている。大切なものを護る為なら、いつでも争いの中

に身を投じる覚悟はあるし、そしてそうするからには必ず勝者とならねばならない、と決めている。平和の真綿にくるまれていたような頃から何年もかけて、彼は父親にも誰にも隠して自身の為の情報網を作り上げる事に尽力してきた。貴族の子弟など誰も出入りしないような街裏の区画にも足を踏み入れ、今では、まともな者からは忌まれるような怪しげな魔術師などにもつてを持っていて。そういう行動をとる時、彼は、自身の黒髪と黒い瞳に皮肉な感謝の念を持つ。『聖女の血筋』でありながら、あかしの黄金色を持っていない。この事が引き起こした幼少時の悲劇は、彼の魂の奥底に生涯癒えない傷をつけたというのに、そのおかげで隠密行動がとりやすい。町民のなりで街を歩くと、誰もルーン家の若君だとは思わない。ファルシスなどでは、目立ちすぎて到底同じ事は成し得なかっただろう。ともかくそういう訳で、彼はアルフォンスが知らなかった情報を色々と手に入れていた。だが、伯父に忠告をする間もなく、事態は急速に進んでいた。ユーリンドが深夜に会いに来た時、彼女に告げた気持ちは本当だ。彼女に逃亡の生活など耐えられる筈がないし、自分と駆け落ちしてそんな暮らしをさせる訳にはいかないと思った事。しかし同時に、彼女がこれまで通りの生活を続ける事が多分不可能で、悲劇が目前に迫っている事も知っていた。ルーン公が有罪とされ死を賜ったなら、彼女はどのようなだろう？ 聖炎の神子はアルマヴィラの宝であるが、ヴェルサリアの守護神ルルアの最高位の巫女でもある。大罪人の妻であるカレリンドの処遇は微妙なところだが、次期聖炎の神子であるユーリンドは、恐らく処刑される事はないだろう。だが、金獅子騎士団によって、終生幽閉の身となり、後継者が出来れば彼女は闇に葬られる可能性が高い。勿論、アルフォンスの代わりにルーン公となるであろう父の一人息子である自分との婚約も破棄させられる。

そして自分はどのようなだろう？ 父がルーン公になる未来がある場合、それは、義母の父であるバロツク公の力によるものである。バロツク公が、無能なカルシスに力添えをする理由はひとつしかない

い。事実上ルーン家を配下に置き、近い将来に自分の孫、或いは曾孫をルーン公にする為。そして、その為には、自分はバロック公にとって邪魔者でしかない。いずれ、暗殺されるか、無実の罪を着せられて投獄されるか……。父親は勿論助けはくれないだろう。

何もしなければ、自分とユーリンドアの未来は、きつとそんな風になる。だが、そうはさせない……。憎しみ、ただそれだけしか感じられない父親の思うようにはさせない。これは、父親に復讐する無二の機会でもあるのだ。

（ユーリンドア……絶対に、僕は……。僕を信じて、待っていてくれ。例えきみの望むように未来を共に歩めないとしても、きみにとって最上の未来を、きつと……）

「ダグ！」

朝食をとりおえたところでようやく、待ちかねたアルマヴィラ都警護隊長がファルシスの前に現れた。

「手短にお願い致しますぞ」

ダグ・ダリウスをファルシスの室へ通した金獅子騎士ウルブは素っ気なく言い、扉の向こうへ姿を消した。無論、会話を聞く構えである。昨日のアトラウスとの騒動で、監視がきつくなつたようだ。「ダグ、よく来てくれた」

「御前に参るのが遅くなり、申し訳ない」

ダリウスは頭を下げた。この無骨な中年男は、元々身分もない傭兵で、その腕と勤勉さを買われ、今の地位を与えられた者だ。粗野なところはあがるが、決して筋を曲げない気概を持っている、とアルフォンスは高く評価していた。

アルマヴィラには、聖炎騎士団と都警護団というふたつの武装組織がある。

聖炎騎士団は、古き公国時代に国軍であったものの流れを汲む由緒正しいもので、貴族の子弟を中心とする騎士の集団であり、ルーン公に剣を捧げているが、そのルーン公は国王へ剣を捧げているので、ルーン家の私兵ではなく、王国の騎士団として存在する。

一方、都警備団は、身分がなく騎士になれない戦士の集団で、没落した地方貴族や商人の三男四男などいれば、流れ者の傭兵たちもいる。これは純粹にアルマヴィラの治安を維持する為の組織で、ルーン家に賄われる私兵集団である。

騎士団は警備団を下に見てはいるものの、挑発等は一切固く禁じられており、両者に表立った反目はなく、協力し合う立場である。

現在、聖炎騎士団も警備団も、アルマヴィラに駐留する金獅子騎士団の監視のもとに置かれている。数の上では当然、金獅子騎士団の

騎士に勝るが、彼らが反乱を起こすとは金獅子騎士たちはあまり考えていない。彼らの盟主ルーン公は既に金獅子騎士団の掌中にあるのだし、何よりそんな行動をとれば、王都から軍勢が送られ、裁判の結果を待つまでもなく、ルーン家はとり潰されるだけの話であるからだ。金獅子騎士たちは、ルーン家側の要人の監視に人手を割かれ、動揺が広がるアルマヴィラ都民の抑制には、聖炎騎士団と警護団にあたらせている。無論、両団の上層には監視をつけている。そのような状況下で、ダリウスが動き難い事は、ファルシスにもよく判っていた。だが、聖炎騎士団長のハーヴィス・ウィルムと違い、金獅子騎士たちはダリウスの事は、傭兵の隊長程度と侮っている。そこに、つけいる隙はある筈とファルシスは考えている。

「都民の様子はどうか？」

「かなり混乱しているようです。まだ、暴動等に至る様子は見られません。今後の成り行きによっては、そういう可能性も考える必要があると思います」

むっつりとした表情のまま、ダリウスは答えた。ファルシスは溜息をついた。

「父上はアルマヴィラに於いては常に民のことを一に考えておられたというのに、あっけなく変わるものなのだな」

「仕方がありません。未曾有の事態ですから」

淡泊に感じられる警護隊長の応えだが、その奥には押し殺した焦燥を感じ取れる。彼の仕事は、ルーン公の命により、都民を護る事だが、その都民がルーン家に危害を加えるような事態になれば……？ まさに、未曾有の事態である。

「都民たちは、父上の有罪を信じているのか？」

「それは、様々だと思います。多くの者は、未だ殿への信頼を捨ててはいません。しかし、カルシス卿単独ではなく、大神官も加わった告発であるという事が、民の心を迷わせています。皆、敬虔なルア信者ですから」

「そうか……」

確かにそれは大きい、とファルシスも思う。近い親類である大神官ダルシオン・ヴィーンは、かれをよく知るファルシスにとっては、一人の生身の人間であり、ヴィーン家の愚かな当主ノイリオンの弟という側面が大きい。民の多くにとっては、国王に匹敵する程の雲の上の存在であるのだ。

「お耳に痛いかも知れないが、大神官の言葉はルルアの言葉であるのだから、国王の裁定など待たずともルーン公の有罪は確實、すぐにでもルーン公邸に押し入ろう、という輩もいる、と配下の者が聞いてきました。カレリンダ様は聖炎の神子であるから、御身に危害が加わる事はないと思います。若や姫君の安全については、とにかく最優先にお守りせねば、と思います」

「……。ぼくはいい。妹を、どうか、頼む」

やややすれた声でファルシスは言った。ダリオスの言葉は、もやもやとした不安を凝縮した刃のようで、心臓を貫かれた心地がした。そういう危険が実際に迫ってきているのだと、改めて突きつけられ、苦しかった。自分は自分の身を守る力を持っているし、暴徒などに殺されてしまうのなら、それだけの人間でしかなかった、という事だ。だが、妹は？ 護られ、愛される事と愛する事しか知らない無力な妹が、暴徒に引き出されることなど、想像するだけで恐ろしく、総毛立った。

「そうだ、アトラウスは？ ……実は、昨日、彼とはちょっとした喧嘩をしてしまったんだが、しかし、彼は母と妹を護ると言っていた。何か……知らないか？」

昨日のアトラウスのメッセージを不意に思い出し、ウルブが聞き耳を立てている事を意識しつつも、ファルシスは問うてみた。母と妹の身を案ずるのは当然の事で、この質問を聞かれてもまずい事はない。

「昨夜、街でお会いしました」

アトラウスの名を聞いたダリオスの声が僅かに上ずった。金獅子

を気にしているのだろう。

「街で？」

構わない、というように目で合図しながら、ファルシスは聞き返した。

「そう……街で、警護隊の本営で。様子を見に来られたのです」

「かれは、出歩いて危険はないのか？」

「アトラウス様は、カルシス卿のご子息ですし、金獅子騎士が護衛にっています。それに、その……黄金色でない、という事もあって、害意を持つ者は殆どないと思います」

「そうか」

「殿もカルシス卿も不在で、若は軟禁の身。身分の上では今、アルマヴィラを統べる仮の領主、とでも言える立場のお方です。金獅子騎士団の面々もそれを認めています。尤も、金獅子の意に背くような事は無論出来……なさいませんが」

「なるほど」

ダリウスはこの事を伝えに来たのだろう。思ったよりずっと、アトラウスは自由な動きがとれるらしい。

「ぼくの事を何か言っていたか？」

「若の機嫌を損ねてしまったと……心ない事を言ってしまったので、しばらく許してくれないだろうと……しかし、もし若にお会いしたら、ご自身の誠意を信じて欲しいと伝えてくれと、仰っていました」
「……そう簡単に許せるものか。あんな奴だとは思わなかった。しばらく会いたくない、と伝えてくれ」

『金獅子どもには、僕と君の仲が決裂したように思わせた方が、動きがとりやすい』

あの文面を心でなぞりながら、ファルシスはむくれたように言いつつ、まなざしでダリウスに了承の意を伝えた。

「承知」

ダリウスは頷いたが、これはファルシスの言葉でなく意を汲み取ったの合図だった。

「だが、アトラウス様と、早く仲直りなさった方がよいかと」

「放っておいてくれ。折角来てくれたのに済まないが。また、都の様子を知らせに来てくれるな？」

「それは勿論。……では、これで」

ダリウスが扉を開けると、すぐそこにウルブが立っていて、冷笑を浮かべながら、お役目ご苦労でござるな、と嫌味っぽい言葉を投げかけてきた。つまりぬ男だ、と思いながら、ダリウスは軽く頭を下げて、室を後にした。

ダグ・ダリウスは、ファルシスのもとを辞したあと、まっすぐに警護隊の本営に向かった。予期していた通り、アトラウスの姿があった。

「おはよう。ファルの所へ寄ったのかい？」

「は、アトラウス様」

「僕の言った事は伝えてくれた？」

「はい。若は、その、しばらく会いたくないと……」

そう言いながら、僅かに首を振り、これはここに陰ながらある金獅子の耳に聞かせる為の言葉で、真意ではない、と目で伝える。アトラウスは理解したようだった。

「そうか、まだ怒っているのか。まあ、仕方ないな」

「適当な相槌をうつて、

「他には？」

と促す。

「自分の事はいいから、姫様を護るように、と……」

「もちろん、彼女は僕が護る。そのところは、もっと信頼してくれるように、明日また話しておいておくれ」

「は、わかりました」

ダリウスは小さく頭を下げた。あるじは、取り立ててくれたルーン公。もとは傭兵の身ではあるが、忠信は揺るぎない。だがいまは、軟禁されて力のない嫡男ファルシスより、この『ブラック・ルーン』に従うしかない。ダリウスは単純な男であったので、武芸の腕前をあまり披露しないこの公子を心中軽んじてきたが、この局面に来て、ファルシスの目を奪われる華麗な剣芸よりも、アトラウスの知能のほうが、生き残る上で重要なのだと思い知らされつつあった。

実際、今までアトラウスに心服していなかった者の多くが、かれを頼りにしつつある。もしもアルフォンスがいなくなれば、ルーン

家はバロツク家の傘下に入った上で、カルシスが当主となるであろう。だが、カルシスの短慮、無能は皆知り抜いている。穏やかな知性を備えたこの嫡男、黄金色もバロツク家の加護も持たず、いずれは排斥されるとしても、いまは何より頼るべき存在と、たった一日のうちに騎士や護士たちは、悟りつつあったのだ。昨朝、謹慎を解かれてからの彼の行動は、目を瞪るものがあつた。騎士団や警護隊の本営を忙しくまわり、いつ暴動が起きてもおかしくはないほど不穏なアルマヴィラ都の治安を守る為に的確な指示を与え続けた。

金獅子騎士たちは、仮に暴動が起きれば、武力でそれを制圧するのみ、と考えている。民衆の暴動など、国王直属の騎士精鋭をもつてあたれば、難なく鎮圧できる。

だが、アルマヴィラの騎士や警護士は、民衆とぶつかりたくない。その思いを同じくした上で、アトラウスは、暴動を止めるべく奔走した。まだルーン公の罪は確定した訳でなく、大神官ともども、何者かに陥れられている可能性が強い、だが、聡明な国王は恐らくすべてを明らかにし、罪ある者を裁くだらう……そんな風に、噂を流布し、民衆をなだめたのだ。

「アトラウス様！ 面会を求める貴婦人がいらしております」

警護士の一人が駆け寄り告げた。

「貴婦人？」

「それがしはこれで」

ダリウスは席を外そうとする。

「レディ・ローゼッタ・ドースがおみえです」

「……会おう」

ローゼッタはファルシスのかつての恋人で、アトラウスとは親しい仲ではない筈だ。ダリウスは好奇心を刺激されたが、アトラウスは領いて退出を許したので、その場に止まることはできなかった。

目立たぬような装いながらも柔らかな香水を纏った令嬢の姿は、男臭くものものしい空気の本営にはまるで似つかわしくなかった。

すれ違いながらダリウスはなぜか、場違いなその存在に不吉な予感を覚えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0024w/>

炎獄の娘

2011年10月20日08時24分発行